

326.5
Si298k



0016379-000

326.5-Si298k

国際行刑会議報告書集

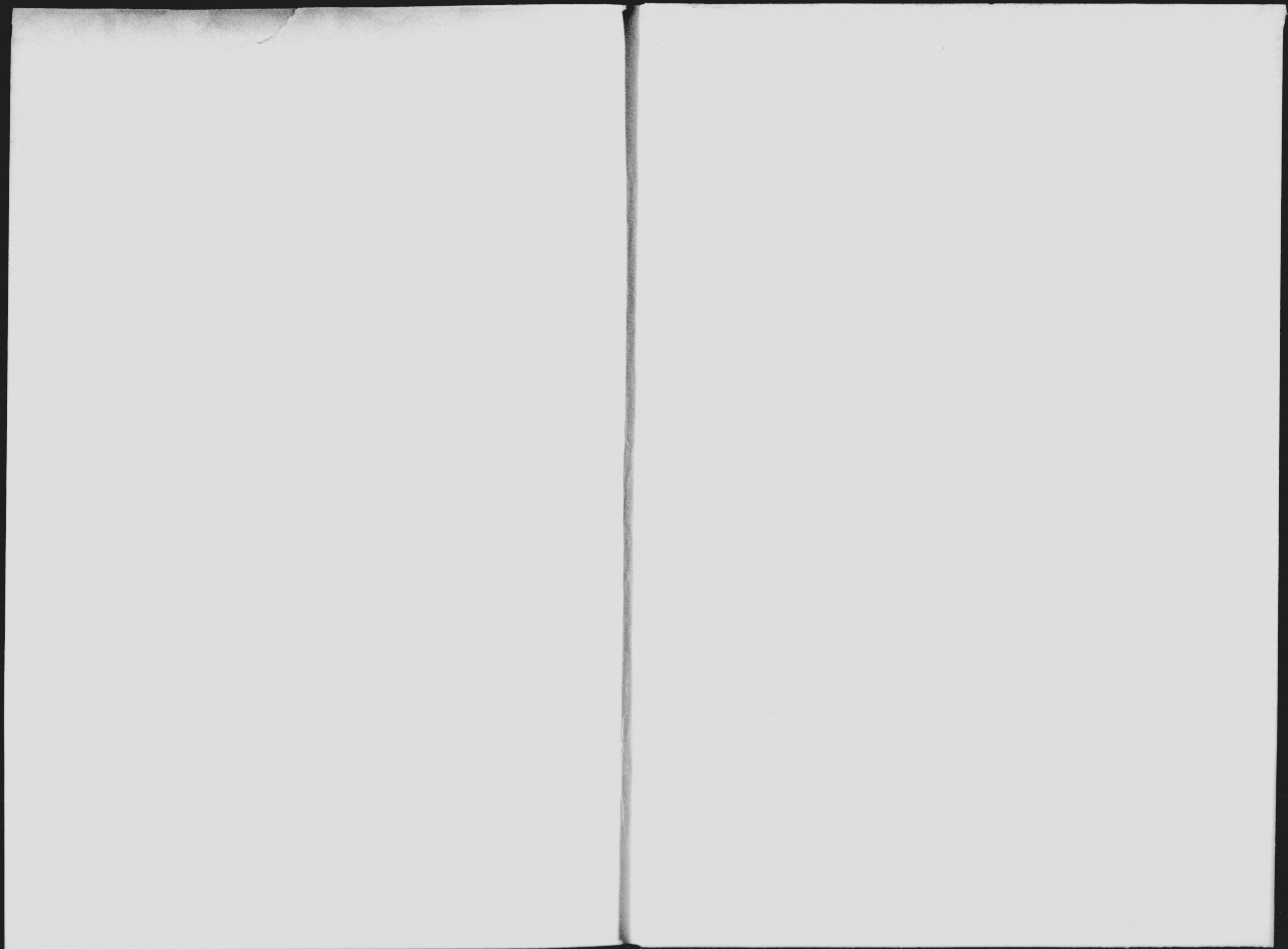
司法省調査課・訳編

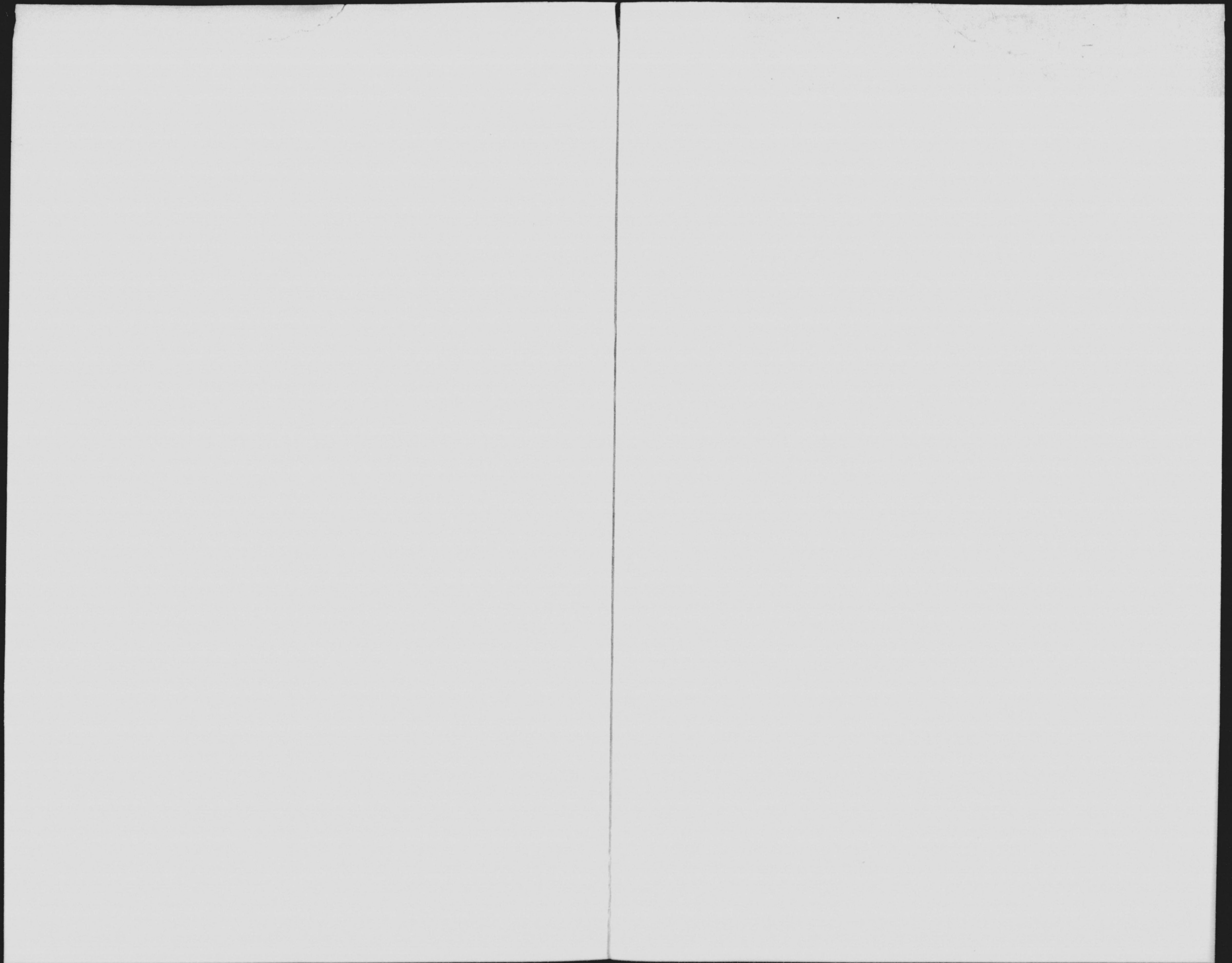
司法省調査課

第5-7

1930

ACG





工 4586

料 資 法 司

號 六 十 五 百 第

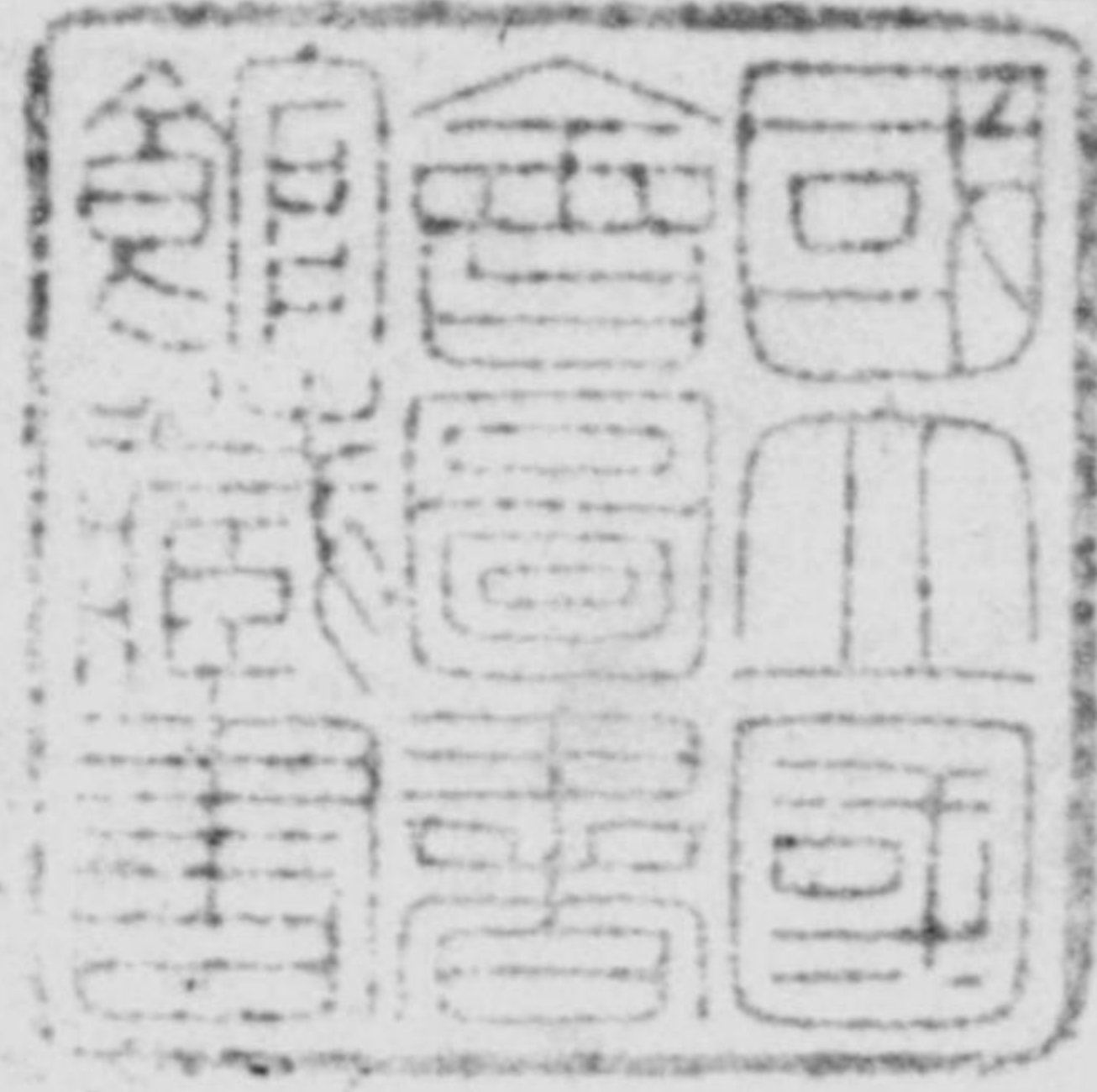
國 際 行 刑 會 議 報 告 書 集

五

〔禁轉載〕 昭 和 五 年 九 月

司 法 省 調 查 課

326.5
S1298 R



418833

本号には本資料第九十九、第一百十二、第一百十三號の續篇として倫敦行
刑國際會議に於ける設問中第二部第三問及第四問を分輯し筆寫に代
へて排印す

昭和五年九月

司法大臣官房調査課

目次

二部 第三問

- 一、報告者 英國英蘭及ヒガル地方中央刑務會議々員エイ・パテルソン……………(一)
 - 二、報告者 英國蘇格蘭中央刑務會議議長ロード・ボルワルス……………(二三)
 - 三、報告者 伊國ビネロル辯護士リドイヤ・ポエト嬢……………(二三)
 - 四、報告者 米國フライングハム矯正院長ヂエツシイ・ドイー・ホツダ夫人……………(三三)
 - 五、報告者 米國ラエイ矯正院長フランク・ムアー……………(四三)
 - 六、報告者 瑞西國キツキル懲治場長オット・ケレルハルス……………(五一)
 - 七、報告者 瑞西國行刑局長ギクトル・アルムキスト……………(五九)
 - 八、報告者 チエコ・スロヴキー國マサリク・デ・ブルノ大學法學部教授法學博士
チアロスラヴ・カラブ……………(七〇)
 - 九、報告者 蘭國司法省保護局監察官ゲ・ファン・エルツエリン嬢……………(八六)
- 二部 第四問
- 一、報告者 佛國免囚新教徒保護會幹事長エチエンヌ・マツテル……………(九五)

二、報告者 佛國オルレアン控訴院附辯護士前アルサス・ロレーヌ行刑局長法學
博士レオン・バルテス……………(一〇一)

三、報告者 伊國羅馬控訴院檢察長代理兼司法省課長ア・スバランザニ……………(一一八)

四、報告者 白國フォレスト刑務所長エルネスト・ルグラン……………(一二〇)

五、報告者 米國アケルシユス中央刑務所長アキセル・スメタル……………(一二九)

六、報告者 勃國司法省刑事局長ウラドイミル・エヌ・アヴフモツフ……………(一六五)

目次(終)

司法資料
第百五十六號
國際行刑會議報告書集 五

第一部 第三 問

それぞれ被拘禁者に相當せる別異の處遇方法を適用せむかために、
その性格乃至言渡されたる刑又は所犯事實の輕重に従ひて、彼等の類
別を爲すことを適當とするか。そしてこれかためには、刑務施設に如
何なる改整を必要とするか。

I

報告者 A. Paterson,

Membre du Conseil-directeur des prisons de l'Angleterre et du pays de Galles, Londres.

かくのとき主題に於ける考案の諸點は相互に相交錯する。そして相互の關聯に於てこれを精密に考察し、説明することは、必ずしも常に容易ではない。分類の見地に於てそれか考察されるとき、各被拘禁者は、何れも次きのとき範疇に於て、十個の異りたる個人を代表し得るであらう。

- (1)、彼れの性に從ひて
一男子
- (2)、彼れの年齢に從ひて
一成人
- (3)、司法手續に從ひて
一受刑者
- (4)、彼れの犯罪性の程度に從ひて
一累犯者（この用語は、この場合、既に嘗て均禁刑の執行を受けたること存る者を意味する）
一マホメット教徒
一結核患者
一精神的見地に於ける一變質者
一放火犯人
一農業勞働者

- (5)、裁判所の決定に從ひて
- (6)、彼れの宗教に從ひて
- (7)、彼れの肉體状態に從ひて
- (8)、彼れの精神状態に從ひて
- (9)、犯罪の性質に從ひて
- (10)、職業の種類に從ひて

この十個の範疇は何れも區別の異りたる一基礎によりて決定されたものである。そしてそれ等の各基礎

は更らに類別の手段にも等しく供用され得るものであらう。しかしながら、若しも凡てのこれ等の區別が忠實に考察されたならば、被拘禁者の間には、彼等の各自に對して、特に彼のためにのみ作られたる一刑務所若しくは刑務所の一部を必要としたであらうほごにも、爾かく複雑なる一多様態か認められるに至るであらうことは確かである。

それ故に、ここに必要なることは、これ等各種の公準を査定して、その何れか最も重要なものと看做されねはならないかを決定することである。性、犯罪の程度及び年齢に基きたるそのとき諸範疇は一つの公理から出發するものである。従つて近代社會に於ては、何れにしてもこれ等の範疇を無視して、爾餘のものに優越性を認める譯けに行かないのは言ふまでもない。固より、醫家は刑務所の經理及び工業のそれとは矛盾するような要求を型成するてもあらうし、經濟の見地に立つたものは、また自のつからその立場を擁護するてもあらうか、しかし傳染の明白なる危険に全然無關心なるかごときことは、また何れにしても輿論の容認を得る譯けには行かないであらう。

結果の實際的價値を目標とする最も簡明なる觀方は、先づ第一に被拘禁者に對する刑務所の職能を、第二にこの職能を果すために刑務所の使用する方法 (method) を検討することに存する。單に拘禁し、懲罰することをして刑務所の目的としたる中世の觀方か若しも支持さるべきであるならば、爾餘何れの點よりも寧ろ經理の便宜に資するの點に、我々は我々の分類の基礎を見出すであらう。しかし、この問題に對する

我々の研究は、更らにより近代的なる原則の採用を前提とする。そしてこの原則に従へば、刑務所は、受刑者かその刑の執行を終りたるとき、自由なる社會生活に順應し得べく被拘禁者を教化することによりて社會を保護すべきその目的を最も克く充實するものたることを要するのである。従つてそこに爲されたる凡ての實證的提案は、何れも被拘禁者に一つの適切なる教育を與へることの必要を基礎とするものである。固より、そこには、經濟と行政上の諸要求とが適當に考慮されるにしても、しかし、主たる目的は、被拘禁者を出來得るかきり、一つの適切なる合理的教化に均霑せしめ得る方法に於て類別することに存するであらう。しかしながら、この教化の方法は種々の様式に於て理解され得る。そして最も一般的に相對立する二つの方式は獨居拘禁のそれと、共同拘禁のそれとである。そこに選擇せらるべき分類の主義かまたこの拘禁方式の選擇に關係するてあらうことは明白である。例へば、若しも各受刑者は何れも或る年限中、他の何れの囚人とも接觸せざるべき方法に於て、一つの別房中に拘禁されることになるならば、この場合、被拘禁者の類型による分類は毫も明白なる實益を有するものではないであらう。しかしながら、これと反對に、作業と運動とに於て共同生活の完全なる一様式が採用されるとするならば、この場合そこに傳染の危険を避け得るかためには、類型による極めて精緻なる分類か、一つの不可避的條件として要求されることになるであらう。それ故に、この研究の中に含まれたる諸提案は獨居拘禁の理論よりも、寧ろ共同拘禁主義の採用を基礎とするものなることを、豫しめ斷つて置く必要を存するのである。

それ故に、問題は次きの命題に要約される、——一つの共同教化によりて、釋放後の自由なる社會生活に應化せしむべく、能ふかきり最も有效に彼等を準備し得るかために、數千の犯人は如何にして各種刑務施設内に分布せらるべきか？

今や刑務所は教育所と看做されねはならないものであるにしても、しかし各個人はその逮捕の日から、直ちに彼れの教育期間を開始するために刑務所に送附され得るものではないことは明白である。そこには彼れの刑事手續の終了まで彼れの收容され得る場所、及び彼れの有罪判決後、適當なる教育所に移送される前に、適當に彼れが診査され且つ類別され得る場所を存せねはならない。加之、例へば數週若しくは數月の刑しか言渡さない裁判所の判決によりて、その期間が短縮されざるを得ない場合には、また一つの教育に就いて云爲することは不可能である。ここに於て、言渡されたる刑が六ヶ月以下若しくは（累犯者の場合に於ては）十二ヶ月以下にかかる受刑者は「拘禁所」に拘禁せらるべく、その他の者は「教育所」に送附せらるべきであらう。それ故に、刑務所の管理の下に置かれたる各種施設は、明確に異りたる機能を有する二つの主たる階級に、必然的に分別されねはならないことになるのである。

A 拘禁所

これ等の施設は多數範疇の被拘禁者を種々の理由のために、短期間收容することを目的とするてあらう。

そしてこの範疇に屬するものは、次きの二つのものである。

(a)、刑事手續の進行中に屬する者

(b)、債務者

(c)、如何なる教育的考案をも試みるの餘地なき短期刑を言渡されたる受刑者

(d)、適切なる教育所に送附される前に、検査及び分類の手續に服しつつある受刑者

(e)、移民地發遣手續（流刑）中の受刑者

人口稠密なる各地方の中心にして裁判所に便利なる近接地に、一つの拘禁所を存することを必要とするであらう。

上記五個の範疇は次きの三つの補足的考察によりて累加される、(1)、年少者か成人か、(2)、男子か女子か、(3)、犯罪性の程度か即ちそれである。かやうにして、單に一拘禁所内に於ても、被拘禁者の階級別は恐らく四十以下に下らないことになり得るであらう。しかしながら、そこに爾かく嚴正なる一つの分類の實行を期することは極めて困難なことであり、また必ずしもその必要を存するものでもないであらう。單に極めて短期間しか拘禁されない被拘禁者の場合に在りては、作業以外に於て、左まで大きな共同拘置の部分を存する必要はないし、そして傳染の危険は比較的僅小なのであるから、彼等の共同拘置は、或る特殊の類型に屬する被拘禁者か多少とも異りたる他の類型に屬するそれ等と共同に拘置されるほどに重大なる

ものてないことを、先づ我々は注意し得る。同時に閑却してならないことは、男子又は女子か始めて入監するのはこれ等の「拘禁所」であること、未だ嘗て收監されたことのない無垢なる者か刑務所に慣熟せる者によりて惡習を傳染せらるべき何等かの危険を伴ふ刑罰を執行されてはならないことである。各種の考慮の間には自のつから輕重の別を存せねはならぬ。凡ての觀點に一樣の重要さを認める譯けには行かない。かやうにして、爲さるべき第一の類別か男女の間のそれであることは明白であらう。そしてこの類別に次いで、最も重要な區分の基礎を成すものは既決囚と未決囚との間の區別である。未決囚か凡て既決囚から隔離されねはならないのは固よりとして、尙ほその罪責か未だ確定されないものであつて、而かも初めて刑務所の門を潜りたる者に對して爲され得る最も不良なる取扱は、等しく未決の囚人であつても、而かも以前既に數度入監したることある被拘禁者と、日々これを接觸せしめることである。一つの類別の見地に於て、初めて入監したる者と例へば既に四十回も入監の經驗を有するものとの間の差異は、既決囚と未決囚との間の一つの一般的區別よりも、遙かにより重大なる意義を有する。それ故に、先づ男女の間に第一の類別か爲された後に、考察せらるべき最も重要な點は、既に前に入監の經驗を有する者と、これなき者との間に於ける區別であらう。この二つの類別の基礎は爾餘凡てのものに對して先位を占めるであらう。かやうにして、一つの拘禁所に在監する病囚に就きて、若しも男女各別に二個の病監を存し、且つ各病監か何れも二個の病室を有するときは、被拘禁者か未決囚たると、移送又は殖民地發遣準

備中のものたるも、若しくは一つの短期刑の執行中に屬するものたるを問はず、その病室の一つは凡て未だ前に入監の経験なき被拘禁者のために保留さるべきであらう。

一拘禁所は必然的に極めて多種に亙る男女の一大集團を包容する。それ故に、これを各種の施設に分布するかごとき方法に於て行はれる一つの分類は、全然不可能である。そこには、我々か上に指示したかやうな若干の原則が守られねばならないであらう。そしてこの拘禁所の建物は寧ろ放射線的構造に従ひたる一列の監舎を包容する様式に於て造營されることによりて、類別の便宜に資すべきものであらう。平均五〇〇人の收容能力を有する一拘禁所には、次のごとき監舎別が相當とされるであらう。

女囚に對する監棟——三

(a)、初めて入監したる者

(b)、累犯者

(c)、初めて入監したる被拘禁者と累犯者とに對して各別の病室を有する病監

男囚に對する監棟——七

(d)、初めて入監したる年少未決囚

(e)、初めて入監したる成人未決囚

(f)、初めて拘禁刑の執行を受くる年少者

(g)、初めて拘禁刑の執行を受くる成年人

(h)、累犯年少者

(k)、累犯成年人

(l)、初めて入監したる被拘禁者と累犯者とに對して各別の病室を有する病監

收容力のより乏しき拘禁所に於て、分別されたる十個の監舎を要求することは、或ひは過當であるかも知れない。この場合には、監舎の最小限度を四とし、たた性と累犯とに關する分別にのみ完全を期すべきであらう。この場合、基本的ならざる類別は、決して確實なる隔離方法ではないか、しかし、隔壁と閉扉との助けによりて、或る程度まで實現され得るであらう。

B 教育所

拘禁所は必要である。そして各入所者、殊に初めて入所したる者に對して、彼れに適應する處遇を確保すべく、そこには可能なる凡ての注意が須められねばならないであらう。若しもこれ等の施設が不良に管理されるならば、その害悪は甚大である。しかしながら、最も有效なる管理にしても、尙ほ實際に或る幸福なる再生を齎し得ることは罕れてある。眞にこの事業が遂行されるのは、本來の意味に於ける刑務所、即ち「學校」に於いてである。そして分類はそこに於て二重の目的のために役立つであらう。先づ第一にそれは悪性者から薄志者への感染を防止すべき純消極的目的のために役立つ、第二に、教育の思想に基き

たる一つの分類は、同一型の教育の必要を有する被拘禁者をのみ同一場所に集合せしめる實益を有するてあらう。かくのとき作用によりて分類は刑務所の再生事業に直接貢献することになるてあらう。

教育の各種の形式の間に爲さるべき主たる區別は、年齢の差異を基礎とする。苟くも聰明を失はざるかきり、我々は決して成人を遇するに少年に對する處遇を以てし、またはその反對を取てするものではないてあらう。それ故に、そこには、年少者に對する教育施設と成人に對するそれとの間に、一つの主要なる區別を存するてあらう。年少者に對する教育施設は刑務所の特徴よりも、寧ろより多く正確に「學校の」特徴を有するものであらう。何故なればこれ等の施設は、その凡ての細目に於て學校の性質を帶有するからである。この二種の教育中樞は、犯罪の類型によりててもなく、また刑期の長短に従ひててもなく、寧ろ犯罪性の程度に従ひて、更らに再分される。初めて處刑せられたる初心の拘兒を老練なる拘摸の常習者と混在せしめることは無益でもあり、また危険でもある。蓋しこれによりて、後者の惡習は直ちに前者に感染することになるてあらうからである。それ故に、兩者はそれそれ別種の教育の必要を有する。そして何れにしてもこの再分類の分別的標準は、現實的處刑數よりも寧ろ犯罪性の程度の強弱に存するてあらう。何故なれば、そこには、初めての有罪判決であつても尙ほ數十回の犯罪を構成するものなることの確認され得るかとき犯罪——例へは通貨偽造、贓物受寄、墮胎のとき——を存するからである。そしてかくのとき場合には、一つの適當なる取調への後に、被拘禁者は累犯者と同一視され、そして刑務所常

習者の中に列せられることになるへきてあらう。

ここに於て、教育施設に於ける我々の類別は大體次のときものとなるてあらう。

A、年少者（二十一歳以下？）

- (1)、初犯者
- (2)、中間者
- (3)、累犯者、即ち既に教育の種々の形式に服したる被拘禁者
- (4)、不適者、即ち肉體的又は精神的に、他の部屬の積極的教育に適せざる者。これに對する制度は、一、二及び三級を代表する尠くとも三個の教育所に分別されるてあらう。

B 成人

- (1)、初犯者
- (2)、中間者（即ち二十一歳以上三十歳以下の累犯者）
- (3)、累犯者、そこには普通の累犯の三段階か認められるてあらう。
 - (a)、即ち種々の理由によりて數度刑務所に復歸するもの
 - (b)、別に犯罪を以て生活の手段とすることなき惡性犯人
 - (c)、職業的惡性犯人

(4)、不適當者 (Aの(4)に擧げたるかゝる者)

(5)、相對的自由の諸條件の下に、不定期間拘留せらるべき犯人。この階級は小犯罪の累犯者並びに反覆してより重き罪を犯したる者を含む。

實際に於ては、各個の場合に於て、全然論理的に、分類の或る與へられたる制度に忠實であることは殆ど不可能である。大多數の國に於て、拘禁刑に處せられたる女囚の數は、これを上記のとき九階級に分布し得るかためには、餘りに少數である。この點に於て、常識は一つの中間的解決を供給するてあらう。支持すべき根本的差別は年齢のそれである。何れにしても、彼等の犯罪性の程度に従ひて分別されたる適者及び不適者を包容する少女に對して、一つの場所か留保されることを要するてあらう。成人女子の數は他の一個の建物を以て足りる位ひの制限されたものであり得るてあらう。そしてこの場合には、多種の類型に於ける分別を爲すために、監棟 (blocks) 又は散在監舎 (villas) による構造を採用することによりて、一つの類似の注意が取られることを必要とするてあらう。

上記のとき分類の基礎を確立したる主たる目的は感染の危険を防止し、且つ各被拘禁者をそれぞれ彼れの場合に適合する教育方法に分布することである。しかし、假りにこの分類制度が採用せられたにして

も、尙ほそこには、經理、作業、保健、教誨等の方面より生ずる要求と調和するために、幾多の困難が見出されるのは言ふまでもない。試みを値する凡ての事業と同様に、またこの考案の實現と完成とを決して一つの容易なる事業でない固より確かである。

II

報告者 Lord Polwarth,

Président du Conseil-directeur d's prisons de l'Ecosse, Edimbourg.

スコットランドに於て、それか現今存するかとき被拘禁者の分類は科學的若くは合理的なる如何なる主義にも基いたものではない。そしてそれは新法律の公布と刑務所制度の中に於ける異りたる近代的方法の施行とのまにまに、多少とも不規則的なる方法に於て發達して來たものにすぎない。それは立法と舊來の實踐とから獨立に、新たなる科學的所與に基いて採用されたる凡ての制度とは全然相違するものである。最も多數を占める被拘禁者の階級は、所謂「通常被拘禁者」、即ち五日以上二年以下の刑の執行中に屬する凡ての者及び言渡されたる罰金支拂の能力なきかために拘禁刑を執行せらるる者のそれである。これ等の被拘禁者は、大體に於て、常に被拘禁者總數の約三分の二を代表する。この階級の中には更に一つの

補充的小區分が爲された。この區分に從ひて、それか認知されるかきりに於て、初めて拘禁刑の執行に服するものは、多少とも通常被拘禁者から隔離され、そして彼等に對しては、「初犯者」の名稱か附せられて居る。通常被拘禁者中には、その一部分として「徒刑」囚（“Hard Labour”）を存する。しかしながら、これは實際に於ては毫も重大なる意味を有するものではない。何故なれば、凡ての被拘禁者は彼等の能力に從ひて何れも作業を課せられて居るのであつて、徒刑囚と爾餘の囚人との間に今日存する唯一の差異は前者か彼れ等の刑の免除を與る前に服するを要する定役か分量的により大であるといふ一點に止まるものだからである。しかし、實踐に於ては、この差異は殆ど閑却されて居る。そしてこの差異はまた恐らく廢止され得るものであらう。この差異は、かの囚人の多くに對しては如何なる勞役も強制されて居なかつたのに反して、獨り徒刑囚には、車輪の一定數の回轉を爲さしめるかことき厳しき定役か課せられたる時代の一遺物に過ぎないのである。

三年又は三年以上の拘禁刑に處せられたる者は所謂「懲役」受刑者（“Penal Servitude”）であつて、「懲役囚」（“Convicts”）と呼ばれて居る。この範疇は、これ等の囚人か獨房に分割せられたる船舶上に拘禁せられ、そして要塞の築造及その他この種の作業に使役せられたる時代の一遺物である。スコットランドに於ては、現今、懲役受刑者は僅かに被拘禁者總數の十パーセント以下を代表するに過ぎない。「懲役」の言渡は三年以上無期の全期間に及ぶものであるか、しかし、「懲役囚」は善行と勤勉によりて、彼等の

刑の四分の一の免除を受け得るのであるから、被拘禁者の大部分に取りて、三年の刑は實際に於て、二年三箇月にしか達しないことになるのである。

「懲役囚」は、大部分、ピーターヘッド（Peterhead）の特別監に收容されるのであるか、しかし、また一部分は普通刑務所に拘禁される。懲役囚は主として、道路及び堤防工事に於ける監外作業に使役される。スコットランドに於て、懲役囚に對して存する唯一の公的類別は、慣行性犯人より受ける感染を防止し、且つ出來得るかきり他のものから隔離する目的の下に彼等の身分帳に前科の記載なき受刑者を「優良級」（Star Class）と呼ばれたる一つの特別階級に編入することに存する。尙ほそこには、良好なる行狀と作業成績によりて獲得したる點數に從ひて或る特典を享受せしめる左して重大ならざる階級別を存する。「懲役囚」か刑の免除を得るに充分なる點數を得たるときは、彼等は、その殘餘刑期中、一つの假釋放狀に基きて釋放される。この假釋放狀は、別に彼等か住居するを要すべき地をも、また彼等か従事するを要すべき仕事の種類をも指定しない。それはたた彼等か定期に警察に出頭する義務を要求するに止まるものである。

一つの新法律、即ち一九〇八年の「犯罪豫防法」(The Prevention of Crime Act) は被拘禁者、就中「豫防拘禁囚」(Prevention Detention Prisoners) 即ち裁判所によりて「慣行性犯人」たることを發見され、そして一つの「懲役」の言渡以外に、更らに豫防拘禁の言渡を受けたる被拘禁者の二つの新たな階級を認め

た。一つの豫防拘禁刑は其の期間に關して不確定である。そしてこの刑に處せられたる者は、それかこのために任命されたる特別委員會によりて上申されたるべき、假釋放に基きて釋放される。この場合、彼等にはその居住地とその勞働の種類とか指定される點に於て、また彼等は、彼等に關して毎月一つの報告を爲す義務を有する一保護者の監督の下に釋放されるものたるの點に於て、彼等の假釋放は、通常「懲役囚」のそれと異なるものである。假釋放條件の凡ての違反は、假釋放の喪失と刑務所への即時送還を招來する。豫防拘禁囚の總數は極めて僅小である。現今、スコットランドに於けるその總數は僅かに十二名に止まる。

同一の法律はまたボルスタル制度を創定した。この法律に従へば「犯罪的常習若しくは傾向を有し、または惡評ある人々と交通する」十六歳以上二十二歳未満の年少者に對しては、その處遇を彼等の改善と犯罪の鎮壓とを招來するに可能なる凡ての機會を與ふべき性質の一つの教育と一つの訓練とに制限することによりて、三年を超へざる期間、拘禁處分の言渡を爲し得るのである。これ等の年少被拘禁者は、男女を問はず、特別の施設に收容される。そしてこれ等の施設内に於て、彼等は、種々の點に於て、普通刑務所のそれよりもより寛大なる規則に服する。彼等は豊富にして良好なる糧食を給與される。彼等には彼等の能力に従ひて一つの職業が教習される。また彼等には體操と軍事教練との多分の課程並びに自由なる年少者か補習學校に於て受けるところのそれに幾分類似せる一つの學校教育が與へられる。ボルスタルの寄

宿生——彼等は世間からかく呼ばれる——は、若しも彼等の釋放によりて爾後彼等に凡ての非行が斷たれそして有益にして勤勉なる一つの生活が營まるべき合理的可能性の存することか刑務委員によりて確證されるならば、六箇月を経たる後、(女子の場合には三箇月)、何時にても假りに釋放され得る。實際に於ては彼等は通常、假釋放前二年間拘置される。彼等の假釋放は彼等を一保護者の監督の下に立たしめる。彼等の居住地は指定される。そして假釋放期間中彼等の監督の任に當る監督者から、その所屬刑務委員に宛てて、彼等に關する報告が定期に提出される。若しも彼等の行狀が満足ならざるときは、假釋放は取消されそして彼等は再び施設に送還され得る。この規則は極めて嚴正に勵行されて居る。従つて善行の持續のみか釋放の繼續を保證することになるであらう。スコットランドに於て收容されたるボルスタル寄宿生の總數は男子約二四〇名、女子約三〇名に達する。

スコットランドに於て、刑務委員は等しく彼等の監督の下に約七十名の心神喪失犯人を有する。そしてこれ等の心神喪失者は受刑中に癡狂状態に陥りたる者又は彼等に對する刑事手續に於て癡癲と認められ且つ不定期に監禁せらるべき言渡を受けたる者を包容するものである。

スコットランドに於ける被拘禁者の最大多數を構成するものは通常被拘禁者であることか確認される。所犯の輕重又は有罪判決によりて確定されたる刑の長短に従ひて確定されたる凡ての嚴正なる分類は決して有利ではあるまいと考へられる。後段私の主張せんとするように、通常被拘禁者と「懲役」受刑者と

の間に現今爲されて居る區別は廢止さるべきものであらう。そして彼等は凡て一樣に被拘禁者と呼ばれ且つ刑期の如何に拘らず凡て被拘禁者として處遇せられ、たゞ恐らくはその間、長期刑に服する被拘禁者には、彼等の善行に對して、一つの短期刑に服する被拘禁者に於けるよりも、より大なる部分の刑の免除を與へ得べきものとする差異のみか認めらるべきであらう。被拘禁者の收容せらるべき刑務所若しくは彼れに課せらるべき作業を決定するに當りては、固より刑期か考慮され得るであらうし、またその必要をも存するであらう。蓋し、そこには、數日の短期刑を執行するには完全に適當なるもので在り得ても、一年若しくは一年以上の刑を言渡されたる受刑者を拘禁するには全然不適當なる刑務所を存するのは明白である。しかしながら、一刑務所より他の刑務所に或る被拘禁者を移送することは、刑務委員若しくは行政官廳の裁量に委せられたる一行政行為たるべきものであらう。そしてそれは判決を言渡す裁判所によりて決定せらるべきものでもなければ、また犯行の性質に従ひて確定せらるべきものでもないであらう。或る重き罪によりて一つの長期刑の執行を受けたる者か、更らに或る微罪に就きて言渡されたる一つの短期刑の執行に服するために、再び刑務所に復歸するのは、しはしは生ずる事實である。この場合、犯人の道德性には依然として變りはない。そしてこの場合、彼れかその所犯の輕重によりてはなしに、彼れの性質に従ひて處遇せらるべきものは明白である。この凡ては被拘禁者の一つの精密なる研究の必要を指示する。彼等か初めて或る刑務所に收容せられたるとき、被拘禁者は凡て精密に觀察され且つ研究されねばならぬ

いてあらう。良好なる健康状態を有する長期被拘禁者は、出來得るかきり、屋外作業か供給され得る刑務所に收容されることを要するであらうし、これに反して、虚弱なる健康状態を有する長期被拘禁者は屋内作業に就かしめ得る刑務所に分布されることを要するであらう。

凡てこれに類する個別化の制度は、凡ての等級の刑務官吏か常に用意周到であつて、被拘禁者の性質を注意深く觀察することの必要を包含する。人間の存在は凡て個體として判斷されねばならない。そこには凡ての關係の下に、決して二個の同一人を存するものではない。得點の成績によりて一つの類別を爲すことは不可能である。何故なれば、性質のより不良なる者か、却つて最小の勞苦を爲すことによりて、可能なる最大點數を獲得するに至るまで、爾かく巧みに彼等の行狀を假裝することに成功する例は決して乏しくないからである。最大の希望を與へる場合の一大多數は、その性格か容易に刑務所の紀律に同化せずとして機に觸れて、激怒を發し又は暴行をすらしやすきかとき性質の持主である。經驗上、極めて罕れなる例外は別として——そしてそれは就中一つの不定なる精神状態を有する人々の間に見出される——現今拘禁者の行狀は一般に極めて良好なることか證明された。暴力行為は極めて罕れてある。そして有罪判決の原因となりたる彼れの犯行の如何に拘らず、一つの被拘禁者を公平と正義とを以て處遇することによりて、我々は殆ど常に彼れから一つの善行と踴勉とを以て酬ひられるのである。善行に對して刑罰の或る免除を與へる制度は被拘禁者を善行に導くべき一大獎勵であつた。

固よりそこには常に隔離を必要とする被拘禁者の若干の階級を存するとは言ふまでもない。ポルスタル寄宿生に對しては彼等の教習する職業課程と學事課程との相違を理由として、出來得るかきり、彼等を一つの別個の施設内に、若しくは尠くとも一大施設の或る區劃されたる部分に拘置することか望まざることである。また監外作業の準備を有する刑務所の數は限られて居る。尙ほ、未決囚は常に既決囚から隔離されねばならない。今や殆ど完成に近いて居るエディンバラの新刑務所に於ては、この原則が實行された。この刑務所はそれ約八十名の收容力を有する若干數の隔離監棟から構成される。これ等の監棟の一つは女囚に留保されて居る。そしてそこには接見の用に供せられる監棟と病院とか附設されて居る。爾餘の監棟よりも頑丈なる構造を有し、そして方形圍障帯（逃走をより困難ならしめる特性）の内部に位する一つの他の監棟は、その性格か尙ほ認知されて居ない男囚又は狂暴性を有し若しくは逃走を企てる傾きある男囚の拘禁に當てられて居る。被拘禁者か何れの監棟に收容されるかを決定する權能は、全然刑務所長の裁量に一任される。かやうにして、所長は或る被拘禁者を刑務所の何れかの監棟に配置することによりて、彼の性狀と彼れの行狀とに従ひて、彼れ自身に、一つの内部的類別を行ひ得ることになるであらう。ピーターヘッドの懲役監に於ても近來それか行はれて居るかやうに、例へば共同に食事を取ることのそれのごとき或る特典か與へられるとするならば、これ等の恩惠は特典と看做さるべきであつて、權利と認めらるべきではないであらう。そしてそれはこれを濫用する凡ての者から、何時にてもその取消を爲し得べき

所長の自由裁量に一任さるべきものであらう。

廊下によりて結合されたる分別監棟の構造による制度は、更らに、一つの立法行爲によりて、他日、被拘禁者の新階級か創設せられるてもあらう場合に、同一所長及び同一職員と共に依然同一の一般經理の下に止まるべき一監棟かこれ等の新階級に委付され得べき利益を有する。かやうにして、これは一つの著しき經濟を實現せしめることになるであらう。

エディンバラ新刑務所は汎く各種工場の設備を有する、それ故に、被拘禁者は、醫學上不適當と認定されたる者又は觀察中に屬するものを除くの外、凡て晝間、彼等の監房外に於て作業し得るであらう。そして監房は單に睡眠のためと食事のため——共同食事が許可され居る場合は別として——ごのみ使用されるであらう。被拘禁者の一大多數は刑務所附屬地積に於て作業すべく、屋外に於て使役されるであらう。この制度は勞働者の部屬を定めることに於て一つの新たな類別を可能ならしめるであらう。そしてこの方法によりて、これ等部屬の分布を決定すべく唯一の判斷者たるべき所長は、被拘禁者の間に一つの適切なる選別を爲し得るであらうし、また悪性の慣行性犯人によりての感染の危險を存し得べき場所に、幼年囚又は初犯者を配置することを回避すべき義務を有するであらう。善良なる行狀を有し、且つ逃走を企てるの必要なきかに見える者は、嚴正なる監視の必要を存する者に與へることの不可能なる作業に使役され得ることになるであらう。

この刑務所に採用されたる構造の様式（即ち方形内に於て、分別されたる若干の監棟を、相互に廊下によりて本部の建物に連結したる）は二つの大なる長所を有する。第一に、この様式は信用され得る被拘禁者に、より多くの自由と、より快適なる居住とを與へることを可能ならしめる。第二に、この様式は、たゞ程よき廣さに監棟の建増しを爲すたけて、何時にても建物の擴張を爲すことを可能ならしめる。本部、事務室、厨房等の建物には重要な擴張を爲すに充分なる廣さか與へられた。そしてこれ等の監棟は相互に隔在するのであるから、必要に應じて、これを擴張することは極めて容易である。かくのごとく多數の監棟を監督するためには、多數の人員を要するてあらうことか懸念されるかも知れないか、しかしそれは杞憂である。何故なれば、晝間監房内に拘置する必要がある被拘禁者は、出來得るかきり、單一の監棟内に（女囚を除きて）集中され、従つて他の凡ての監棟は作業時間中全く空虚になるからである。

結 論

私の考へるところでは、理想的分類の制度は、或る被告の有罪判決を言渡すに當りて、裁判所は余りに精細なる方法に於てその者の類別をしないことであらう。言渡されたる刑は法典の制限内に於ける或る期間の拘禁又は年少犯人に對するボルスタル制度若しくは教育施設への拘禁たることを要するてあらう。被拘禁者の類別と分布とは、中央行刑監督機關の指揮の下に行はるへきてあらう。この機關は必要に應じてその權能を各種刑務施設の長に委任すべく、そして所長は一つの諮問委員會によりてその職務を援助せしめ

得るてあらう。この方法は、良好なる行狀と作業成績とに基きて與へられる優良點數に關して、刑務官會議か一つの決定を爲すに當りてボルスタル施設に於て現に行はれて居るものである。作業成績と善行とによりて獲得したる點數の量によりて與へられる刑の短縮（假釋放）に就きては、多少とも劃一的なる一制度を存することを必要とするてあらう。しかしながら、免刑の割合は刑の長短に従ひて相違せしめることが必要であらう。尙ほ、假釋放を受ける凡ての被拘禁者は或る形式の監督に附せられ、そして若しも彼等か假釋放の諸條件に違反するときは、再び刑務所に送還され得るものたることを要するてあらう。

私の考へては、刑務所の種類を完全に備へることは無用である。しかし、反對に、一つの大刑務所内に被拘禁者か彼等の特性と彼等の個別的必要とに従ひて分布され得べき異別の諸部門を有つことは可能であらう。長期被拘禁者の收容に適合しない若干の刑務所は専ら短期受刑者のために使用せらるへく、他の被拘禁者は統制機關の裁量によりて適當の刑務所に移送さるへきてあらう。この制度は經濟の趣旨に合致する。そして私はこれによりて最良の結果か實現されるてあらうことを確信するものである。

III

報 告 者

M^{lle} Lydia Poët,

Avocat, à Penetrol (Italie)

本問は私の考へては少年に對する施設を指標とするものではない。何故なれば、この方面に關しては、既に久しき以來、その出來得るかきりの類別か試みられ、且つ多少とも良好なる結果を以て、凡ての國に於て、極めて興味ある經驗か爲されて居り、そして本國際會議は就中第三部の第四及び第五議題の討議に於て、その方面の研究を期待し得るであらうからである。

本問に對しては、卒直に積極的解答か與へられ得る。——惡性の累犯性犯人を假令所犯事實は重くとも尙ほ一つの根強き墮落を示すほどの特別な性格を表現しない初犯者との混在より生ずる危険に就きて爲されたる長い間の苦い經驗は、初犯受刑者（若しくはより輕き罪に於ける累犯者であつても）と、寧ろ刑務所の常習寄寓者として惡性の極めて根強き累犯性犯人との接觸を回避する一つの分類の極めて緊切なる必要を實證した。

この類別は、一部分、犯罪事實の輕重と犯人の表現する社會的危険の程度とに従ひて刑罰を差等附ける刑法自體によりて爲される。しかしながら、それか個人的隔離を招來する刑に關するものに非ざるとき受刑者が刑務所に收容されると共に、この刑の差別化は極めてしはしはその機能を喪失する。何故なれば受刑者の社會的回復と累犯防止との目的を達するかために、單に一つの相對的實益をしか有ち得ない極めて不完全なる法律上の類別は、行刑に移るに及んで、他の種々の理由のために、しはしはその實現を妨げられることになるからである。

重罪犯人又は輕罪犯人の異りたる種類の分別を妨げるものは、極めてしはしは單純なる金錢上の理由である。蓋し、性格及能力、惡性の程度及び改善の可能性を考慮して被拘禁者を分類し、處遇し、そして就中、彼等か相互に與へ得る影響を最も正確に測定し得るために、一つの充分なる期間中、被拘禁者を研究し得べき、かのエルマイラのそれやまたはその他のことき施設を創設する財源を有つて居る政府は極めて罕れたからである。——被拘禁者の分類に於て注意を要するものは、就中、彼等か他の被拘禁者に對して與へ得る影響である。彼等の共同被拘禁者に對して危険性を有するものは、必ずしも常に、一つの重罪に就きて一つの長期の刑に處せられたる被拘禁者ではなく、寧ろ輕罪事實に就きて十回若しくは二十回の處刑を受け、その全體に於て、殆ど匡救すへからざる一つの根強き惡化か實證され、そして一つの正則なる生活に復歸すへき望みを殆ど認め能はざるかこときそれなのである。

多くの政府の有する財政上の困難を斟酌するにしても、尙ほそこには一つの合理的分類の實現か可能とされるであらう。——被拘禁者の各階級に對して一つ又は數多の施設を指定することによりて爲されたる分類に従ひて、被拘禁者は刑務所に分布され得るであらう。——最も重要なる第一の階級は、初めて處刑せられ、そしてその犯したる罪か、——假令重くとも——特に著しき一つの頽廢を證明して居ない被拘禁者によりて構成されるであらう。——この場合、また考慮の必要を存するものは年齢であらう。蓋し、この階級は、本質的に、二十一歳以上四十歳若しくは多くとも四十五歳以下の被拘禁者から構成さるへきて

あらう。そこには、出來得るかきり、これ等の被拘禁者の能力に適應せる、一つの況きをして一般的意味に於て妥當なる、即ち殆ど凡ての者か困難なしに従事することか出來て、而かも釋放後彼等の生活の道を講ずるの助けとなり得るかことき作業部類の構成か必要とされるであらう。——これと共に必要なるものは、修養的であり、教化的であると等しく、またそれを有興味たらしめ得る手腕を有する人々によりて爲される道徳、歴史及び政治の題目に關する講演又は講義である。そしてそこに尙ほ附加されねはならないものは、若干の娛樂、即ち所長若しくは特に授權されたる或る所外の人物の聰明なる指導の下に、出來得るかきり彼等自身によりて行はれる音樂又は朗讀のこときものである。

これ等の刑務施設は——尠くとも一部——假令それか一大菜園に過ぎなからうとも、兎に角、被拘禁者か順番に、そして賞遇として耕作し得へき或る廣さの耕地を有することか、また極めて望ましいことであらう。何故なれば、犯罪の絶へざる原因たる都會の集團生活か、多少とも遠かつて、より簡易な、より健康な田園生活に復歸することは、何れにしても有益であらうからである。

三十五歳乃至四十歳の男囚と二十一歳乃至三十歳若しくは三十五歳の少壯者との共同生活を完全に回避するために、この第一階級中には更らに年齢による再區分を必要とするのであらう。何故なれば、最も克く正則的市民に復歸し得るものは、頽廢程度により輕き弱年者であつて見れば、彼等の處遇か特に重要視されるべきは言ふまでもないからである。——そこには午前と午後との作業班か創られ、各班は作業なき時

間中、授業、講演、娛樂若しくは園藝を有つことになるであらう。第二階級は改善不能なるか又はその犯罪か一つの進みたる程度の悪性を證明する弱年受刑者を以て、第三階級は老年累犯者を以て、そして第四階級は悪性の極めて頑強なる犯罪者を以て構成されるであらう。——就中第二階級に屬する被拘禁者に對しては、一つの嚴格なる紀律と一つの絶えざる注意とを以て、彼等の不良なる諸傾向を改善し、且つ時と共に、彼等を第一階級に轉移せしめ得るかやうに、彼等の性格を形成することに努めねはならないであらう。改善不能者と大罪人とを含むこの階級は極めて特別なる研究の對象たらねはならぬ。何故なれば、彼等はしはしは一つの醫術的處遇の必要を有する多少の疾患者に屬するからである。——彼等は罕れにか治癒され得ない。全部又は一部、彼等の犯罪の原因をなしたものは、しはしは精神的又は肉體的非正則性である。そして彼等はまさしく社會から離隔される必要のある危険人物であることを認めることによりて、彼等の場合は刑法よりも寧ろ醫學の領域に屬するものであり、そして正しくは、本來の意味に於ける刑務所てはなしに、苟くも社會か犯罪人に對する自家防衛を正義と人道とに従ひて爲さむと欲するかきりに於て益々その必要を感じる「犯罪癲狂院」(Manicomio Criminale)を適用すべきものなることか、承認されねはならない。——被拘禁者に對してこの特別癲狂院を創設しないまでも、既存施設内に於て、一つの特別病棟をこの目的のために使用せしめることは、何れの國家にとりても常に可能なことである。

これ等階級の被拘禁者を收容する刑務所は、被拘禁者か、比較的、彼れに最も適當せる仕事を選び得

るかために、出來得るかきり、各階級に於て、色々の仕事か爲され得るようにならざることを必要とする。そしてこれは單に被拘禁者に取りてたけてはなく、また刑務所自體に取りて一つの利益なのである。何故なれば、好んで爲す作業は常により成績を挙げ、且つより容易く修熟されるからである。——被拘禁者に仕事を課するに當りてはしは見出される困難と自由労働者によりて作られたる製品との對比に於て殆ど常に發見される刑務所製作品の劣等とを考へるとき、出來得るかきり被拘禁者に彼れの選擇する作業に就かしめることは、益々必要とされるであらう。固より、かようにして殊別化されたる刑務所かより多くの監督と嚴格にして同時に正當なる一つの紀律を要求するであらうとは言ふまでもない。乍併此指揮及び監督に任ずる會員の増加によりて課せらるべき經費は、被拘禁者の改善とそれによりて招來せらるべき累犯の減少とによりて充分に償はれるであらうと、私は確信する。加之、人員の増加は必ずしも常に必要ではない。他の何れに於てよりも、刑務所に於てより多く必要な感化的精神と、利他的感情と眞の慈善心を有する一個の聰明なる所長は、苟くも彼れか寛大に決斷を、慈愛に嚴格を、同情に正義を、程よく結合するの術を辨へて居るかきり、彼れは彼れに托されたる不幸なる受刑者達の間、恐らくは奇蹟を實現することに成功するであらう。——刑罰と刑務所とは社會秩序を攪亂したる者に對して社會か有する一つの復讐手段ではなく、それなしには如何なる社會も存続し得ざる秩序と道德とに有害なる彼れの行動を持続することから犯罪人を阻止するための一手段にすぎないとは、既に久しき以來我々の間に異論

なきところである。——それ故に、社會的義務を彼れに註解せしめるために、そしてそれか我々の良心の中に存する法則乃至は神の法則たると或ひは社會的共存を可能ならしめ、且つ容易ならしめるかために人間によりて定められたる法則たるを問はず、兎も角も法則を侵犯しないことか自他何れのためにも善良であり且つより有益である所以を彼れに了解せしめるために、我々はこの攪亂的要素か我々の權内に在る間の時間を、是非とも有効に利用せねばならない。

それ故に、被拘禁者の異りたる階級には異りたる刑務所を充當することか必要とされるであらう。そしてそれはまた彼等の處遇の任に當る刑務官に取りての分業及専門化としても有意義なところであらう。この被拘禁者の分類と刑務所の分化との問題は、一見してそれか見えるよりも、より簡單である。しかしながら、そこには、被拘禁者を異りたる刑務所に分布し得るためには、被拘禁者の異りたる諸階級に就きて一つの徹底的研究か豫定される。——これかためには、刑務所長は、法律の類別によりて、即ち言渡されたる刑によりて彼等に托せられたる被拘禁者を一つの刑務所から他の刑務所に移送し得る或程度の自由なる權能を有することか必要である。——固よりこの考案の徹底的實現を期するかためには、完全に設備されたる多くの大刑務所を必要とし、従つて著しき財政上の困難か豫想されることになるであらうか、しかしながら、我々は必ずしもこれかためにかくのとき大規模の計畫を要求する必要はない。既存刑務所の適當なる整理若しくは改整の下に、若干の中央刑務所に於て被拘禁者か一定の期間研究され、これに次

いて、第一、第二、第三、若しくは第四の階級に従ひて、それぞれ充當されたる刑務所に送致されれば足るのである。この點に於て第二部第二議題の對象をなす事務分科（科學的研究）は特に貴重なる結果を齎すことになるであらう。

何れの國家に於ても、上述せる中央刑務所と共に、それぞれ二十人、多くとも二十五人の労働者を收容し得る良好に設備されたる多數の工場と、二又は三の講堂若しくは集會室と、現今の刑務所に於ては極めてしはしは猛獸に對する檻の外觀を呈するかの悲惨なる運動場に代り得るものとして（固より嚴格なる沈黙制の下に）、順番に各被拘禁者に一時間若しくは、二時間の作業を課するに足るだけの一菜園とを有し、而かも完全なる衛生的設備を施したる一列の刑務所を創設し得ることは、確かに望ましきこととされるであらう。——しかしながら、この理想の實現は、大戰後のこの困難なる時期に際して、ヨーロッパの何れの國家に於ても到底堪えかたき莫大なる經費を要求することになるであらうから、この實現は差當り期待し得へからざることであるにしても、しかし、現存刑務所の中から若干を選別して、私か上に指示したる類別に必要な諸條件の全部若しくは大部分を充し得るかごとき様式にこれを改整することは、決して左まで困難ではないであらう。

私は爾かく確信する、そしてまた最近數箇月に私の視察し得たる刑務所の實際は、一つの同一刑務所内に於て、各部屬にそれそれ／＼に適合する處遇を適用することによりて被拘禁者を分類することは、大多

數の國の現狀に於て不可能であるといふこの確信を益々強めるはかりであつた。——この種の凡ての試みは、遅かれ早かれ、何れにしても實行されざるを得ない運命を有する。何故なれば、十人十色の而かも餘りに夥多の一人に（在所者）か害悪と腐敗ならては齎らし得ない一つの混淆狀態に於て生活し、作業し、そしてまた極めてしはしは就寢することをすら餘儀なくされて居る、爾かく制限されたる空間内に於て、被拘禁者の性格及び諸性能、頽廢及び改善能力の程度を考慮して爲さるべき一つの満足なる合理的類別を實現し、そして有益なる正則的生活の能力を有するか若しくは尠くともその行動か最早有害ならざる被拘禁者を社會に復歸せしめるために最も適當なる處遇を適用するかごときことは、人間の事業として到底不可能なことだからである。

如上に於て、私は、我々に課せられたる問題を解決すべく、差當り——大成は後日に待つとして——最も適當と思惟される解決の概要を指示した。私よりもより權威あり、より有能なる他の有識者達は、固より更らにより良き提案を爲すであらう。私としては、この場合、苟くも刑務所をして被拘禁者の感情と意思とに一つの改善的影響を有し得るものたらしむべきかきりに於て、是非とも必要なるこの分類とこの再教化とを實行すべく、凡ての政府に取りて可能にして而かも高價ならざる一つの簡易なる方法を指示せむと欲するに過ぎなかつたのである。

そこには、結局被拘禁者の處遇といふことに歸着する純刑罰學上の一問題を存する。若しも各國家が被拘禁者の概念の下に何物か理解されるかを明かにすることなしに、この問題に答へむとするならば、我々は我々が今日在る以上に、一步をも進めることにはならないであらう。何故なれば、被拘禁者となるべき者と法律を侵犯する者との間の區別か、一般に承認されたる科學的方法に従ひて爲されないとあらうならば類別に關する討議は毫も正當化される譯けに行かないであらうからである。

辭典の定義するところによれば、犯人とは法律を侵犯する者であり、被拘禁者とは一刑務所に拘禁されたる者であり、そして刑務所とは犯人の制裁若しくは善良なる監禁の目的に供せられたる一營造物なのである。これ等の定義に従へば、凡ての犯人は被拘禁者とならざるを得ないであらうか、しかしそれは正確ではない。然らば犯人と被拘禁者との間には、如何なる差異を存するか。

犯人の數は被拘禁者よりも著しく多數である。何故なれば犯人（法律の侵犯者）の極めて大なる數は未檢舉のままに終るからである。加之、警察又は被害者は犯人の將來の善行に資するため、その多くに

宥恕を與へる。また他の一部は裁判所の決定する監督附假釋放、刑の執行猶豫等によりてその處罰を免かれ、更に他の一部は彼等の辯護士の手腕によりて免訴される。かやうにして、犯人となりたる凡ての者の中、被拘禁者の状態に移されるものは、單に選別されたる一部屬てしかないのである。

この選別の基礎を成し、原因を成すものは、一つの合理的判断よりも、寧ろ人道的精神である。被拘禁者は、選別されたる人々か最も危険なる者であり、そしてそれに對しては拘禁か最良の手段たるべきことの認知されたる事實によりてよりも、寧ろ法律によりて行き當りばつたり、犯人の部屬中から選別されたものである。

一つの盲目的犯罪學か治癒の不可能なる多數の生來的缺陷者を以て絶えず刑務所を充して來たのは、即ちこれかためである〔註一〕。裁判所によりて確定されたる一定の時期に、これ等の被拘禁者は刑務所から釋放されて、社會に放出されねばならない。この時期に於て、彼等は更に罪を犯し、再び起訴され（今回は累犯者として）〔註二〕、新たに刑務所に送られる。そして無限の連鎖はかやうにして回轉する。かくのとき方法はむしろ被拘禁者に對して非人道的であると同時に、また社會に對して一つの脅威を構成するものである。無反省なる公衆かかくのとき失敗に對して刑務所を非難し、また刑務所か自からの無知のため、この非難を甘受したからとて、少しも不思議ではない。唯一の聰明なる解決を表現するものは科學的諸研究に基いた一つの選別である。

〔註〕 ニューヨーク「國民精神衛生協會」(National Mental Hygiene Association) 及びその他によりて爲されたる諸研究は、ニューヨーク、シン・シン刑務所に於て研究されたる五〇八名の中、五九%は精神的疾患者、精神薄弱者若しくは、精神的不正則者であつたことを我々に教へる。テキサス州諸刑務所の被拘禁者三、四五一一名に對して、正則者として分類され得たものは、僅かに二九・四%に過ぎなかつた。また地方拘留場の被拘禁者二二六名に對して、正則者の數は僅かに一四・二%に止まつた。そしてニューヨーク州の三十四の大小刑務所に於て診査されたる一二八八名の被拘禁者に對して、精神異状者の割合は實に七九・六%に達したのである。未決囚に對して、合衆國諸都市に於て爲されたる診査の結果によりても、また類似の數字が確認された。(“Mental Hygiene Bulletin,” January 1925)

〔註二〕 テキサス諸刑務所の被拘禁者三、〇〇〇名の検査に於て、その中累犯者の率は五八%であつた。ニューヨーク州の地方拘留場に於ては、六六%の累犯者が見出され、その中二九%は四犯又は四犯以上に屬するものであつた。(“Mental Hygiene Bulletin,” January 1925)

近世犯罪學は罪を犯す犯人自體を研究し、そして彼れかそれを犯したる原因を決定し、次にそこに得られたる解答に基きて、若しも彼れか一つの責任能力者なるときは、これを刑務所に送付し、若しも一つの精神錯亂者又は一つの生來的缺陷者なるときは——その由つて來る原因の如何に拘らず——一つの責任無

能力者としてこれを監禁治療せしむべき方針を指示する。そしてその研究は、犯人の有罪判決前に於ては裁判所に對する準備行爲として役立ち、彼れか刑務所、感化院その他の刑務施設に送られたる後は、施設内に於ける處遇の基礎となり、また假釋放の基くべき科學的與件を供給することになるのである。

現今刑事施設の多くに於ては、精神病醫によりて指揮される實驗室を存する〔註三〕、そしてこの實驗室の發見は、彼等に托されたる複雑なる被拘禁者の部屬に與ふべき處遇案の決定を目的とする商議の基礎を形成するものである。

〔註三〕 フォレー刑務所(ブルユッセル)、コンコード感化院(マッサチューセツ)、フラミンガム女子感化院(マッサチューセツ)、シン・シン州立刑務所(ニューヨーク)、ニューヨーク州女子感化院(ペットフォード)及びその他。——この點に於て、我々はまた次きの著書を引用する。——『ニューヨークの女性犯人に關する研究』(A Study of Women Delinquents in New York, by Mabel R. Ferrald and others. The Century Publishing Co.)

合衆國より新しき感化制刑務所(Reformatories)の中には、法律によりて〔註四〕、精神薄弱者、精神病者、癲癩病者及び精神錯亂者の收容を禁止せられたるものか尠くない。蓋しこれ等の缺陷者は治療不能と看做され、そして一つの醫術的教育處遇の必要を有するものだからである。今や刑務所は、感化刑務所の發達乃至精神と社會のより大なる自由とかそれの方法の上に及ぼしたる影響に因りて、その辭典的定

義から漸時解放されつつある。かやうにして、舊時代の行刑方法は、刑務所の内部に於ても、また外部に於ても、その存在を繼續すべく最早輿論の反對を凌ぐことが出来ない。近世刑罰學の要求するところは「社會の善良なる成員」たらしめるかために犯人を處遇することである。そしてこれは責任能力若しくは治療能力を有する犯罪に就きてのみ期待され得る事柄である。

〔註四〕『合衆國に於ける婦人感化刑務所に關する法律の綱要』(Helen Worthington Rogers, "A Digest of Laws Establishing Reformatories for Women in the U. S.", *Journal of Criminal Law and Criminology*, nov. 1922)

最後に、犯罪學者と刑罰學者とは一つの合理的プログラムを定立するために會合し得るであらう。法律を侵犯する凡ての犯人の中には、一つの生來的缺陷のために責任能力を有せざるもの、従つて適法に犯人として處遇され得ざる者の或る比率を存するものなることか犯罪學者の側に於て決定されたとするは、刑罰學者は、これ等の者は治療不能なるか故に、彼等は、被拘禁者を一つの善良なる市民たらしめることを目的とする或る施設内に於て、彼等に適合する處遇を見出す譯けに行かないことを認めるであらう。

治療不能なる犯人〔註五〕の處遇は、彼れの缺陷か生來的であるかきり、當然醫術的たらざるを得ないであらう。彼等を農園療養所に收容することは、恐らく一つの合理的處遇を構成するものたるかに見える。我々の討議に取りて重要なことは、爾今刑務所は、單に治療能力を有する犯人の收容にのみ充當された

る教化施設たらねはならないことである。

〔註五〕『精神的缺陷者に對するニューヨーク州委員會』("New York State Commission for Mental Defectives")によりて完成されたる事業はこの點に於て重要である。尙ほ一九二二年ミシガン州デトロイト開會アメリカ刑務會議報告中に於ける『女性犯人の處遇』("Treatment of Delinquent Women," by Jessie D. Hilder)を参照。

この點の確認を待つて、合理的刑罰學は初めてその出發點を見出し得る。そしてここに課せられたる問題は、またこれを以て初めて正しく討議され得る。即ち被拘禁者は最早彼れに科せられたる刑若しくは彼れの犯したる罪の性質に従ひて類別されてはならないであらう。何故なればこれ等の事實は何れも犯人が必要とする教化及び發達と毫も關係なき偶然的事實にすぎざるものたり得るからである。類別の基礎としてそこに理解されるものか犯人の「人格」であるならば、そして彼れの處遇の目的か彼れの人格の改善に存するものであるならば、「社會の善良なる一成員」となることを彼に可能ならしめる一つの教化を獲得すべく彼れの有する個別的な能力に従ひて受刑者の分類を爲すことか、より賢明なるべきは確實である。

拘禁の目的は、社會を保護し、且つ彼れの釋放と共に、彼れを正則なる社會生活に關與せしめ得るために、被拘禁者を教化することである。刑務所は言葉の最も廣き意味に於て職業教育を目的とする一施設である。そしてこの教育は被拘禁者に對する一つの徹底的研究によりて明かにされたる諸特性を基礎とする

ものである。そこに於ては彼れの改善的發展か彼れの釋放を正認せしめるを待つて、先づ假りに而かも監督附にて、自由なる生活に復歸し得るかやうに教育されることを必要とする。この目的を實現するためには、一つの分類によりて教育の形式か確立されることを必要とするてあらう。

この計畫の實行には如何なる設備を必要とするか、若しも國家か一つの新しい施設を構成するとするならば、それに與へられる形式は、仕事場、工場、教室、寢室禮拜堂及び行政部の建物を有する一つの大職業學校のそれたることを要するてあらう。施設は農村に置かれ、且つ同時に農業の教習、食料品の自給及び被拘禁者の體力の増進に便すへき一大農園を有すへきてあらう。寢室と工場とは各室とも日當りよき位置に配置されることを要するてあらう。被拘禁者は、それか一つの職業學校に於て爲されて居るかやうに即ち彼等の能力、彼等の必要とする教育及び彼等の爲す進歩の程度に従ひて、それそれ級別に類別されることを要するてあらう。

若しも在來の建物を利用せねはならないとすれば、この場合注意すへき點は、第一それ等の營造物に隣接して一大農園を存することであり、第二にはその施設の全域に亙りて最大限度の日光と清潔なる空氣とが享有され得ることである。そしてそこには一つの農園刑務所の具備する一つの職業的施設か供給するそれと等しき各種の仕事を受け得るかごとき方法に於て、凡ての設備に改整を加へることを必要とするてあらう。

マツサチユーセツツの女子感化刑務所は一群の古い建物から構成される。そしてその内部には次ぎに記述するかごとき現實的設備と組織とが見出される。

教育——教育はこの刑務所の凡ての組織の根本的基礎である。彼れの入所より退所に至るまで、被拘禁者は四六時中常に教育の力を感得することを要するてあらう。教育は知識と理解とによりて獲得されたる進歩を意味する。従つて我々の努力すへきことは、被拘禁者に活計の正直なる手段を會得するに必要な物の見方を教へ込むことであり、また善を爲すために彼れの有する能力を認識せしめることである。教育の事業は刑務所の凡ての組織と凡ての事務との關聯に於て遂行され、そしてそれに要する設備として、若干の教室、一つの圖書室、一つの體操場、若干の工場、家事設備、若干の厨房、一つの農園、若干の果樹園及び菜園等を包容する。彼等の營むへき眞の生活との關係に於て教育の眞精神に被拘禁者を浸透せしめんかために、そこには、職員として若干の正教員を有することか絶對的に必要なこととされて居る。

宗教——凡ての教派の禮拜に使用せられる一の禮拜堂を存する。……

病院——病院は一精神病醫、一外科醫、一齒科醫、一耳科醫、一眼科醫及び四名の看護婦を有する。そこには凡ての醫療と大小外科手術との設備か完備する。またそこには一つの實驗室を存する。被拘禁者は假令假釋放を受けたるにもせよ、または刑期を滿了せるにもせよ、微毒、麻毒若しくは結核か全治するにあらざれば、退所することを許されない。

被拘禁者は入所と共に病院の精神病室に收容せられ、彼等か他の被拘禁者に對して危険なきものたることの確證されるまで、そこに隔離される。彼等はそこに於て一つの完全なる醫學的精神診査に服する。彼等は齒の治療を受け、且つ將來必要な凡ての醫術的處置に就きて記録される。またこの期間中、學事監督は彼等に相當なる學級を決定するために彼等を巡視する。調査課は彼等の經歷を記録して、彼等の調査を開始する。そして副所長は彼等に刑務所の諸規則を説示し、彼等の改善に關して彼等に必要なる諸點に就きて大體の觀念を與へ、且つ彼等か今後共働すべき作業の種類を指定するために、彼等を巡視する。被拘禁者には、先づ第一に、災厄の場合に於て取るべき應救處置と家庭に於ける病人の手當てを教へられる。

工業——マツサチユーセツツに於ては、刑務工業は凡て官業主義によりて行はれる。即ち刑務所の工業は地方自治體又は州の凡ての施設の需要を供給するものであつて、その經費は全部又は一部州金庫によりて負擔される。この制度に従ひて、女子感化刑務所には針仕事に屬する工業と、靴下の製造と、州旗及び聯邦旗の製作とか割當てられた。これ等の工業部類は針仕事の工業的敎習の一つの優れたる基礎を形成する。

洗濯作業は一つの商業的及び家庭的基礎の上に於て行はれ、二つの方法が併せて敎習される。廢物利用の作業に於ては、凡ての古着や工場のローズ物を蒐集して寢臺の足場敷等を作らせる。またそこには家具

その他の修繕も行はれる。

農場——一三五ヘクタールの面積を有する農場は、刑務所に於て消費せられる凡ての種類野菜及び菓實、凡ての獸乳及びバター、凡ての家禽及び凡ての卵並ひに牛及び犬の糞その他の飼料を生産する。そこには一つの小温室と一つの大花卉園とを存する。

調査課——調査課は一社會學者、實際の仕事に従事する一名の助手及び三名の書記によりて管課される。この事務分科は犯罪の諸原因、即ち遺傳、環境、肉體的及び社會的素質等を調査する。本課は接見を監督し、家庭との接觸を處理し、就職及び刑務所内に於ける改善的發達の監督に關する職員會議の組織を司る。本課は假釋放委員會の決定する假釋放又は赦免の基礎となるべき報告を作成する。また本課は、州政府かその追行する諸方法の正否を實證するための助けとなり、且つ犯罪の實情を理解し、その有效なる豫防を爲すべき方法に到達するために追行すべき方針を指示すべき情報の基礎と成すために蒐集せられたる諸材料を整理する。

衛生及び營養——衛生及び營養事務の管理は、所長の第二助役に托せられる。彼女は免許看護婦であり且つ攝生官である。彼女は病院に於て行はれる凡ての處置に就きての事務を主管する。刑務所の衛生、賣店及び食料品の監督はまた彼れの事務に屬する。賣店掛と厨房及び食堂の使用人とは彼女の指揮の下に立ち、賣店及び農場の會計の事務を司る一職員もまた同様である。

道徳性の助成——凡てのこれ等の事務分科以上に、そこには凡ての刑務施設に存せねはならないものであつて、而かも凡ての部分の一つの心靈的全體に結合する一事務を存する。そして我々はこれを道徳性の助成事務と名附ける。上記凡ての組織は、若しもそれか被拘禁者に取りて生きたもの、靈感的のものとならなかつたならば、結局、無力たり、無益たるに止まるの外はないであらう。彼等被拘禁者は彼等の孤獨の淋しさに悩みつつある弱き人間である。そして彼等の希望と彼等の空想との對象を成すものは、彼等の個人的偏見なのである。彼等か自から在ると信するところから、彼等か在らねはならないところへと彼等を誘導すべく、何人かの救ひの手か延へられないかきり、これ等の偏見は、結局、破壊に導くの外なき混沌の世界に於ける彼等の存在の上に絶へす反射するのである。彼等に、それを理解する能力を有する或る人と共に、彼等の精神に提出される諸問題に就きて語り、且つそれを分析する必要を有する。彼等は生活に於て悪い因縁を結んだ。彼等の過誤を承認せしめるのは、彼等は取りて無慈悲であるかに見える。彼等の過失は他人に轉嫁されねはならない。世間か不正なのである。彼等は彼等の最善を爲した、それにも拘らず、嘗て何人も彼等のために心配して呉れなかつたのである！ 彼等か必要とする救済は心靈的のものである。それは堅實なものたることを要する。そこにしはしは必要とされるものは、一つの卒直なる批判であり、一つの辛棒強い理解であり、凡ての人間に常に存在する善と眞とに就きての一つの正しき評價である。

この事務の管掌は副所長に托されて居る。副所長は各被拘禁者を、彼等かその環境に於て自から最も良く感じ得るかごとき位置に就かしめ、そして一つの絶へざる奨励と一つの絶へざる批判とによりて、彼等を改造し、助成する。この事務は他の凡ての事務以上に、友誼と協力の精神を創造する。この精神なしには、如何なる制度も遂にその實效を奏する譯けには行かないであらう。

これ即ち我々か一つの感化刑務所の具備すべき最小限度の諸特質と考へるところのものの一一般である。改善に寄與するものはこれ等の諸特質である。被拘禁者の信頼と發奮とを喚び起し得る積極的分類の唯一の基礎を提供するものは、習得能力の分類である。我々は眞面目に被拘禁者を教育し、且つ彼等を社會に於て生活すべく適當なるものたらしめむと欲するものであることを彼等に知らしめ、そして我々の指揮に従ひ、且つ我々の觀方を容認すべく彼等を納得せしめるものは、我々の分類を一貫する教習と公明との精神である。

V

報告者

Frank Moore,

Directeur de la "Reformatory Prison" a Rahway, New Jersey,

犯人の或る集團的處遇か満足なる結果を與へ得るかために、被拘禁者の或る分類を確立するのは、單に賢明なばかりではなく、また絶對的に必要なことである。そしてこの分類は被拘禁者の性質を基礎とするときにのみ、合目的たり得るものである。

刑罰の寛嚴は我々の信頼し得べき分類の基礎を構成するものではない。刑罰は必ずしも常に正當たり得るものではない。加之、犯人の眼から見たならば、刑罰は殆ど常に不正當なるものとなるであらう。一つの峻嚴なる刑罰は受刑者を強情にし、そしてその結果は、他の犯人達の眼に彼れを一個の英雄として映せしめることになるのである。一つの嚴格なる應報的刑罰は、その與へる恐怖によりて、社會の臆病なる人々に犯罪を回避せしめ得る。そしてこの刑罰の主要なる價值は恐らくこの點に存するのである。

犯罪の性質もまた、我々が依つて犯人を分類し得べき一つの確實なる正則的基礎を供給するものではない。何故なれば、多くの場合に於て、それは單に情狀によりて決定されるものだからである。

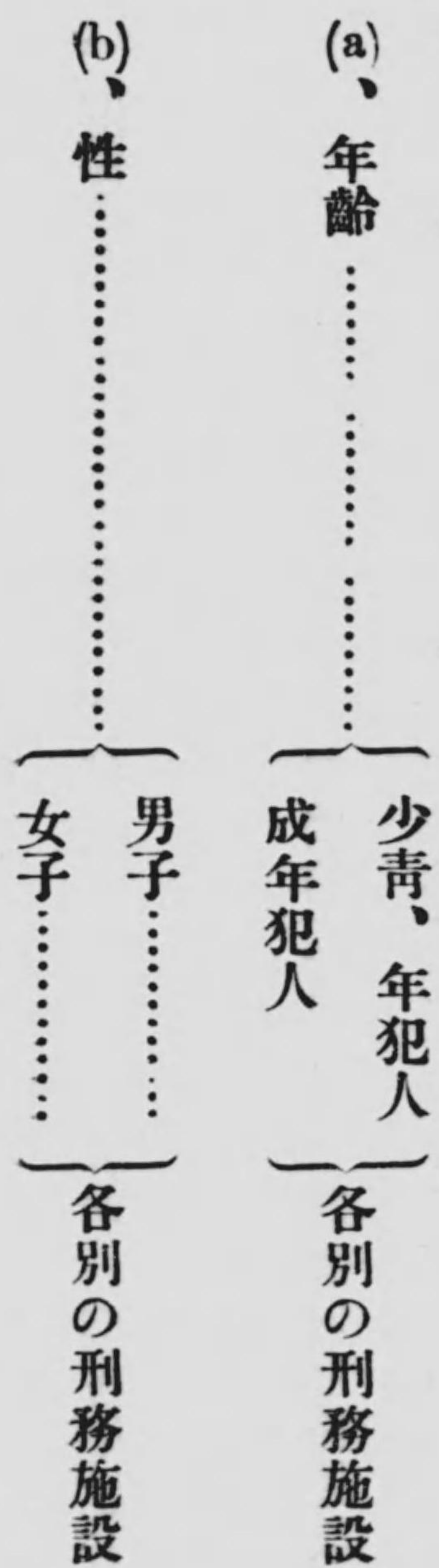
我アメリカに於ては、犯罪は二つの階級、即ち「輕罪」(“Low Misdemeanor”)と「重罪」(“High Misdemeanor”)とに分たれる。若し或る犯人が二十ドルを窃取すれば、彼れは「輕罪」に問はれ、三年以下の刑に處せられる。若し彼れが二十一ドルを窃取すれば、彼れは「重罪」に問はれ、その刑は七年以下である。しかしながら、彼の窃取する金額は、多く、彼れの見出し得た窃取の目的物に關係する。加之、小額を窃取する者の多くか、多年の間それを常習とする悪性の窃盜犯人であつたのに反して、多額金額

を窃取する者は、極めてしはしは、不幸なる事情によりてそれを餘儀なくされたものである。我アメリカに於ては、我々か重罪と名附ける凡ての犯罪の七五%は窃盜若しくは他人の財産に對する侵害であり、他の二五%か人的法益に對する侵害である。しかしながら、暴行、強姦、殺人等にしても、また大部分、情況によりて決定されたる犯罪なのである。遺傳、初等教育、環境、挑發若しくは瞬間的亢奮は、罪責の程度を決定するに當りて斟酌されねばならない重要な影響である。ここに於て、合目的に犯人を分類するかために採用すべく眞に適法なる唯一の正則的基礎は犯人の性質であることか、更らに繰返し確認される。

犯人の性質に就きて我々の與へる定義は、彼れの肉體的、精神的及び道德的生活である。

類別は犯人の肉體的、精神的及び道德的性質に基くものたることを要する。

I、類別の第一の一般的基礎は肉體的性質たることを要するであらう。



(c) 健康……………
 癩癩……………
 結核……………
 性的頹廢……………
 各別の刑務施設若しくは刑務施設内に於ける隔離

肉體的適格者 別個の刑務施設

Ⅱ、類別の第二の基礎は精神的性質たることを要するてあらう。

(a) 精神薄弱者……………

(b) 精神病者……………

(c) 正則者……………

各別の施設

Ⅲ、類別の第三の基礎は道德的性質たることを要するてあらう。

この場合、肉體的觀點並びに精神的觀點に於ける正則者は次ぎのことく類別されるを要するてあらう。

(a) 偶發性犯人又は初犯者……………

(b) 累犯者又は慣行性犯人……………

各別の施設

感化刑務所

刑務事業の主要部分を構成するそれはこの二つの階級の犯人である。

この二つの階級の處遇に關しては、その何れに於ても、最も周到にして、且つ最も完全なる分類か適

用されねはならないであらう。最も完全なる分類は、要するに、各犯人か、それぞれ一個人として各別に考へられるときに實現されるてあらうことは、固より言ふまでもない。しかしながら、かくのことき理想は實現の可能性を缺くか故に、勢ひそこには一つの部屬的類別の必要を生ずることになるのである。

今日、各種刑事施設の追求する眞の目的は犯人の改善である。そしてそれを達成する主たる手段は教育である。

作業成績、知力及び行狀は、犯人改善の問題に於て、一つの感化教育の基礎として取入れらるべき三つの要素である。そしてこの教育は機械的、精神的及び道德的驗證に於て行はれることを必要とする。

A、機械的能力に基きたる類別

我がアメリカの感化刑務所に於て、我々は機械的能力に就きて、一つの科學的驗證を適用した。この驗證によりて我々は犯人を工業的觀點に於て次ぎのことく類別し、そしてこの類別の下に次ぎの結果か與へられた。

- (1)、不熟練にして學習の能力なき者……………全在所者の二一・五%
- (2)、半熟練者若しくは制限されたる職業部門に就きて能力を有する者……………全在所者の三八%
- (3)、一つの職業に就き平均能力を有する者……………全在所者の三三%
- (4)、勞働者若しくは良好なる書記補……………全在所者の六・五%

(5)、作業監督の資格ある者……全在所者の一%

作業賦課の分布はこの類別に従ひて爲されるものである。

B、知力に基きたる類別

我々の被拘禁者によりて爲されたる知力的修得の程度を決定するために、我々は教育に於て達成されたる進歩を驗證した。そしてこの教化能力の驗證の結果は、全在所者の次きのことき類別を生せしめた。

A、入所當時

- (a)、文盲者……………九%
- (b)、小學校の一級乃至四級程度の學力を有するもの……………三五%
- (c)、五級乃至八級程度の學力を有するもの……………五一%
- (d)、中等學校程度の學力を有するもの……………五%

B、釋放當時

- (a)、文盲者……………五%
- (b)、小學校の一級乃至四級程度の學力を有するもの……………一九%
- (c)、五級乃至八級程度の學力を達したるもの……………六八%

d、中等學校程度の學力に達したるもの……………八%

學校に於て爲されたる分布はこの精神的驗證に基くものである。

これ等の機械的及び精神的驗證は、犯人の釋放の基礎を形成するものとして、犯人に要求されたる知識の修得量を決定するために利用された。

この類別制度は第一類の年少者には、彼れの拘禁期間中従事するために、熟練を必要としない種類の或る工業的作業を課する方法に於て組織される。

第二類に屬するものは、彼れの選擇する一つの職業に於て一つの成規の修業期間を完成せねばならぬ。

そしてこの期間はそれの修了のために平均十二箇月を要するかことき方法に於て組織される。

第三類の被拘禁者は彼等に指定されたる作業に平均十八箇月間就事する。

被拘禁者の小數は十八箇月乃至二十四箇月内に第四類の課程に就く能力を獲得する。

事態は學校に於てもまた同様である。

教育程度は一つの試験によりて決定される。そこには年少者に彼等の入所當時に於ける彼等の教育の水準によりて分たれたる段階を、彼等の學修能力の程度によりて漸時に經過すべく要求される。

刑務所からの彼等の釋放を決定するものは、作業室又は教室に於て彼等に課せられたる課程の完成である。我々の制限的不定期刑制度に従ひて、この手續は一つの確定的拘禁期間の決定を禁止する。そして被

拘禁者か彼れの個人的改善に於て爲し得た進歩に従ひて、即ち彼れか彼れの有する能力の限度まで適格となりたる時期を待ちて彼れを釋放する方法によりて、刑期の問題を一つの教育的基礎の上に置くのである。これを別言すれば、釋放は、まさしく、被拘禁者か機械的及び精神的教育に就きて規定されたる課程を完了したる時に與へられる一つの免狀の性質を有することになるのである。

C、類別の基礎としての心靈的若しくは道德的性質

これ即ち現在我々か解決せむと努める重要な問題である。我々はこれを以て一つの現實的分類の最も重要な要素を成すものと考へる。何故なれば、苟くも一つの個人の性質か一つの満足なる正則的狀態にまで誘致されないかきり、作業に於ける彼れの熟練と彼れの知識の習得とは、たた彼れをして更らにより危険なる一犯人たらしめることに役立つにすぎないであらうからである。

我々の行刑事業は、犯罪行爲に潜在する道德的弱點か何たるかを決定することを我々に可能ならしむべき一制度に従ひて遂行された。かやうにして、我々は粗雑ながらも上記のことき驗證によりて、この困難なる問題の上に幾分の光を投しようとして試みた。

人間の心靈若しくは自我は判断、情性及ひ意思に分解され得ると主張することは、或ひは科學的異端に屬するものであるかも知れない。しかしながら、若しもそこに一つの道德的診斷の必要を存するとするならば、そこにはまた自我に就きて何等かの分析か必要とされる。そしてそこには上記三要素の何れか一つ

に於て、若しくはそれの全體に於て弱點を有する人々の存在することは明白である。

或る個人に於て、その犯罪の原因を成したものが判断力であるか、情性であるか若しくは意思であるかを知り、そしてそれによりて彼れの有する弱點を強め得べき處遇の一形式を規定することによりて、我々は或る良好なる結果を獲得し得た。

アメリカに於ては、今日まで、何人も或る個人の道德的生活に就きて一つの満足なる驗證を想像し得たものはない、かくのことき一つの驗證を完全に遂行して、この最大難問を解決するであらう人は、最も銳利なる刃金を以て作られたる一つの利劍を使用せねはならないであらうか、しかし、その場合彼れは彼れか幾多の王國を征服したよりも更らにより大なる一つの偉業を完成することになるであらう。何故なればこの場合、眞に彼れか在るところのものに従ひて或る個人を類別し、そして全世界の刑務所をして、社會利益の最善なる保護のために彼等の事業を遂行せしめ得べき科學的與件の認識を以て彼れの釋放を實行することか、始めて可能となるであらうからである。

II

報告者

Otto Kellerhals,

Directeur de la Colonie pénitentiaire de Wetzwil (Suisse)

經體ある凡ての教育家はその教育を彼れに托されたる凡ての者を劃一的に處遇することの不可能なことを知つて居る。教育事業の成功は生徒の性格上の素質が迅速に研究され且つ正しく評價されることを以て缺くへからざる條件とする。一般的教育に取りて眞實なることは、それか誘導するに困難なる人々に關するときに、尙ほより大なる重要さを有する。そして各種刑務施設の在所者は殆ど例外なしにこの範疇の中に這入るものである。我々か個人を徹底的に認識し、且つ彼等に適する教育的方法を發見することに、より速かに成功すれば、それだけにまた我々はより速かに、彼等を將來善良なる道に誘導すべき機會を有つことになるであらう。各被拘禁者に對しては、それぞれ各別の方法しか存在しないことを考へたならば、我々は先づ第一に、彼れの處遇に當りて、彼れに科せられたる刑を餘りに絶對的なものと考へてはならない。彼れの改善の目的を達する唯一の道は、彼れの性格の検査に基いて與へられたる方法以外には存せないのである。

最近のワシントン會議に於て、凡ての參加者か、犯人の改善は科せられたる刑の最高目的であつたとする原則に同意したことを、我々はここに指摘する。

所長か犯罪の原因とそれの結果であつた判決を知らねはならないことは、固より言ふまでもない、しかしながら、彼れは必ずしも無難作に、懲役受刑者を禁錮受刑者と別様に處遇せむと欲するものではないであらう。改悛の情ある犯人に對しては、彼れは、その希望ある將來のために、刑の峻嚴を緩和し、正し

き方向を見出すべき手段を彼れに助成し且つ彼れに自由回復を彼れに準備することに努めるであらう。これと反對に、執拗にして邪惡なる犯人に對しては、彼れは凡ての方法によりてその鎮壓を期することを忘れないであらう。

これ等の可能性の實現は、固より、同一のシエーマに従つて唯一の刑種の執行を目的とするに非ざる一つの適當なる刑務施設を要求する。多年の間爲されたる一つの經驗を基礎として、我々は、被拘禁者の極めて多様なる一つの處遇を可能ならしめ、且つ極めて難多なる被拘禁者の諸範疇に特有なる必要か斟酌され得べき同一の一般的方針の下に組織せられたる諸形成の全體を、ここに説明することにしよう。

各刑務所に於て是非とも必要なことは、所長に於て凡ての在所者を識つて居ることである。刑務施設は余りに廣大に失してはならない。そして收容能力五〇〇人以上に及ぶのは不適當と考へる。凡ての施設は一つの家庭的性質を保有せねはならぬ。そして所長は凡ての部門を管掌することか必要である。

位置として最も適當なるものは、その自用道路又は水路によりて大交通路に連絡され得べき、やや邊鄙なる一地域である。地相としては凹凸状よりも寧ろ平地を以て有利とする。何故なればそこには全體か一望の下に收められ得るからである。この外、冬期屋外作業を可能ならしめる一つの温和なる氣候は極めて望まじきことである。五〇〇人の收容能力に對して、我々は一〇〇〇ヘクタールの地積を必要と考へる。そしてそこにはそれのより大なる部分に於て、農業の好適地たることか條件とされる。

コロニーは次きの諸營造を包容せねばならぬ。

- (1)、閉鎖監——一〇〇乃至一五〇〇の獨房とこれに相當する作業場とを有する(懲役監)
- (2)、開放監——二〇〇乃至二五〇〇の獨房と、農業的及び工業的經營と關聯する作業場及びバラックとを有する(禁錮監)

- (3)、保安拘置場——收容人員一〇〇人。やや大なる獨房と定員三名の監房とを有する。
- (4)、勞働コロニー——五十歳乃至七十五歳の釋放者に宿舍と勞働とを與へるもの。

(5)、必要に應じて

- (a)、本部建物——事務室、學校、教會等、
- (b)、經理部——厨房、洗濯場、衛生諸設備、病院等。場合によりてこれ等の一般事務は異りたる部門

に分布され得る。厨房等は一部分細別的に分布され得る。

- (c)、農業的及び工業的諸經營又は手工業に必要な建物及び諸設備

(1)、閉鎖監はその構造とそれの運用とに於て、近代的刑務所を表現する。この監舎は一つの障壁又は一つの類似の周障によりて他の建物から隔絶されねばならぬ。凡ての入所者はここに收容せられ、そして單に獨房に於てたけてはなしに、また共同作業中の彼等の常習的態度に就きて一様に觀察される。そこに收容されるものは、コロニーの全體の需要とそれの増進とに必要な凡ての物の製作に従事する職業人である。

ある。そしてその作業部類は單に衣類、靴類等たけてはなく、また技術的建造及び装置にも及ぶものである。そこには、機業及び製籠工場又は場合によりてコロニーの需要と國家の他の諸施設の需要とを満すために製本工場を有する一印刷場が附加され得る。かようにして、被拘禁者には、極めて多種なる職業を徹底的に修得する機会が提供される。圍障内に存する出來得るかきり大なる一園圃は、長期受刑者に、時々屋外作業を課することを可能ならしめてあらう。

短期受刑者の善良なる分子は短期間に於て第二部に進級される。長期受刑者は、原則として、その刑の最大部分をこの閉鎖監に於て執行される。また他の部の執拗なる者も、等しくこの閉鎖監に降級される。恩赦、早期若しくは條件附釋放の處分はこの部に屬する者に對しては罕れにしか與へられない。しかしそれにも拘らず、我々はそこに一つの嚴正なるシエーマを描く譯けには行かないであらう。否寧ろ、ここに於てもまた彼等の行狀と彼等の作業成績とによりて、一定の期間後、彼等自からの運命を緩和すべき可能性か凡ての被拘禁者に與へられることを必要とするであらう。

(2)、第一部(閉鎖監)か既に現存し且つ一般的に適用されたる諸制度に基いて居るのに反して、第二部(開放監)は或る自由主義から出發する一つの革新である。そしてこの部に於ける生活は、或る程度に於て、既に自由人の生活様式に併行するものである。

主要なる作業部門として我々は加工農業(agriculture industrielle)を推賞する。即ちそこでは農産物か市

場の賣品に適するかとき程度に加工されることになるのである。一刑務所内に收容せられたる凡ての條件と凡ての職業との被拘禁者に、彼等の體力と彼等の知力とを使用し、これを増加し且つこれを完成すへきより多くの機會を與へ得るより良き活動域か他に存せないであらうことは、蓋し疑ひない。そしてここに謂ふところの農業とは、確固たる科學の諸原理に基きて、近代的機具を以て實行せられ、且つ商業の諸原則に従ひて經營されるそれなのである。農業には更らに、自由労働との競争を容易に避け得べき一大長所を具存する。加工農業に於ては、單に農人だけではなしに、また殆ど凡ての工人か彼等の知識に適應したる一つの労働を見出し得る。加之、それはまた職業を失ひたる被拘禁者達に一つの極めて有利なる仕事を與へることを可能ならしめ、且つ彼等に一つの正則的労働の感覺を生れしめ得るものである。

この外、そこには、建築の點に於て、この刑務所領域の發達に多くの注意を拂ひ、且つこのコロニー居住者の幸福のために必要な凡ての設備を爲す必要を存する。かやうにして被拘禁者の一集團は常に大建築内に於て、愉快に仕事にいそしみ得ることになるであらう。

若しも我々が從來未墾の一地域に於て豊かなる收穫を擧げ、そしてその收穫を、例へば果實及び野菜の罐詰類又は各種乳製品等の形の下に、高價なる食料品に變改することに成功するならば、一般に社會に對する一つの負擔として考へられて居る刑務施設は、却つて公經濟の領域に於ける貴重なる補助機關となり得る譯けてある。

この第二部に於ける被拘禁者の大部分は夜間獨房に拘置されねばならぬ。しかしながら、この部の獨房は、第一部のそれに比して、より快適なるものたり得るであらう。糧食に關しては、大食家をも満足せしめるために、一つの食堂を設けることか適當とされる。日曜日には、尠くともそれを値する被拘禁者に對して、屋外に在ることか許されねばならないであらう。被拘禁者は施設とそれの經營とが必要とする凡ての事務、研究及び作業に、極めて廣く分布される。信任を値する被拘禁者は、常住的監督なしに、農業的及び工業的の外部作業に使用される。この部を支配する精神は、被拘禁者か彼等の拘禁期間を一つの純粹なる機械的活動の中に過すのではなしに、彼等か彼等の作業に彼等の知力的諸能力の凡ての資源を傾倒するかとき方法に於て、一つの刺戟物として働くことを必要とする。

この部の最高の目的は、一つの懇切なる監督を行ふ職員によりて援助され且つ指導されたる被拘禁者に田圃や家畜小屋に於けると等しく、また事務室、工場及び作業場に於ける凡ての知力的及び手工的作業を托することに存する。そしてこれは、恐らく、彼等をして自から條件附釋放を値するものたらしめ、そして自由への準備を爲さしむべき最良の手段たるものであらう。

(3)、保安拘置所に於ける監房は寧ろ單純なる居室の外觀を有する。そして被拘禁者の大部分は雜居に附せられ得る。この部は、極めてしはしは刑務所の厄介になり、そしてその統御は容易であつても、しかし彼等の自由を正しく利用することを知らないかために、絶へず彼等の隣人又は社會の負擔となる慢性的

累犯者と意思の力を失つた人々、即ち乞丐者、浮浪者、常習竊盜、猥褻犯人等の收容を目的とするものである。しかしながら、しはしは憫むべきこれ等の不運者を、我々はたゞ無希望に拘禁せむとするものではなく、寧ろ適當なる特殊の地位に於て、時々、自由生活の一つの試みを爲さしめようとするものである。若しこの試みか失敗した場合には、條件附にのみ釋放せられたる被拘禁者は、更らに適當の時機に釋放せられるために、再び無條件に拘禁せられることになるであらう。

保安拘置所の在所者は刑罰よりも寧ろより多く憐憫を値するものであつて見れば、この施設は刑務所と同一の方法によりて管理される譯けには行かない。従つてまたこの拘置處分に反抗する彼等の一部は尠くとも收容期間の初期に於て、第一部の閉鎖監に拘禁されることを要するであらう。尙ほ全部又は一部の責任無能力を理由として裁判所が無罪を言渡し、若しくは有罪判決を與へ得なかつた者も、等しくこの施設に拘置され得るであらう。これ等の場合の大部分に於て、これ等被收容者の精神状態は一つの癡狂院への監禁を必要としないものなのである。

(4)、**勞働コロニー**は組織全體の完成て在らねはならない。コロニーは勞働なき舊被拘禁者に宿舍を與へるものである。そして善行と勤勉との場合には、短期間の在所の後、コロニーは彼等に、相當の賃銀を與へる。單獨に生活の道を講ずる氣力なきか又はその試みに失敗して、勞働コロニーに、永久的ならずとも尠くも或る期間の避隱所を求め且つ見出す者の類は、一般に信せられて居るよりも、遙かに多數である。

波瀾重疊の壯年時代を経たる後、このコロニーに於て彼等の慾情を静め、より社交的となり、そして彼等の存在の晩年に至りて彼等の同胞の尊敬を受くるに至る舊被拘禁者の數もまた僅小ではない。滯留か自由であるだけに、この制度は、益々重要視されて居る。

VII

報告者

Viktor Almqvist,

Directeur en chef de l'Administration Pénitentiaire de la Suède, Stockholm,

近代立法は、單に犯罪事實の狀況だけではなしに、また犯人の主觀的諸性質、即ち彼れらの精神状態、彼れの知力の發達、彼れの性格等を考慮して、或る被告に對して取るべき處分を多少とも可能ならしめる。多くの國に於て、それか一つの年少被告に關するときは、裁判官は、彼れか犯人の感化のために最も適當と考へるところに従ひて、一つの刑罰又は一つの教育所送付處分を選択する權利を有する。若しもそれか一つのより重からざる罪を犯したる者に關するときは、犯人は處罰される代りに、一定の期間監督の下に置かれるか又はその他の處分に附せられ得る。

我々は、この方向に發達しつつある刑事立法か種々の處分の間に選擇を爲す權能をますます裁判官に附

與するに至らむことを希望すへき理由を有する。この種の權能の附與は、裁判官が單に犯罪自體に就いてたけてはなしに、また被告の性格に就きて、妥當なる徹底的認識を有つことを要求する。

豫審が充分普遍的となるに及んで、裁判官は、犯人を最も克く匡正するために如何なる處遇か彼れに適うせらるへきかを、より多くの確かさを以て判定し得るであらう。危険なる性向の發現と見られる特別な行爲は、そのみにて、刑罰と他の保護處分との間の選擇を決定する標準とされる譯けには行かない。例へば、酩酊状態に於て一つの重罪を犯したる者は、重罪の通常刑によりてよりも、寧ろ酒精中毒者に適切なる一つの處遇によりて、より克く矯正され得るものであるかも知れない、行爲の當時、或る種の非正則性によりて限定責任能力の状態に在つた者は、刑務所に拘禁される代りに、或る不確定なる期間、一つの癡狂院又はその他に拘置されることか、恐らく最良とされるであらう。しかしながら、事態の將來は、その選擇に於ける裁判官の誤謬を立證することになるかも知れない。それ故に、一つのより適切なる方法の適用を可能ならしめるために、裁判官によりて命せられたる處遇は執行中に——或ひは判決を言渡したる裁判官自身によりて、或ひは一つの専門委員會によりて——變更され得へきことか望まじきことである。何れにしても、處遇方法の變更に關するかきり、處遇中に爲されたる經驗が常に決定的意義を有たねはならないことになるであらう。

就中、そこには、その處遇が刑罰以外に構成されねはならないであらう犯人の一種類を存する改善不

能と認められたる犯人が即ちそれである。この種の犯人は、裁判官の判決自體によりて、一つの不定期間一つの保安所に拘禁されることを必要とするであらう。

正義感情は、現今尙ほ、この種保安所の發達に向つて充分に成熟して居ないことは確かである。刑法典は今後尙ほ久しく、裁判官が彼れの處分の裁量を拘束せらるへき極めて狭き制限を定めることになるであらう。復讐、即ちタリオンの法則は全然廢止さるへきてないとする主張は、今日尙ほ餘りに優勢である。社會防衛は、今日尙ほ刑法の唯一の若しくは主要なる指導原理として承認されて居るものではない。

ここに一つの改革を期待するとして、我々は犯罪人によりて脅威される危険に對して、最も克く社會を防衛するために、現行の各種處分——主として拘禁刑——如何なる方法によりて整序され得るかを見なければならぬ。

この場合、異りたる相當の處遇を適用するために、彼等の性格、言渡されたる刑の輕重若しくは所犯の輕重に従ひて、被拘禁者を類別することか適當であるか、そしてこれかためには刑務施設を如何に改整すへきか？これ即ち解決すへき極めて困難なる一問題である。

先づ第一に、自明なる一事として、我々は男女兩性を相互に隔離すへき必要を認める。この外、科せら

れたる刑の長短に従ひて、一つの區別を爲すことが正當である。

彼等の上に改善的影響を期待すべく、教化によりて彼等の道徳心を喚ひ醒すことも、また一つの職業教育を授けることも、共に不可能なるべき、爾かく短期なる一つの刑に處せられたる者に對しては、結局、彼等を威嚇する以外の目的を達する譯けには行かない。しかしながら、その犯罪によりて著しき頹廢を表徴するに非ざるこれ等の犯人か他の被拘禁者との接觸によりて悪しき印象を受けることは避けねはならない。この見地からして、短期刑に處せられたる被拘禁者は、勢ひ、所犯の比較的に重き被拘禁者、即ち長期受刑者から分別されねはならないことになるのである。短期刑の執行中に、彼等の異りたる性格に従ひて被拘禁者を類別することは不可能なるか故に、彼等の間に於ては、單に彼等に科せられたる刑の異りたる種類に従ひてこれを類別するたけて満足するの外はない。威嚇の効果を増加するために、そしてまた彼等の仲間の不良なる影響から彼等を防護するために、就中、休憩時間中、日曜日等には、彼等を獨房拘置に附することか適當とされる。従つてこの場合、彼等の收容せられたる刑務所は、種々の刑種に對する特別の監區を有する獨房式に従ひて改整されることか多少とも必要なことである。

若しも短期刑にかかる被拘禁者か、かようにして獨房に隔離されるとするならば、そこには年少者と年長者との間に一つの區別を設けることを、敢て必要としない。

一つの長期刑の執行に服する被拘禁者に對する處遇制度は、より複雑となる。

第一に、年少者は、年長者から隔離されねはならない。そこには、これ等の部屬の各個に對して特別の刑務所を構成する必要を存する。

假令豫審に於て被拘禁者の性格が闡明されてあらうとも、尙ほ刑務所に於て、就中、刑期の初めの數箇月間、この性格は最大の注意を以て研究されねはならない。そこに選擇せらるべき處遇の方法は、實際、この研究の結果を條件とする。そこには、被拘禁者の精神状態、彼れの知力、彼れの教育程度、彼れの職業能力等に關して、明確なる認識が必要とされる。そこには、彼れの凡ての道徳的弱點に、彼れの凡ての缺陷に、しかしまた彼れに有利となり得べき點、即ち彼れの有する長所にも等しく注意が拂はねはならぬ。この目的のために、可なり長い時の間、被拘禁者を相互に隔離することか必要とされる。それ故に彼等か服刑を開始する刑務所は充分なる數の獨房を有せねはならぬ。刑務醫は主として精神病醫としての權威を有する者たることを要する。所長、教誨師及び教師は被拘禁者の性格を深刻に探求する彼等の能力を常に考慮して、選任されることか、必要缺く可らざることである。實際的目的は刑務所内に科學的研究機關を設置することに存するものではないのは確かである。しかしそこに要求される必要は、情況に従ひて彼れの矯正に最も適切なる處遇を決定するために、各被拘禁者に就き一つの充分なる認識か與へられることである。

かようにして、刑期の最初の數箇月間に——この期間中、被拘禁者は普通より以上の如何なる待遇をも

受けてはならない。——爲されたる觀察に従ひて、刑務所理事者は被拘禁者の置かるべき位置を決定することになるであらう。

若しも被拘禁者が一つの精神病に冒されたるものなることか確認されるときは、彼れを一つの公設病院若しくはその設備を存するかきり、寧ろ同一刑務所内又は他の刑務所内に於けるこの目的に適應せる一つの病監に移すことを必要とする。

刑務所内に、最も一般的なる各種職業に對する特別なる工場と刑務所附屬の耕地とを存することか極めて有利なのは、固より明白である、この條件か具備する場合、被拘禁者の健康なる分布か不便なく行はれる。彼等は彼等に最も適當と思料される職業に、例へは指物業に、製靴業に、裁縫等に、若しくは可なり長き試験期間を経たる後、園藝又は農業に分布され得ることになるであらう。

若しも刑務所かそれ自からに充分の設備を有たない場合には、彼れに適する職業部類の設備ある他の施設に被拘禁者を移送することを要する。園藝と農業とを除くの外、作業は獨房に於ても、共同工場に於て殆ど同一たり得る。しかしながら、獨居作業を課せられたる被拘禁者に對しては、普通の獨房よりも稍々廣き特別に設備されたる監房を存することか望ましきこととされる。この監房は晝間の作業にのみ使用せられ、夜間の寢房に充當されない。

刑務所の管理者は被拘禁者の個人的諸能力に従ひて、常に彼等の保健上の要求を考慮しなから、或ひは

獨房に或ひは共同に彼等を拘置すべき最大の權能を有たねはならない。若しも、或る時間の後に、獨房か開扉され、一つの充分なる監督の下に、運動を爲し、且つ教室に出席することか被拘禁者に許されるならば、作業中の獨房は決して苛酷に失するものではない。そこには隔離を適當とする喧噪なる氣質の被拘禁者を存する。無秩序と懶惰との場合には、無條件に彼等を獨房に拘禁する權能を刑務所管理者の有つて居ることとは、共同作業に服する被拘禁者をして自から自制せしめる上に與つて大に力あるものであらう。

被拘禁者の性格の研究は絶へず繼續されねはならぬ。彼等の精勵と彼等の善行とに應じて、漸時彼等を進級せしめることによりて、彼等には累進的に増加される賞遇か與へられねはならぬ。多少より良好に設備されたる居室を與へることは、一つの顯著なる賞遇である。それ故に、例へは優秀級に編入されたる被拘禁者に對して、より快適なる椅子、心地よき色の窓掛、額面等の裝置を有する共同又は隔離房を與へることは、極めて合目的なことであらう。

既に彼れの刑期の大部分を經過したる被拘禁者に在りては、假令彼れに相對的自由か、即ち閉鎖されたる監舎外に於て作業に就くことか許されるとしても、恐らく良好なる行狀を持するであらうこと豫見か經驗上正認されるに至れば、彼れの殘餘在所期間中、屋外作業によりて、これに精神的休養を爲さしめるために、彼れには農業又は園藝か課せられねはならない。この目的のために、刑務所の耕地は充分廣大なることを要する。反對の場合に於ては、被拘禁者は一つの農園刑務所に移送されねはならない。

スウェーデンに於ける經驗に従へば、更らに農園刑務所 (Coloniais agricoles) の設置が望ましいことされる。そしてこの刑務所に於ては、最も確實なる被拘禁者は——就中條件附釋放を、従つてまた一つの善行を期待し得べき被拘禁者——通常必要とされる各種の用意を用ふることなしに拘禁され、且つ使役され得るものたることを要する。監房は小さな田舎家の中に配備されねはならない。この刑務所に於ける被拘禁者の生活は、出來得るかぎり自由労働者等のそれに類似するものたることを要する。かようにして緩和されたる刑の執行は、最も克く被拘禁者を観察し、且つ彼等の値する信任の程度を判定することを可能ならしめる。固より、この農園刑務所は、被拘禁者の選別及び交換等を容易ならしめるために、一つの普通刑務所に附設せられ、且つ普通刑務所の管理者によりて管理されることを有利とするのは言ふまでもない。

そこに不定期刑の制度を存せなかり、條件附釋放は、或る程度に於て、これを代補することになるであらう。現實的刑期の短縮を可能ならしめるこの制度は、顯證期間中、良好に組織せられたる一つの監督を伴はねはならない。この監督は一つの異常なる重要さを有する。賞遇的假釋放 (libération conditionnelle rénumérative) を値しない被拘禁者に對してもまたこの恩恵に與らしめるために、これと並んで義務的假釋放 (libération conditionnelle obligatoire) の制度を認めることを必要とするであらう。それ故に、可成りの長期に亙る各刑の或る部分は、條件附にて監督附自由に變せられねはならない。かようにして、監督

附顯證期間は一般的に被拘禁者の類別の最後の段階となる譯けてある。

そこには別種の取扱を必要とする一つの特別なる部屬を存する。長期刑に處せられたる累犯者、就中反覆的累犯者か即ちそれである。彼等か裁判官の判決によりて直接に不定期の拘禁を言渡されて居るものではないかきり、彼等は、彼等の刑の執行を終りたる後、工業的刑務所及び農業的刑務所と殆ど同一に統制せられたる——而しより多くの特遇を認められたる——一つの保安拘置所 (établissement d'internement) に收容されることを必要とするであらう。

上記の概觀に従ひて、被拘禁者は次きの二大範疇に分布されねはならない。

男 囚 及 ひ 女 囚

これ等の範疇の各個は、更らに次きの二部屬に分たれる。

- (1)、短期刑に處せられたる被拘禁者
- (2)、長期刑に處せられたる被拘禁者

原則として獨房に於てその刑の執行に服すべきこれ等の短期受刑者の間には、刑種による類別以外の類別を爲す必要を存せない。

長期受刑者の間には、年齢による類別が必要とされる、即ち

年少者及び年長者

この二部属の各個は、刑種と職業とに従ひて、次きの三階級に分たれる。

(1)、獨居拘禁囚（最初の觀察期間中）

(2)、半獨居拘禁囚（第一の觀察期間を終りたる後、作業と運動とを共同にし、爾餘の時間は獨房に拘禁せられたるもの）

(3)、共同拘禁囚 この階級に屬するものは、次きの三部属を包容する。

(a)、同一刑務所内の作業に服する者、

(b)、刑期の終り頃、刑務所の農園に於ける作業に服する者、

(c)、農園刑務所に收容せられたる者（最も多くの信任を與へられたる被拘禁者）。

各種部属を通して、長期受刑者は、更らに、彼等の性格、彼等の作業成績及びその他の個人的諸性質に従ひて類別されることを要する。

收容能力を三〇〇乃至四〇〇名に止むべき長期受刑者に対する各刑務所は、三種の監房を有たねはなら

ぬ。

(1)、獨居寢房、

(2)、作業房（獨居拘禁囚に對する）、

(3)、特別寢房又は寢室（共同拘禁囚に對する）。

各刑務所には、作業室、讀書室、休憩室以外に一つの寺院及び——就中年少者に對する諸施設に於て——

——教室、體操場、遊戲場等を存することを要する。病監として就中癲狂院——それを存するときは——

——刑務所の構外に設置されることを要する。

この種の刑務所は農村に設置せられ、且つ既に上述せるかように、その一部に一つの農園刑務所を建設するに適したる耕地を有することを必要とする。

被拘禁者の性格に関する研究を記録する帳簿は嚴正に保管せられ、そして他日累犯等の場合に受刑者に關する情報を供給し得るために、彼等の釋放と共に——條件附又は確定的——中央記録課に保存されることを要する。

(1)、我々はここに解決すべき問題を次きの數語に要約し得る。犯罪事實の輕重と刑の輕重とのそれ、犯人の個性と處罰の様式とのそれと同様に變化的なる四要素の權衡は如何にして見出さるべきか。そして問題は一個の實際問題として課せられて居るものであつて見れば、その解決は凡て事物の現狀に基くものでなければならぬ。何故なれば、進化は現狀に於て見出されたる諸要素の發展に外ならないからである。

(2)、文明諸國の現行法律中に於ける上記問題の解決は、第十八世紀末葉に發達したる自由及び平等の思想に關する特別なる觀念——即ち一般に現在の刑事的諸制度の基礎を成せる觀念——によりて極めて單純化された。ベツカリア、モンテスキュー及びその他によりて與へられたる自由平等の思想に關する觀念は、刑法の根本的諸問題を表見上極めて單純化した。何故なれば、平等原則の結果、處罰に當りて、そこに商量され得るものは、専ら犯罪事實の性質にのみ止まるからである。何故なれば、既に凡ての人間の平等が假定されるとするならば、實際上、刑を決定するものは、獨り犯罪の性質にのみ止まるからである。上記諸家、そして就中ルソーによりて型成せられたる平等の原則は、尙ほより以上を假定する。即ち、凡ての人

間は一つの平等なる理性と一つの平等なる道德性とを有することかそれであり、そして單に社會秩序によりてのみ、彼等の間に人爲的差別が創り出されたるものなることかそれである。従つてそれから抽き出さるべき當然の結論として、この豫定されたる平等の結果、刑罰は單に害惡によりての害惡の報復としてしか理解されないことになるのである。

自由の原則は更らに現行刑法の他の一つの要請を基礎附ける。即ち、刑罰と犯罪事實とは豫しめ法律によりて一定されねばならなかつたことかそれである。かの罪刑法定の原則が第十九世紀を通して、市民の自由に對する一つの本質的保障と看做されたのは、一つにこの學說に基因するものである。

(3)、平等及び自由の思想か、苟くも個人的安全に關するかきりに於て、現代刑法の基礎を形成すべき證權を與へたものであることを、固より何人も否定する譯けには行かない。この思想は、一方に於て國家及び階級の裁判と、そして他方に於て壇斷的刑罰とを斥けた。しかしながら、これ等の諸原則に基きたる刑法は、國權の帶有者とその機關との權力の濫用に對して市民を保障したにも拘らず、犯人に對する一つの充分なる保障を社會に與へるものではなかつた。

假りに人間は平等であるとするならば、犯人の差異は彼等の犯したる罪の差異に基きてしか認定され得ないのは固より當然であらう。例へばモンテスキューに従へば、理想的刑罰法は、裁判官が犯罪事實を確認したる後、刑法によりて確定されたる刑を決定し、且つ言ひ渡し得るかために、犯罪事實を完全に列擧

し、且つその輕重に従ひてこれを分類する一つの表を含むものたるべきなのは、即ちこれかためである。人々はそれに市民の自由に對する一つの保障を見出した。何故なれば、かくのとき精緻なる刑の差等附けの下には、その期間を一つの數字によりて決定し得べき自由剝奪刑のみか——餘りに實際的ならざる罰金を除きては——刑罰制度の基礎となり、そして刑期の長短のみか刑の輕重を定め得たてあらうからである。

しかしながら、この制度は、理論に於ても、また實際に於ても維持され得なかつた。何故なれば、生活は、それか或る限られたる數の法律上の定義によりて維持されるかためには、余りに多様な形の下に發現するからである。ここに於て、裁判官か各個の場合に就きその刑を決定するに當りて準據すべき量刑の範圍を指定することによりて、この確定刑を補足するの必要を生じた。そして實際の必要に對するこの讓歩は、結局、自由の純粹原則の拋棄を意味するものにほかならない。何故なれば、假令法律か量刑の範圍を定めたにしても、各個の場合に就きてその刑を決定するに當りて、裁判官は毫も確實なる法定の尺度に縛られて居る譯けてはないからである。

(4)、かようにして、そこには事實上法律によりて確定されたる刑を存したのではなく、そして裁判官は與へられたる量刑の範圍内に於て刑を決定せねはならなかつたものであるかきり、彼れは勢ひ、單に犯罪事實の輕重だけではなしに、また犯人の人格をも同時に斟酌せざるを得なかつたてあらう。それ故に、自

由及び平等の純粹理論は、犯罪事實の輕重と刑罰の輕重即ち刑期の長短との均衡を求めることによりて、ここに課せられたる問題を解決するものであつても、尙ほ、そこには實際上、第三の要素、即ち犯人の個性か考慮されない譯けには行かないのである。この事情に留意すれば、哲學者の考へた圖式的人間、即ち他人と等しく平等にして自由なる人間に對してはなしに、様々の影響の下に行動する一個の生きた人間に對して、裁判官か法定刑量の範圍内に於て刑を決定したのは、極めて暗安き道理である。かようにして職業的犯人と機會的犯人との區別の標識と看做さるべき累犯は、就中、また刑量の決定に影響を有たざるを得なかつたのである。

(5)、生活は十八世紀末葉の哲學者達の考へた平等及び自由の諸原則を改脩すべく立法者及び裁判官を餘儀なくしたとするならば、刑の執行に關してこれ等の原則を維持することは、更らにより困難であつた。第一に、そこには、單に期間の長短に従ひての刑の差等附けは、決して刑の輕重の差等附けと一致するものでなかつたことか看過される譯けに行かなかつた。何故なれば、二年の刑は一年の刑に比して二倍たけより大なる害惡を含むものと、無雜作に認定される譯けには行かないからである。被拘禁者の個人的諸性質を離れて考へれば、自由剝奪刑に服したといふ事實は、その期間の長短に關らず、最も重要な害惡であることか承認されねはならない。

第二に、そして就中、そこに看過し得なかつた事實は、刑期の同一なる刑か異りたる個人に異りたる影

響を與へ得たことである。十九世紀の刑罰學の主要なる二問題、即ち短期刑の問題と長期刑の執行方法に關する問題とは、何れもこの事實に發祥するものである。

短期刑に關するかきり、異りたる個人に對してその有する働きの差異は極めて顯著である。或者に對して回復すへからざる害惡となり、存在の破滅を意味するものか、他の者に對しては、長い窮乏の後に安穩に衣食し得る一つの愉快なる休養期間と感せられる。若しも加重によりてこの差異を補正しようとするは、結局、一方に於て平等の純粹原則を拋棄し、他方に於て、嘗て排斥せられたる身體刑を——これ等の加重は最早刑の單なる期間と同様に精密に量定され得るものでないことこの事實を無視して——復活するのほかないことになるであらう。

長期拘禁刑の困難は尙ほより以上の重大さを有する。何故なれば、そこには、刑務所を化して閑散の學校、反抗や暴動の醸成所、病氣の溜りとならしむべき危険が常に存在して居るからである。

そこには、獨居拘禁と流刑とかこれ等の困難の若干を克服するかに考へられた時代を存した。しかしながら、その希望は裏切られた。今日ては、現今の行刑制度の弱點に對する一般的救治策として殆ど何人も獨居拘禁若しくは流刑の制度を支持するものはないであらう。

(6)、十九世紀中に提案され、そして行刑制度の過誤を補正するために部分的に實現されたる各種の刑事制度は、尙ほ幾多の困難を超越することか出来なかつた。各國政府かその行刑的諸施設のために使用した

る莫大なる經費にも拘らず、我々は尙ほそこに犯罪の減少した事實を確認することは出来ない。そして假りに犯罪の減少を見た場合に於ても、その本質的功績を歸せらるべきものか刑事制度であることを、我々は斷言する譯には行かない。

この不満足なる結果は、刑法の置かれたる基礎か行刑の確立され得べきそれから全然異つて居ることの事實によりて説明されねはならないものであると我々は考へる。裁判官と刑務所長とはそれぞれ異つた事を考へ、そして異つた目的を追求して居る。裁判官は、平等と自由との思想の前に、出來得るかきり犯人の人格を抹殺し、そして犯罪事實に相當なる一つの應報たるべき一つの刑を決定する目的に於て犯罪を考察すべく法律上餘儀なくされて居る。法律の關するところは、殆ど、犯罪事實の輕重と刑の輕重即ち刑期の長短との間の均衡にのみ止まつて居るのに反して、生きた犯人を取扱はねはならない刑務所長は、彼等の異りたる個性と同一の刑か異りたる個人に對して與へる異りたる作用と、また異りたる行刑處遇に於ける同一個人の異りたる反動とを看過する譯には行かない。かようにして、本議題によりて課せられたる問題の解決には、第四の要素として當然行刑上の處遇を含むことになるのである。

(7)、これ等の理由からそこに要求されるものは、單に刑期だけではなしに、また刑の態様をも決定すべき裁判官の最大なる自由と刑事制度の最大なる殊別化とである。かようにして、刑の個別化乃至不定期刑の言渡は十九世紀の末葉に及んで、かの十八世紀末の刑法の理想とされた自由及び平等のそれに代るべき

理想となつたのである。

しかしながら、これ等の理想は、果して古きそれよりも、より良く實現されたであらうか？そこに爲されたる試みに就きてアメリカより來る報告は、未だ遽かにこれが模倣を我々に奨励するに足るものではない。蓋し、例へば少年裁判所に關する若干の法律によりて裁判官に與へられたる個別化は、實際に於て、假令裁判官の善意に疑ひは挾まないにしても、尙ほ等しき場合に不等の取扱か爲されるといふ印象を與へるとして刑事裁判に於ける公衆の信用を破壊し得べき各種の試みを犯人に對して爲し得る一つの無制限なる裁判官の自由を意味するものなることを考へるとき、この間の消息は自のつから理解されるであらう。そして不定期刑言渡と行刑上の處遇を決定すべく刑務所長に與へられたる大なる自由とは、まさしく個人の自由を否認するものである。何故なれば、この場合市民の運命を決定するものは法律ではなしに、當該官吏の個人的資質と經驗と能力とであるからである。この理由からして、假令刑罰學か各個の被拘禁者に對して、與へられたる場合にそれぞれ適切なる處遇を見出すべく充分に發達して居るものと假定しても、尙ほ異りたる刑務所に於ける被拘禁者の處遇の大なる差異は、刑事裁判所の裁判に對する市民の信用を破壊するに充分である。

(8)、我々の觀るところでは、司法に對する公衆の信用を斷念することなしに、また或る公行政を以て刑法に代らしめ、そして市民をして單に一つの豫戒處分の對象たらしめることなしに、自由及び平等の原則

を拋棄する譯けには行かないのである。かくのとき刑法は我々の公生活の基礎を成す諸原則を餘りに急速に破壊することになるであらうし、従つてこの場合一部の個人に對して齎されたる利益は、一定國家の堅固なる構成といふ點から觀て、そこに拂はれたる犠牲に對比して餘りに高價なる代價を意味することになるであらう。蓋し、尠くとも今日までのところ、我々はかくのとき絶大の自由を豫定されたる裁判官と刑務所長とに對する全幅の信用を公衆に強要する譯けには行かない。そしてまた、假令それか刑法の特別豫防の目的に貢獻するところか如何に大であらうとも、それだけにまた、社會的階級や、人物やその他の偏頗なる目的のために刑罰手段か濫用され得べき單なる疑ひは、尠くとも刑法の一般豫防の効果を益々減殺することになるであらう。

(9)、しかしながら、犯罪事實と刑罰との輕重、乃至犯人と行刑處遇との正しき均衡を見出すために、現今に至るまで刑法の基礎を成せる諸原則は拋棄すべからざるものであると我々は考へる。蓋し犯罪事實の分類と刑の分類との間に舊制度によりて立てられたる平行關係、言ひ換へれば犯罪事實の輕重は刑の輕重に於て、刑の輕重はその期間の長短に於て表現されることは、問題を極度に單純化するものであると我々は考へる。社會は或る範疇の事實に對してその與へる判斷を出來得るかきり明確に表現するために、刑罰の必要を有することは眞實である。それ故に、各社會はその定める刑罰制度によりて、社會教育の一部を成す輿論の中に、犯罪事實の或る差等附けを創定する。この輕重の類別は國民の道德的進化の上に必

要なことである。しかしそれにも拘らず、それは處罰の唯一の目的を形成する譯には行かない。刑罰制度を構成するに當りて、かくのとき事實の差等附けは處罰の目的としてはなしに、寧ろ一つの附屬的効果と看做され得る。

平等の原則は人間の同一性を意味するものではないに、寧ろ一つの人間か他の人間の道具として使用されてはならないとする一つの政治上の要請を含むものであつたこの事實か、舊制度に於ては徹底して居なかつた。この要請の名に於て、舊制度は威嚇の目的を有する往時の残酷なる身體刑を排斥した、しかしながらその平等原則は却てこの同一の要請に反するものであつたことに氣附かなかつた。何故なれば、應報思想に基いた諸制度に於ては、犯罪人は社會からその行爲の否認を表明される對象であつたからである。しかし、若しも我々か平等の原則に従ひて 權利義務の一主體として犯罪人を考察しようとするならば、我々は、刑罰制度の構成に於て、單に犯罪事實と刑罰との輕重をのみ對比させる譯けには行かない。またそこには當然犯人の性質と刑の種類とか考量されねばならない。蓋しアリストートルに従へば、正義は單に平等なる者の不平等なる取扱に於てはなしに、また不平等なる者の平等なる取扱ひに於ても、等しく存するものだからである。

(10)、これ等の考慮から、刑罰制度の構成に向つて次の二點を結合すべき要請が當然發生する、事實の輕重、即ち或る犯罪事實に關して社會と犯人とに與へられる判斷と、犯人の性質、即ち事實によりて表明せ

られたる——そして如何なる行刑處遇か犯人に適用せらるべきかの判斷を可能ならしむべき——彼れの諸性能の「複合」とか即ちそれである。犯人の人格を刑の重き又は輕き量定の理由と認めたことは(例へば動機)の如何によりて制裁の程度に差等を設け、或は犯人の累犯性、善行若しくは減弱的責任能力を斟酌することによりて、今日まで制定せられたる諸刑法に共通の過失であつた。しかし、苟くも我々か犯人の人格を考慮せむとするとき、この人格は決して刑の輕重を決定し得へきではなく、單に刑の種類を選定する上にも意味を有すへきであり、そして各刑種は事實の輕重の差によりて差等附けられ得るものである。

今日の刑法の大多數は既に各種の刑種——例へば徒刑、懲役、禁錮——を認めて居る。しかしながら、これ等の刑種は、原則として、それぞれ事實の輕重に對應する刑の輕重を表するものと看做されて居る。加之、この學說には、より輕き刑の長期はより重き刑の短期に照應すべきものとすることによりて、尙ほより廣汎なる一つの要請が附加される。しかし、これは明らかに一つの根本的誤謬である。我々は事實の異りたる輕重を表はすために、刑の異りたる種類を認める必要を有たない。我々かそこに必要とするものは、たまた異りたる性質の犯人に適當なる刑を言渡すかために、異りたる種類の刑を存することである。

(11)、彼等の性格に従ひて被拘禁者の階級的類別を許し若しくは強要することによりて、刑務所の内部統制は、かくのとき一つの區別の必要に對應することになるであらう。これ等の階級は、被拘禁者の處遇によりて、また條件附釋放の難易によりて相違する。そしてこれ等の差別は、同一刑名の下に、而かもま

た同一刑務所内に於て執行せらるる制裁の異りたる種類かそこに見られ得るほど、爾かくしはしは本質的なるものである。

八〇

他方に於て、この類別を實現することの不可能なる場合、即ちそれか短期刑に關する場合に於て、法律上規定されたる刑の種類の間には、實際上、毫も差別を存するものではないことか、殆ど一般的に愁訴されて居る。蓋し、この場合、一面に於て、法律上異りたる刑の種類は、それか犯罪事實の異りたる種類に對して豫定されて居るにも拘らず、實際に於ては、しはしは單に刑期の長短によりてのみ相違するものあり、而かも他面に於て、法律に於ても、また判決に於ても同一刑名の下に、指定されたる刑は、犯人の性格に従ひて、自づからその効果を異にするものだからである。

(12)、刑罰制度に於ては、單に刑の輕重のみならず、またその態様をも考慮すべき必要を充すかためにそこには、この事態を徹底的に検討し、且刑法自體の中にそれを表明するの必要を存する。そこには、また等しく、刑法自體に於て平等と自由との要請が満足されねばならない。何故なれば、犯人の性質は犯罪事實の一構成要素となるであらうからである。従つて不平等か斥けられ、專斷か回避され得るかために、刑罰は法律によりて豫しめ確定されることを要するであらう。

(13)、この目的を達するかためには、その制裁として單に數日の拘禁若しくは一つの些少なる罰金を以て充分とするかごとき純行政的性質を有する最も輕き犯罪事實は、これを刑法の範圍から除外することを

必要とすへきは疑ひない。これ等の犯罪事實に就きては、最下級の裁判所に於て、これを審判すへきてあるか、若しくは公秩序の維持に任ずる或る行政官廳にその處罰權を托することを適當とすへきか？この場合そこに樹てらるへき一般的原则の如何は、専ら國家の構成形式の如何に關係する。たた何れにしてもそこに要求され得る一事は、それか犯罪中に列せらるへき事實であつて、而かもそれか前に同一の事實に基きて行政的方法によりて處罰せられたることある或る犯人によりて、比較的短き期間内に更らに新たに犯されたるものなるごとき、原則として、重大なる社會的缺陷の表徴と認めらるへき事實は（例へば、乞丐、浮浪等のごとき）、これを刑事裁判所に送附し得へきことである。

(14)、我々は犯罪事實をその輕重に従ひて、例へば重罪、輕罪といふかごとき異りたる種類に——手續の區別を認めることなしに——類別することを適當と認めない。しかしながら、制裁の異りたる種類を認めるかために、従つて、同一の犯罪事實、例へば殺人又は竊盜か、各個の場合に適應すへき行刑的處遇に従ひて、等しく一つの重罪たり、また一つの輕罪たり得へきかために、これ等の名稱を保存することは必要とされるであらう。犯人の性質か犯罪事實の構成要素でない場合、そして或る犯罪事實を犯し得るものか、必ずしも或る性格の犯人に限らざる場合には、これに對する制裁の態様か法律上選擇的に確定され、そして各個の場合に就き、犯人の性質を決定したる上にて、その事實を或ひは一つの重罪として、或ひは一つの輕罪として認定し、而かも同時に犯人に對して適用すへき行刑處遇を決定すへき裁量の自由か法律

上裁判官に附與されることを我々は適當と考へる。

(15)、ここに提案されたる制度の最大の困難は、犯人の異りたる性質に對する法律上の型成である。それの刑罰制度を上記の思想に基かしたるチエコスロヴァキヤの刑法草案は、例へば、貪慾、殘忍、破廉耻等のことき一つの賤劣なる動機の下に犯されたる刑事犯を重罪として表示することによりて、この類別を爲さうと努めて居る。しかしながらこの草案に對する諸批判か、この區別の妥當を承認した場合に於ても尙ほ動機としての貪慾や、殘忍や、若しくは、破廉耻のことき表示か誤認を惹起し得べき危険を指摘したのは、正當である。何故なれば、ここに重要な點は、具體的犯罪の偶然的動機によりて犯人を區別することにはなしに、例へば容易なる領得の機會といふかことき或る動機を犯罪挑發の原因たらしめたる彼等の持續的素質に従ひて、犯人を區別することに存するからである。この理由の下に——法律か二種の刑の間に選擇を許す場合——裁判官は、犯罪事實か犯人の劣悪なる素質に原因したる場合に重罪の事實を認定すべきものとす一般原則を表明することを以て寧ろより適當とするであらう。素質 (disposition) による區別は性格 (character) による區別よりも、より適當であると我々は考へる。何故なれば、裁判官に性格の判別か要求される場合、彼れには犯人の全人格を分析すべき餘りに困難なる任務か課せられるのであらうのに反して、犯罪事實に於て表明せられたる。而かも犯罪の情狀を認定するに當りて裁判官の考慮するを要すべき犯人の心理生活のその部分 (素質) を審査することによりて、既に彼れの素質の如何か決定され得るからである。

(16)、行刑處遇の差異は犯人のこの區別に對應することになるであらう。即ち重罪は例へば懲役によりて輕罪は禁錮によりて處罰せらるべきであらう。懲役を以て罰せらるべきものは、一つの賤劣なる素質を有する犯人に限らるべきであるか故に、懲役の制度はこれを徹頭徹尾一つの組織的改善の目的に適應するものたらしめ得るであらう。そしてこの場合イギリスの例に倣ひて點數を基礎とする累進制度は、各國家の社會的經濟的及び道德的諸事情を適當に參酌したる上にて、懲役に妥當なる一つの方式として採用され得るものであらう。累進制度の強要的若しくは任意的最終段階を、開放的勞働コロニーに於てその刑を執行すべき中間刑務所たらしむべきか否かは、凡てこれ等の諸事情によりて決定されるであらう。一つの組織的教育の必要な被拘禁者即ち賤劣なる素質を表明するのではなしに、單に不幸なる情狀の下に罪を犯したるに止まる類の犯人を除外したる懲役監は、殺人又は竊盜の累犯者か同情を値する殺人犯人と同一の處遇制度の下に置かれて居る現今の刑務所に於けるよりも、一つのより嚴格なる紀律と一つのより組織的な教育とを確立し得ることになるであらう。

輕罪を犯したる犯人に對する刑務所は、被拘禁者の自由を制限することに、そして作業の選擇に於て一つのより大なる自由と、釋放せらるべき一つのより大なる機會とを與へることに、その任務を制限し得るであらう。

この區別は尠くも一年以上の刑期にかかる刑に對して、専らその全意義に於て認められ得るであらう。これ等の長期刑の執行に對しては、それか一年以上の懲役に關するときは、最も重き刑種、例へは徒刑のとき現在の刑名を保存し得べき特別刑務所を設置する、とか望まじきこととされるであらう。一年以下の懲役と禁錮とは、經濟の目的に於て、獨房制による共同刑務所内に於て執行され得るであらう。しかしこの場合、これ等の刑務所に於てもまた、犯人の不良なる素質が明瞭に明示されるために、被拘禁者の二種の部類は、衣類、作業、接觸の許可その他によりて區別されねはならないのは、固より言ふまでもない。

刑と犯罪事實とのこの區別によりて、また等しく、名譽の見地に於て有罪判決の與へる結果に就き一つのより良き區別の目的が達せられ得ることになるであらう。

賤劣なる素質に従ひての被拘禁者の類別は疑ひもなく餘りに圖式的 (schematique) に見えるであらう。しかしながら、この場合我々か看過すへからさることは、それか尙ほ分類の第一歩を爲すものたることとあり、且つそこには、同一の犯罪に因り、而かもその罪か輕重の度を等しくする場合であつても、尙ほ恐らくは同一の刑期にかかり、而かも異りたる刑種に屬する自由刑によりて、二人の犯人か處罰され得るものなことを、就中公衆に理解せしめる必要を存することである。新しき刑務施設に於て爲されたる經驗と賤劣なる素質の觀念に結合されたる刑事裁判とがやかつて犯人の性質と行刑處遇とに關するより精緻なる立法に到達するの日は、これを近き將來の進化に俟つの外はない。

結 論

(1)、その性格に従ひての被拘禁者の類別を容易ならしめるために、社會的關係を支配する諸原則に對する單純なる不從順、若しくはそれ自體に有害ならさる一つの不注意に基きたる最も輕微なる犯罪事實はこれを刑罰法の範圍から除外することを要する。

(2)、犯人はその性格に従ひて區別される譯には行かない。犯罪事實によりて表明されたる素質に従ひて區別さるべきである。犯人か一つの賤劣なる素質を有するものであつたか否かに従ひて、犯罪事實は重罪と輕罪とに區別されねはならない。この場合、この區別は犯罪事實の異りたる輕重を示すものではなしに行刑處遇か依つて決定せらるべき犯人の或る異りたる素質を示すことになるであらう。

(3)、重罪の制裁を目的とする刑務所に於ては、それか一年以上の刑期にかかる場合、累進制度が確立さるべきであらう。刑期一年以上にかかる輕罪の制裁を目的とする刑務所に於ては、原則として、犯人を社會から離隔することを以て、その趣旨とすへきてあらう。そしてこの目的のためにする被拘禁者の處遇は遙かにより寛大なるものたり得るであらう。

(4)、刑期一年以下にかかる刑は獨房制による共通施設に於て執行され得るであらう。そしてこの場合被拘禁者の二つの部類は、凡て出來得るかきり衣類、作業その他によりて區別されることを要するであら

IX

報告者

M^{lle} G. van Elzelingen,Inspectrice du Service administratif des Patronages aup ès du Ministère de la Justice,
La Haye

刑罰及び刑罰の適用に關しては、國によりて異りたる觀念を存するのであるから、この問題に就きて、我々は凡ての國に對して或る同一の解答を與へ得るものではあるまいと考へる。それ故に、私の解答は、この領域に於けるオランダの現状によりて表現される一面を説明し、且つそこに可能とせらるべき改革の一般を示摘することに制限されるであらう。

一八六六年の公布にかかるものであつて、現今尙ほ施行されつつある我が刑法典の規定によれば、五年以下の刑は凡て獨居拘禁に於て執行される。但し一つの醫學的檢診の結果、受刑者が獨居拘禁制による處遇に不適當なることが明らかにされたる時、若しくは受刑者が六十歳以上の者なるときはこの限りでない。そしてこの最後の場合に於ては、單に受刑者の請求に基きてのみ、獨居拘禁が科せられ得るのである。

五年以上の刑に對しては、敢て獨居拘禁制を適用せず、一般に、共同拘禁制が維持された。そして被拘禁者が殘餘刑期の全部又は一部に就き、獨居拘禁を請求する場合にのみ、この原則に對して一個の例外が認められ得るのである。

しかしながら、これ等の規定は單に十八歳以上の受刑者に對してのみ適用され得るものである。十八歳以下の受刑者に對しては、我がオランダは矯正院 (*Inrichtingen*) の國立教育所 (*rijks-opvoedingsgestichten*) とを有する。

一九一八年に、有罪判決の執行に著しき澁滞を來さしめたる例外的事情の結果として制定せられたる一つの應急的法律はこの確定原則を廢止して、軍刑をも含めたる凡ての刑罰は共同拘禁に於て執行され得るものと規定した。そして從來單に乞丐者と浮浪者との收容にのみ充當せられたるヴェーンハイゼン國立農園事務所 (*Rijkswerkvoeding te Veenhuisen*) に於けるこの法律の執行を可能ならしめるために、禁制品に對する有罪判決の共同執行に充當されたる一部監と、若干部類の被拘禁者に彼等の殘餘刑期を共同拘禁の下に執行することを目的とする他の一部監とを設備した。これ等の受刑者は最も周到に選別されて、一つの嚴格なる軍隊の監督の下に、ヴェーンハイゼンに收容された。彼等に對しては、凡て農業作業又は工業作業が課せられた。そして彼等は、出來得るかきり、ヴェーンハイゼンの通常在所者、即ち浮浪者と乞丐者とから隔離されたのである。

この法律を制定せしめたる事情はやかて消滅したものと考へられ得たにも拘らず、尙ほそこにはヴェーンハイゼンに共同拘禁制を維持することの必要か信せられた。獨居拘禁制と並んで共同拘禁制を回復すべく、オランダ國內に於て益々強調せられたる傾向は確かにこの維持に貢献するところか尠くなかつたであらう。しかし兎も角も、そこにはこの年來の經驗に基きて、多くの變改と改良とが加へられた。かやうにして、ヴェーンハイゼンに於て、その刑の執行のために先づ第一に選ばれたるものは、尙ほ未だ刑務所に在監した經驗のない受刑者であり、そして第二に考慮されるものは、獨居拘禁か餘りに苛酷にすぎるかに見える受刑者である。ヴェーンハイゼンに於てその刑の執行を受け得るこの種受刑者の數は漸く百二十名に止まる。彼等には専ら農園作業か課せられる。そして天候か餘りに不良なるときは織筵作業か課せられる。彼等は晝間を通して雜居し、夜間は多數寢房に區劃されたる寢室に移される。そこには軍隊守衛か禁止され、そして通常監守も最小限度に止められる。この共同拘禁の試みか果して如何なる現實的結果を齎すてあらうか、今日尙ほ未知數に屬する。

有罪判決を執行するために、オランダには、その執行せらるべき刑か一年を超へざるもの、五年を超へざるもの及び五年以上無期に至るものに就き、各別の刑務所を有する。男囚に對しては、前二種の刑務所の多數と、第三種、即ち五年以上の受刑者に對する一刑務所とを存する。尙ほこの外、そこには神經病者結核病者及び六十歳以上の老齡者の處遇に充當せられたる所謂特別刑務所 (*byzond re strafgevangenis*)

を存する。そしてこの刑務所か抗拒者に對する一部監を有するに至つたのは、極めて最近のことである。女囚に對しては、ロッテルダム男監の一監翼かその専用として改造された。一部分は五年以下の刑に對するものであり、他は五年以上の刑に對するものである。これ等刑務所の外に、そこには男囚に對して二個の、女囚に對して一個の國立勞役場 (*Rijkswerkint Hkangen*) を存する。有罪判決の執行に於ては、拘禁期間中、刑務所内に於て等しくそれを繼續し得るかごとき方法に於て、受刑者か入所前社會に於て行ひたる稼業か出來得るかきり斟酌される。若しも受刑者か如何なる稼業をも知らない場合には、彼れの拘禁中、彼れをして努めてその一つを習得せしめるのである。

かくのごとき事態の現状を基礎とし、且つ現下の經濟的困難を考慮して、我々は、オランダに關するかきりに於て、上に型成せられたる問題に如何なる解答を與へ得るか？若しも刑罰か處罰と同時に改善を目的とするものであるならば、被拘禁者の性格、彼等の人格、刑期の長短及び所犯の性質に従ひて爲される被拘禁者の分類か凡ての國に課せられたる共通の問題たるべきは明白である。そしてそこに被拘禁者の處遇か個別化され、且つより高き一つの道德的水準に達することの可能性か彼等に與へられねはならないのは、極めて確實である。

我々は分類から次ぎのものを除外せねはならない。

(a)、性格の點より觀て、

一つの全然特別なる處遇を要求する精神病者。

(b)、刑期の點より觀て、

(1)、教育よりも、寧ろ一種の應報を目的とするの故を以て、輕微なる犯罪に科せられたる一つの短期拘禁刑の執行を受くる者。この種の受刑者に對しては、凡ての分類が實際上排斥されるかに見える。蓋し彼等に在りては處遇の期間が餘りに短きに失する。従つてこの場合、若しも彼等の間に處遇を異にする各種の範疇が區別されるとするならば、結局、刑はその意義を失ふことになるであらう。

(2)、一つの重大なる罪に就き極めて長期の拘禁刑を言渡されたる者。何故なれば、この場合の處罰は一つの長期刑を要求する社會意識に満足を與へると同時に、就中、社會を保護することを目的として居るからである。

しかし、それにも拘らず、この種受刑者に對しては、敢て凡ての區別が排除されるといふのではない。固より、被拘禁者には、刑務所内に於ける彼れの精勵と彼れの善行とによりて、彼れの運命を改善し得る機會が與へられねばならない。そこには、恐らく、長き間隔に於てのみ許與せらるべき一種の賞遇制度が確立され、漸時、中間處遇として一つの屋外監 (openlucht-gevangenis) に移され、そして最後に條件附釋放によりて、再び社會に復歸せしむべき組織が可能とされるであらう。

(c)、所犯の性質より觀て、

風俗に關する罪を犯し、而かも大部分一つの特別處遇を必要とする受刑者。

それ故に、殘るものは、そこに科せられたる刑の目的か第一に一個の道德的回復處分たるべき者の部類である。刑罰に一個の改善的性質を與へることを主眼とする分類の對象とせらるべきものは、主としてこの部類の受刑者なのである。

この部類の被拘禁者は先づ男囚と女囚とにこれを分別し、男囚は更らに、犯罪性のより微小なる者と犯罪性のより強大なる者とにこれを再分する必要を存するであらう。性格、刑期若しくは犯罪の性質に従ひて被拘禁者の分類を初めるのは必ずしも望まじきことではなく、寧ろ犯罪性の異りたる程度に應じて別種の刑務施設を有つことが適當であるかに考へられる。若しも我々が個別化に便する一制度を欲するならば我々は一つのより嚴正なる類化かより容易く實行され得る大刑務所制度を採擇すべきであらう。何故なれば、假令我々は被拘禁者の過去に關する一つの報告に基きて、彼れの人格に就き、また出來得るかきり正確なる知識に達し得るとしても、尙ほ被拘禁者を一定の部類から他の部類に移すことを必要ならしめる諸々の特性は彼れの拘禁期間中に展開し得るものだからである。しかしながら、被拘禁者に作業を供給する必要上、私かここに適當として指示したる制度は、各刑務所の廣さから見て、オランダに於ては部分的にしか適用され得ないであらうことを附言せねばならない。

これ等刑務所の何れに於ても、その處遇制度は出來得るかきり被拘禁者を社會的生活に堪能ならしむへ

き見地を忘れることなしに、彼れに於て見出される諸般の可能性を適正なる指導の下に展開せしめることを目的とせねばならないであらう。従つてその當然の結果として、刑罰は勢ひ共同拘禁制の下に、若しくは尠くとも部分的共同拘禁制の下に——例へば夜間を除きたる一つの完全なる共同生活の制度への移行行きとして、作業中の共同と作業外の隔離——執行されねばならないことになるであらう。若しこの制度が適用されれば、犯罪性の微弱なるものを最も不良なる累犯者から厳正に分別することか絶對的に必要とされる。累犯者は徹頭徹尾これを前者と接觸させる譯けには行かない。従つてまた彼等はこれを別の施設内に收容することか必要とされるのである。

刑期には等しき差等を存し得るのであるから、短期受刑者と長期受刑者とはこれを別個に處遇することか必要である。そしてこの後者に屬するものは、可能なるかきり、刑務所内の別監に收容されねばならないであらう。犯罪性の微弱なる被拘禁者に對しては、次きの三期か區別せらるべき一制度を適用することか必要とするであらう。

(1)、初期——嚴正獨居。彼れの過去に關する所與に基きたる被拘禁者の徹底的研究。多量にして重き作業。

(2)、中間期——嚴格なる統制の下に於ける一つの共同作業への轉移、或る自由と賞遇との累進的許與。若しも彼れの行狀に非難すべき點なきときは、次期への轉移。

(3)、終期——漸時に緩和される統制の下に於ける一つの共同作業。最後には監外に於ける或る自由と同等に達すべき監内に於けるより大なる自由の許與。

懲罰事犯は嚴峻に處罰されねばならない。現存の懲罰以外に、この制度に於ては、獲得したる賞遇の評價と一つのより嚴しき統制下への轉置とを採用することか適當とされるであらう。

重大犯人に對してもまた、この制度を進行することを必要とするであらう。そしてこの部類の被拘禁者に關しては、刑務所理事者は、單に被拘禁者の過去に就きてたけてはなく、また彼れかその前科の執行を受けたる刑務所に於ける彼れの行狀と彼れを累犯に導きたる諸動機とに就きて、また出來得るかきり正確なる知識に達することか望ましきこととされるであらう。彼れを他の被拘禁者と共同に拘置するに先ちて先づそれか彼れの場合果して適當なるかを検査するとか肝要である。そして反對の場合に於ては、この教化的制度に據らず、且つ獨房に於てその刑を執行し得べき一つの刑務施設に彼れを收容するの可能性を存することか必要とされる。この種の刑務施設の存在は、依然として不良なる行狀を固執するか、若しくは教化的處遇に反抗的態度を示す被拘禁者かそこに移監され得るかためにも、またこの施設の一部か一つの獨居拘禁を希望する受刑者のために供用されねばならないかためにも、この制度に於て、尙ほ必要なことである。何故なれば、共同拘禁制か假令如何なる利益を有ち得ようとも——オランダのことき一小國に於て——私の觀るところでは、或る受刑者はその意に反して他の被拘禁者と共同に拘置さるべきではないか

らてある。

ここに略記したる制度が刑務所長の任務を異常に重からしめるものたることは、敢てこれを證明するの必要を存せないであらう。彼等は堪能なる教育家、聰明なる作業監督者及び信用ある看守達の補佐を必要とする。彼等は彼等の刑務所の在所者達と親しく接觸する時と手段とを有し得るかために、彼等の職務の行政的部分はこれを一つの特別な事務分科に托することを得るであらう。

若しも條件附有罪判決が適正に運用され、一つの嚴格なる監督によりて定められたる猶豫條件の遵守が保障され、そしてこれ等の條件に違背したるか若しくは一つの新たな罪を犯したる場合に於ける處罰が峻厳であるならば、且つ他方に於て、専ら一個の制裁たることを趣旨とする一つの刑罰と、制裁と同時に被拘禁者を教育するに適切なる或る施設に於て執行せらるる一つの刑罰との間に選擇の可能を存するならば、そこには、漸時良好なる成績が期待され得るに違いない。刑期を確定せずして、而かも教育的要素を制裁的要素に優越せしむべき刑罰を言渡す可能性が、短期刑の場合に於ける條件附釋放と同様に、ここに問題とされる制度の實行を有利に導くであらうことは疑ひない。

オランダ刑務所の現行制度に於て認められる可能性と照合して、私か上に説明した制度の部分的適用は經費の著しき増加なしに完全に實現され得るであらうと私は考へる。

第二部 第四 問

成年受刑者の所得積立金 (Pecunie) の設定並びに拘禁中及び拘禁後に於けるその利用方法は、これを如何に構成すべきか。

或る裁判上の決定の執行中、或ひは賃銀 (salaires) の名義に於て、或ひは賞與金 (gratification) 又はその他の名義に於て未成年者に給與されたる金員の管理、取扱及び使用は、これを如何に構成すべきか。

I

報告者 Erienne Matter,

Ingenieur des Arts et Manufactures, Secrétaire général de la Société de Patronage des Prisonniers Libérés protestants, Paris.

労働は本質的に教化的である。そして一つの過誤を犯し、且つその自由を奪はれたる人間に取りては、

特により多く教化的である。

しかしながら、進んで労働すべく被拘禁者を促進するかためには、彼等の努力が一つの報酬の期待によりて奨励されることか必要である。この報酬は直接の物質的利益、即ち糧食の増給、衣類、圖書の購求のことに存し得るであらうし、また更らにより間接なる利益、即ち一つの善良なる行状と一つの優良なる作業成績とに基く假釋放及び一つの退所準備金 (peuple de sortie) の設定のことに存し得るであらう。それ故に、作業は周到に且つ適正に組織され、最も近代的なる設備を有し、そして最良の代償を拂はるべきものでなければならぬ。且つまたこの作業組織は、出來得るかぎり民間手工業との競争を避けるかために、大規模の各種公行政との供給契約に基くことを必要とする。

愉快に労働し充分の手當を受けたる労働者は、最良の道徳的及び生理的諸條件の下に展ひ行くであらう。一受刑者の生活に於て、彼れが刑務所を去る瞬間より、もつと危険なる時期はない。固より、未決拘留又は保釋中、彼れは彼れの無罪の立證若しくは彼れの責任の軽減を試みるべく惱ましき不安の時を経験した。彼れの拘禁中、彼れは雜居若しくは獨居生活の單調に苦み、恐らくはまた不愉快なる仲間の混淆に惱まされた。しかしながら、一般的に、諸々の困難が初まるのは釋放の時である。如何にして生活を立て直すべきか？ 如何にして新たに或る地位を見出し、被服や工具を調べ、室を借り、求職期間中の糧を得べきか？ 退所準備金は即ちこの必要に應ずるものであり、そして専らこれを目的とするものである。然るに

釋放者の輔成に従事したる凡ての人々は、一大多數の場合に於て、爾かく辛苦して獲得されたる金員は、或ひは放蕩に、或ひは不用の物品に若しくは奢侈に、時としては、舊債の支拂に濫費されて居ることを確認した。二十八年間の我々の經驗に於て、我々は、爾かく濫費されたる退所準備金の無数の歴史を實證した。例へば或る男は釋放後二日間に三五〇フランの交付金をいかかはしき場所に於ける飲食その他に消費したる後、輔成會を訪れた。また他の或る男は彼れの退所の翌日或る賣女から彼れの作業交付金の一二七フランを窃取され、全く無一文となつて輔成會に縋り付いたのである。

この種の不都合は條件附釋放の適用に於ては生せない。この場合には、實際、釋放者によりて積立てられたる交付金は、刑務所の官吏(書記)から、直接、輔成會に送附され、そして輔成會はその輔成する釋放者を誘掖して凡てこれを有益なる用途に使用せしめるのである。ここに二三の實例を擧げるならば、我々か或る青年を理髮師にする必要を認めるとき、我々は親しく彼れを専門店舗に同行して、作業服、剃刀、櫛、刷毛等、彼れの稼業に必要な品物を購買せしめた。また或る靴工のために、我々は彼れの職業用具を購入せしむべく、等しくその店舗に彼等を同行した。そして若しもこの男かかくして購入されたる品物を再びその店舗に持ち來りて買戻しを請求しても、決してその代金を拂戻してはならないことを、我々は特に供給者に注意した。何故なればこれ等の金員は一般に悪い用途に向けられて居たからである。若しも、被輔成者か地方に労働を見出したる場合には、我々はまた等しく彼れを停車場に同行して彼れの乗車

券を購求し、而かも發車を待つて彼れか實際に出發した事實を確めて居るのである。

輔成會は釋放者に最大の信用を示すことによりて、また彼等の社會的回復を彼等に保證することによりて、同時に、輔成會はその確信を裏切られないかために必要なる凡ての注意を爲す義務を有するものである。

條件附釋放の場合に行はれる手續は、凡ての釋放者に對して法律上義務的とされねはならないものであらうと、我々は考へる。

政府によりて認許されたる或る輔成會を存する地方に在りては、事態は極めて容易であらう。若しも釋放者の赴く土地又はその隣接地に輔成會を存せないときは、彼れの作業交付金か何人に送付され得べきかを判定する必要を存するであらう。即ちこの場合、或ひは彼れの家庭にせよ——若しも彼れの家庭か眞面目であつて而かも彼れに對して權威を有つて居るものであるならば——、或ひは市町村の執行機關にせよ、或ひは警察官廳にせよ、兎も角も本人の社會的回復を確實にするために、それか最大の注意を以て處理されることの期待され得る者の手に引渡されることか肝要なのである。

退所準備金送付のために、そこには、釋放以前に適當なる凡ての情報を蒐集し、且つ一つの輔成會又は或る他の官憲の監督の下に、退所準備金の一つの良好なる使用のために必要なる處置を取るべき一つの輔成委員會を各刑務所毎に構成する必要を存するかに考へられる。

或る裁判上の決定の執行中、或ひは勞銀の名義に於て、或ひは賞與金その他の名義に於て未成年者に給與されたる金員に就きても、また同一の諸原則が適用されねはならないであらうと考へられる。

そこには次きの二つの場合を區別することか必要である。

(1)、少年か一つの矯正若しくは感化施設に拘置されて居る場合。——この場合、その施設の理事者は少年に作業を奨励するために、また出來得るだけ多くの額を彼れに給與し、そして一つの退所準備金即ち釋放持參金を構成するために、これ等金員の充分なる一部を彼れの釋放せらるべき時期まで保管することを要するであらう。

(2)、少年か或る行政廳又は或る輔成會によりて私人に委託せられたる更らにより有利なる場合。——この場合には、かやうにして少年を附託したる行政廳又は輔成會は、彼れの作業交付金を管理し、處分し得べき凡ての金額を貯蓄金庫又は或る特別會計に拂込むことを要するであらう。かやうにして爲されたる凡ての拂込はこれを少年に通知することを要する。蓋しこれによりて、彼れの金員が適當に保存され、そして彼れか裁判上の決定の執行を免せられるの日に自から受領し得るものなごとか、少年に理解されるであらう。

この作業報酬積立金の善良なる使用は少年か成年に達したる時にも尙ほ管理されねはならないであらう。

成年釋放者又は行政的に育成されたる未成年者の作業交付金のこの使用管理に關しては、しはしは一つの原則的問題か論議された。これ等の諸條件の下に取得せられ且つ積立てられたる金員は全部その所有者に屬するか、そしてこの所有者は、自由に、而かも多少とも不道徳的な氣まくれのためにも、これを處分する權利を有するかか、即ちそれである。この問題に對しては、我々は極めて明確に否と答へる。蓋し一方に於て、多少とも長き間の或る拘禁生活の後に、釋放者は、或る意味に於て、自律の能力なき小供のやうなものであり、且つ他方に於て、積立てられたる金員は、極めて罕れなる例外を除きて、彼れの入監に當りて、而かも彼れの給與のために提供されたる經費を代表するものではないのである。それ故に、釋放者をして彼れの報酬積立金に就き一つの不良なる使用を爲さしめるかことは、論外の沙汰である。實際の見地に於ても、また純正義の見地に於ても、社會はこれに對して管理の權利を有する。否寧ろ社會はそれの義務を有するものである。

希望

何れの國に於ても、立法は、釋放者及び裁判上の保護處分の下に育成せられたる未成年者の報酬積立金の使用に就き、輔成會、行政廳若しくは警察を介してこれを管理するの組織を定むることを要する。

追放されたる外國人の報酬積立金は、彼等の本國に於て釋放者の社會的回復のために利用されるためにまたその本國の權限ある官憲に引渡さるべきものであらう。

II

報告者 Léon Barthès,

Docteur en droit, Avocat à la Cour d'appel d'Orléans, Ex-Directeur des Services pénitentiaires d'Alsace-Lorraine.

囚徒積立金 (pénale) はこれを行政的に定義するならば、被拘禁者の拘禁期間中、彼れの計算に記入されたる金錢の全體である。囚徒積立金は極めて雑多なる諸要素、殊に、入監に際して被拘禁者の持参したる金員、家族又は個人より送附せられたる扶助金、彼れの財産の管理を留保したる受刑者に歸屬する利金及び所得、刑務作業の報酬を包含し得る。この最後の要素は最も重要なものである。そしてそれは、フランスに於て、囚徒積立金の十分の九を構成する。

我々の説明の明確を期するために、囚徒積立金の設定に關しては次きの二種類を區別することか適當とされる。

- (1)、刑務作業の報酬より成る積立金
- (2)、刑務作業の報酬に關係なき積立金

これ等二種の積立金は、國家及び被拘禁者の權利に關して、殊に積立金の利用に關して、實際、異りた

る解決を許すものであるかに見える。

囚徒積立金か問題とされるべき、一般に、そこに考察されるものは、拘禁期間中に爲されたる作業より生ずる報酬である。本會議第二部第四問は殆ど、全體的にこの作業報酬に關係する。一八九五年のバリー會議の議題、『被拘禁者は勞銀請求の權利を有するか』は、作業所得としての囚徒積立金は國家に屬すべきか或ひは被拘禁者に屬すべきかの點を眼目としたものである。従つてこの場合の問題は全然理論的であつた。然るに、本會議の第四議題が我々に課するものは就中一つの現實的研究である。そしてそこに要求されるものは専ら實際的解決である。

囚徒積立金の設定に關する各種の立法及び規則を檢討するとき、これ等の法制は凡て二つの原則によりて支配されて居ることか確認される。被拘禁者は彼等の生産に基きたる一つの報酬を得て作業するか、或ひは被拘禁者は無報酬にて若しくは一つの僅小なる報酬を得て作業するかか即ちそれである。第一の觀念に於ては、就中、被拘禁者と、被拘禁者及び國家に對して作業の代表する利益とを考慮されて居るのであり、第二の觀念に於ては、本質的に、作業は刑罰的であり、そして刑罰は被拘禁者に對して凡ての權利と凡ての金錢的讓與とを拒否するといふことか考へられて居るのである。

それ故に、我々は、次きの二つの見地の適用とそれの結果とを順次に検討しなければならぬ。

(1)、作業收益の一部を被拘禁者に給與する主義。

(2)、國家が作業收益の全部を收得する主義

(1)、フランスとベルギーとは、被拘禁者に彼等の作業收益の重要な一部を賦與するヨトロッパに於ける二つの國である。刑務作業の收益は、大部分——最も重き刑にかかる場合を除きて——それを生産する者に賦與せらるべきものとする。所謂の奴隸勞働に反抗するこの觀念は、我々の拘禁に關する學說と等しく極めて古くから存在するフランス的思想の一つである。單純なる縣令によりて設立せられたる若干刑務所に我が初めての作業場が設備せられたる革命歴九年以來、作業收益は『刑務所と囚人』との間に分配された。一七九一年九月二十五日の命令(第十七條)の定むるところによれば、受刑者の作業收益は、刑務所の共通經費に對して三分の一、被拘禁者に對して三分の二の割合に於て配分された。一八一〇年の刑法典は輕罪囚に對してこの配分を維持した(第十四條)。そして一八一七年四月二日の命令は、これを次きのことと精定した。『刑務所の共通經費に向つて三分の一、受刑者に對して三分の二、そしてその一半は彼れの拘禁中に支拂はれ、他の一半は彼れの釋放期に留保される』。爾來、尙ほ中央刑務所に於て實施されて居る一八四三年十二月二十七日の命令及び地方刑務所に適用される一八九三年十一月二十三日の命令は従前の成規に若干の制限的修正を加へたか、しかしながら原則は依然として同一であつて、被拘禁者は一七九一年に制定せられたる諸規定に従ひて彼れの作業收益の一部分を賦與されるのである。自由勞働者と等しく、被拘禁勞働者はまた一つの賃率表に従ひて報酬を支給される。國家は刑の性質と被拘禁者の前科とに従ひて

作業収益の一定部分を控除し、殘餘部分は受刑者に賦與される。それ故に、この部分の算定は極めて簡單であつて、一個の純然たる數學的計算なのである。

しかしながら、この簡略は我々に於て承認しかたいものであらう。實際、この方法の適用は、同一部類の被拘禁者に對して、行刑處遇上眞の不平等を招來する。そしてこの不都合は、現今の高い勞銀と關聯して、百年以前、五十年前、否寧ろ十年以前に於けるよりも、更らに限りなく嫌忌すべきものであらうことを、我々は附言せねばならぬ。賃銀の名義にもせよ、又は作業賞與金の名義にもせよ、兎も角も被拘禁者の生産に基きたる作業報酬 (Kontingente) は、刑の執行に於て確認される最も顯著なる不平等である。受刑者の報酬は彼れの從事する工業部類によりて相違する。加之、分勞組織と共に、この報酬は同一工業内に於てもまた相違し得る。しかし工業部類を異にする場合、この不平等は、更らに著しい。この報酬は實に一から二十までの割合に於て相違し得るのである。或る受刑者は、彼れの入監の初めから、既に一つの高い作業報酬を收め得るのに反して、工業の分類によりて便宜を與へられたる他の被拘禁者は、却て數月後、否寧ろ場合によりては數年後に至りて、漸く同一の報酬に均霑し得ることになるであらう。二人の被拘禁者の間に於て、恐らく罪責のより重きものか、よりよき報酬を受けることになるであらう。強健にして器用なる累犯者は、肉體的に若しくは職業的により不堪能なる初犯者に比して、より大なる特典に浴し得る。最も惡性なる犯人はしはしは優秀なる勞働者である。そしてこれは凡ての刑務官吏か等しく確認する事實

なのである。刑の執行に於けるこれ等の不平等は、固より、累犯者に賦與される比率を制限する規則の設定によりて緩和されるものではあらうか、しかしながら、それは専ら作業の現實的生産に基きて報酬を支給する方法の弊害を匡正するには無力である。

最も重要な諸刑務所としての中央刑務所に於て現今適用されつつあるフランスの規則は一八四九年以來のものであることを、我々は指摘した。この時代に於ては、受刑者は低い賃率によりて、一日當り極めて僅かの報酬しか得なかつた。然るに、現今では全く事情を異にする。そして受刑者は一日當り十五フラン乃至二十フランの収益を擧げることが罕れてない。若しも彼等か初めて一つの長期刑の執行に服するごすれば、彼等は、彼等か禁錮受刑者たるか、或ひは懲役受刑者たるかに従ひて、彼等の作業収益の十分の五或ひは十分の四を受けるのである。我々は、アルサス・ローレーヌに於て、しはしはこれ等の高い作業報酬を確認した。そしてアグノー中央刑務所長は、或る日、十年の懲役に處せられたる一女囚か、一日當り約二十フランの作業収益を擧げて、結局、一萬二千フランの最小積立金を持つて退所した事實を指摘した〔註一〕。同所長か正しく附言したかやうに、無償にて衣食の給與を受けたるこの女囚は、明らかに彼れの看守達のそれに優りたる一つの物質的地位を有つて居たのである。固より、これ等の高き賃銀は比較的少數の場合に屬するものであり、そしてフランスに於て國家か作業収益から控除する部分は被拘禁者の給與費 (行政及び監守の費用を含みます) を補填するに足らないものであることを注意せねばならぬ。

〔註一〕、一日當り二十フランの収益に當る作業に就き、十分の四の作業報酬を支給される一女囚は、毎日八フラン、即ち彼れ自から自由に處分し得る報酬四フランと退所交付金として積立てられる四フランとを受ける。それ故に、作業日数を假りに三〇〇日とすれば、彼れは一年間に退所交付金として一、二〇〇フランの積立を有つことになるであらう。

しかしながら、何れにしても、作業収益から被拘禁者に賦與される部分は、現時、フランスに於て、余りに多きに失するものであると、我々は考へる（未決囚に對しては十分の七、禁錮囚に對しては十分の五、懲役囚に對しては十分の四）。一九一九年から一九二三年にアルサス・ローレーヌに於て適用されたる——そして二三の點に修正を加へてドイツの舊制を踏襲したる——作業報酬（既決囚に對しては十分の一若しくは十分の二、未決囚に對しては十分の四）は、我々に於ては充分であるかに考へられる。凡ての國家に於て、財政的考慮を必要とする一時代に於て、被拘禁者に賦與せらるる作業収益の部分を制限するのは合理的であるかに見へる。被拘禁者は彼れの作業報酬を以て、彼れに必要な補充糧食を酒保に於て購買するを要する現状に在りては、この作業報酬の削減は、固より、國家に對して一つのより充實せる糧食の支給を要求することになるであらう。糧食の不充實なる結果、被拘禁者は往々にして専ら酒保より物資の供給を受けるかために、言ひ換へれば、國家によりて、若しくは國家の管理の下に、原價に近き價格表に従ひて販賣される各種食料品を購買するかためにのみ作業して居るのである。この酒保の制度は、何れ

の時代に於ても正しく批難された。そして如何なる論者も、同一部類の被拘禁者の間に糧食の平等を保障する規定の確立を希望しないものはない。適當に營養されたる被拘禁者は、一つの乏しき報酬の下に於て尙ほ、彼れか遙かにより良き報酬の下に一つの不充實なる糧食の支給を受けたるときと等しき熱心と注意とを以て作業に従事したことは、アルサス・ローレーヌに於て爲されたる經驗のまさしく證明するところである。

現制の維持を主張する論者達は、言ふまでもなく、受刑者に作業収益の重要な一部を賦與することは被拘禁者を彼れの生産に興味付け、且つ彼れに所有欲を助長する唯一の方法であることを確認する。既に百年以上の久しきに亙る一つの傳統に基いたこれ等の確認を我々は決して否認するものではない。しかしそれにも拘らず、我々は全く無批判にこれを受け容れる譯けには行かない。そして我々は高い勞銀と、被拘禁者に支拂はれる報酬に於て存する重要な差異とに反對するであらう。我々の觀るところによれば、これ等の差異は刑罰平等の原則に最も重大なる侵害を與へるものであり、そして同一の刑事制裁を科せられたる受刑者に對してその招來する不平等は、刑罰學者によりても、大多數の行刑家によりても、また況んや微少なる報酬にしか均霑しない利害關係者によりても決して認容されないものであらう。

(一)、國家か作業収益の全部を收得する主義

前の主義に對立するこの主義に於ては、被拘禁者は、法律上にも、事實上にも、その作業収益に基きて

如何なる報酬をも受けない。収益の全部が國家に歸屬する。蓋し、刑務作業は刑罰の一部であり、この作業は刑役であり、そしてそこには、如何なる場合に於ても、被拘禁者に、自由労働者のそれに類する一つの報酬を要求し得るかとき考へを與へてはならないといふ思想に、この主義はその正認の理由を求めるものである。

この學説はイギリス及びスカンディナヴィヤ諸國に於て實施された。イギリスに於ては、刑務作業は單に「免刑」制度と關聯して、刑の一部免除を求むる權利を生せしめ得るに過ぎない。刑務作業に於て眼目とされて居るものは、努力、勤勉乃至勞働意思であつて、單なる生産ではない。それ故に、作業に對して報酬は與へられない。そして釋放者は、彼れの退所に際して、多くは、旅費の一種とも見るべき一つの極めて小額なる金員の交付を受けるに過ぎないのである。

これ等の實踐はイギリスに於ては何等の困難をも、また批難をも招いて居ないかに見える。それは多年來適用されて既に習俗の中に同化されて居るのである。しかしながら、フランスに於けるその採用は必ず重大なる異論を惹起することになるであらう。そして良好なる作業成績に従ひて賞遇又は特典に多少の差を附したる被拘禁者の階級別組織は、假令釋放に際して若干の賞與金を附與し、若しくは釋放者が全然無資力なるとき、これを或る適當なる救護施設に收容する制度を伴ふとしても、尙ほ作業収益の全部を國家に收得することを、刑務所及び被拘禁者の眼に正當なるものと映せしめる譯けには行かないであらう。

要するに、この對立せる二つの觀念に於ては、その何れに於ても、一つの強い行刑上の傳統を存する。そして若しも我々が實際的見地に立つとすれば、我がフランスの制度構成に向て、囚徒積立金に關するイギリスの諸規定を全部的に採用することを提案する譯けにも行かなければ、またイギリスのそれに向て、囚徒積立金に關する我がフランスの制度を模範として推薦する譯けにも行かないかに見える。何れにしても、若しもフランスに於て、イギリス主義の利益に於ける一つの進化を生したとするならば、そこには、先づ第一に、被拘禁者の作業収益に對して彼れに賦與せられる割合を低減し、且つ無資力の釋放者に對する救濟所 (*unions d'assistance*) の組織を考案することが必要とされたであらう。

Ⅰ 折衷制度の提案

我々を以てすれば、そこに望ましいものであり、且つ容易に適用され得るものは、一つの折衷制度であるかに考へられる。そしてそれは、イギリス風の觀念中から、自由勞銀に類する一つの報酬を禁止する刑罰思想を採り入れることに存するであらう。報酬積立金の設定は善良なる行狀、満足なる作業、尠くも蓋然的なる一つの改善に對する一個の賞遇たることを要する。フランス風の觀念からは、我々は單に、高率ならざる、しかし同一部類の被拘禁者に取りて充分なる報酬の實踐をのみ採用する。我々は専ら作業収益にのみ基きたる作業報酬と余りに高きに失する報酬率とを拋棄する。我々は、或る受刑者が彼れの收監のお蔭で事實上定期金を設定し得ることを承認するものではないにしても、しかし、多年の拘禁後彼れが釋

放されるに當りて、彼れか數百フランの資金を有ち得ること、且つまた彼れか病人なるか若しくは無資力なるとき、彼れに或る救助か與へられ得ることは有益であると我々は思料する。

國家によりて爲されたる仁惠を趣旨とするこの折衷制度は如何にして實現されるか？この場合被拘禁者に與へられる報酬額の決定を地方刑務所の裁量に一任する譯けには行かないであらう。そこには一つの一般的規則が必要とされる。そしてそれは次きの諸原則に基いたものでなければならぬかに考へられる。

- (a)、善良なる行狀と良好なる作業とに對して或る日割賞與金か同一部類の被拘禁者に附與される。
- (b)、刑期の最初の四分の一の間、被拘禁者は如何なる報酬をも受けない。
- (c)、彼れの刑の殘餘期間中、被拘禁者は、その部類に従ひて、一つの報酬を受ける。部類によりて給與される報酬の率は刑の性質と前科とに基きて定められる。
- (d)、報酬率は累進的とされる。そして特に難澁なる作業に對しては割増を附し得る。
- (e)、報酬は單一なる囚徒積立金 (Prüfungskauf) を形成する。(處分し得る積立金と、處分し得ざる積立金との區別を廢止して)
- (f)、作業を請求する凡ての未決囚若しくは被告人は國家より或日割賞與金を受ける。

この列擧は若干の説明を必要とする。先づ第一に、受刑者に對して單に一つの定量糧食のみか給與されて居る。諸國に於ける、かくのとき法規構成には、給養制度の或る顯著なる改良と酒保の禁止とか當然

考慮されねはならないことを注意する。この給養制度に關しては、我々は風土の相違に従ひて處遇に差別を認める主義を支持する。例へばフランスに於てそれを存するかやうに、或る大國に對して一つの劃一的定量表に従ひて定められたる給養制度は妥當でないかに考へられる。そしてプロヴァンスの被拘禁者に、フランドル若しくはアルサスのそれと同一の糧食を與へるのは、非論理的であるかに見える。

刑期の最初の四分の一の間、作業賞與金を與へないことは、刑事制裁の觀念並びに刑の執行に於て望まじき平等の觀念に對應するものである。我々か既にそれを注意したかやうに、一個の改善不能犯人に、彼れの入監以來、一つの高き報酬を伴ひたる彼れの精通せる作業部類に編入され得る余地を認める譯けには行かない。他方に於て、その刑期の初めの四分の一の間、凡ての被拘禁者は一つの周到なる教習 (Ehrerunterricht) を爲し得るであらう。そして國家は、この期間中、作業收益の全部の收得することによりて、拘禁のために必要とされたる給養費の一部を償ひ得ることになるであらう。

この作業期間を満了に經過したる後、同一部類の凡ての受刑者は一つの同一なる報酬を賦與せらるべくそしてこの報酬は累進的たることを要するであらう。即ちそれは、例へば、原則として、刑期の二分一に達したるとき、百分の五十を増加され、刑期の四分の三以後は二倍に増額され得るであらう。そして刑務所の收入豫算は作業益の年度總收入の四分の一若しくは五分の一をこれ等の報酬に充當し得るであらう

〔註一〕。

〔註二〕、現今フランスの諸刑務所（アルサス・ローレーヌを含みたる）に於ける被拘禁者の作業収益は約七百五十萬フランに達する。

作業所得は單一の囚徒積立金を構成するてあらう。酒保に於ける購買が禁止される結果、被拘禁者は、最早極めて小額の費用（通信費、家族の救助費等）以外には、彼等の積立金を引出す必要を有たないてあらう。これ等の條件の下に在りては、かの處分し得る作業所得分と積立てらるべき作業所得分とに作業報酬を区分することは、最早無用となるてあらう。この單一なる囚徒積立金は、受刑者の拘禁中國庫に拂込まれ、且つ差押の目的とならず、また利息を生み得ないものであらう。

囚徒積立金を、處分し得る積立金と然らざるものとに区分する代りに、そこには、作業報酬に基く積立金と作業報酬以外の資源に基く積立金との別を生ずることになるてあらう。

Ⅱ 作業報酬以外の資源に基く積立金

彼れの拘禁中國家から被拘禁者に賦與せられたる報酬以外の資源によりて形成せられたる囚徒積立金はそれ故に、我々の制度に於て一つの別途積立金を形成することになるてあらう。そしてこの別途積立金は入監當時受刑者の持参したる金員、受刑者の個人所得、第三者より送附せられたる金員、受刑者の享受し得る年金その他によりて構成されることになるてあらう。

作業報酬より成る囚徒積立金に對して我々の提案したるところに反して、これ等の報酬以外の積立金は

これを差押の目的たり得るものと認めらることを、我々は毫も躊躇しないてあらう。個人的資源を有する被拘禁者に對するとき、國家は單に裁判費用たけてはなく、而かもまた若干の國家、殊にドイツに於てそれか現に行はれて居るかやうに、更らに拘禁費用をも等しく辨償せしめ得るてあると、我々は考へる。

この差押へ得べき積立金は國家に拂込まるべきでなく、刑務所の金庫に保管せられ、且つ利息を生し得るてあらう。被拘禁者は自由にこれを處分し得べきであらうか、しかしそこには、受刑者の間に處遇の平等を維持するために、唯一の例外が課せられるてあらう。即ち、被拘禁者は、如何なる場合に於ても、彼れの拘禁中、この積立金の引出によりて彼れの物質的待遇の改善を爲し得ないてあらうことかそれである。

二種の囚徒積立金の間に立てられたるこれ等の區別には、釋放時に於ける積立金の引渡に關して、更らに一つの區別を附することか適當である。被拘禁者の善行と彼れの作業とに對して一つの賞與、一つの仁恵を與へる國家は、刑の執行中に於ても、また釋放後に於ても、固より、この積立金を任意に管理する權利を有するのは當然である。それ故に、國家は、この積立金の直接濫費を防止するために、分割拂の方法に於てこれを釋放者に引渡し得る。この場合、國家は釋放者の以前の身分を知らしめることなしに、彼れに權利書を交付すべき適當なる方法を工夫しなければならぬ。若しも釋放者か或る輔成會の手に引取らるるとすれば、問題は單純化される。何故なれば、この場合、輔成會はその自由の考案に一任されたる處分

に従ひて積立金の交付を爲し得るからである。しかしながら、釋放者は、獨立的動機や家族的事情のために、又は彼れの過去に對する或る羞耻感から、彼れの以前の身分を彼れに回想せしめるかことき一つの助力（輔成會の）を甘受することに同意しない場合かしは生し得る。この場合には、貯金通帳又はそれそれ期日を異にせる爲替證書か、提案すべき唯一の實際的解決であるかに見える。しかしながら、この問題は、何れにしても、單に長期刑、言ひ換へれば、禁錮一年以上にかかる刑に就きてのみ起り得るものである。何故なれば、短期刑にかかる場合、積立金は一般に、釋放に際して必要な旅費、衣類の購買その他によりて一部分消費されて了ふからである。

作業報酬以外の積立金に關しては、被拘禁者は彼れの釋放に當りて、全部且つ自由にその占有を回復しなればならぬ。そしてこの場合、彼れの承諾せざる如何なる義務も彼れに課せられ得へきてないとい我々は考へる。しかし、事實上、作業報酬以外のこれ等の積立金は極めて少數に止まるてあらうことを、附言せねばならぬ。

Ⅲ 未成年者の積立金

作業報酬より成る積立金とこれ等の報酬以外より成る積立金とに囚徒積立金を區分することは、未成年者には事實上適用され得ない。未成年者は單に、一つの行政規程に従ひて賦與せられたる賞與金に基く一つの賞與積立金を受くるに止まるものである。

國立の矯正院並ひに未成年者を收容する民間の感化施設は一つの賞與積立金を拂込む義務を負はざるべきものであらうと我々は考へる。實際、凡ての感化少年は成年期に一つの充分なる積立金を有つことか肝要である。國立施設に收容せられたるものと民間施設に委託せられたるものとを通して、彼等の成年期に於ける感化少年の積立金の僅小なることに、我々はしはしは當惑を感じた。實際の取扱として、感化少年は、彼等の成年前に、適當なる報酬條件の下に、これを私人の許に就職せしめる。この場合、彼等は彼等の成年期に一つの確實なる積立金を有する。しかしながら、この條件の下に置かれなかつた感化少年は大した積立金を有つことなしに成年に達した。彼等には單に僅かの支度金か交付され、そして一つの地位か授けられて居た。若しも彼等か彼等の過失によると然らざるに拘らず、數日の後にその職から解雇されたとすれば、彼等はしはしは再び浮浪と乞丐とに復歸するの外はなかつたのである。この不幸なる地位は釋放されたる少女達に取りて殊に不祥事である。

それ故に、行政的に確定されたる報酬の賦與はこの場合絶對的に必要であるかに考へられる。この點に關して、我々はアルサス・ローレーヌの凡ての感化施設の意見を徴したる後、中央委員會の一決議（一九二二年五月十五日）に基きて、アルサス・ローレーヌに於て制定されたる一規程を指摘する。この規程の定むるところによれば、強制教育に附せられたる各感化少年（pupille）は、彼れの退院後、彼れの成年期に交付せらるべき一つの積立金を構成するために、彼れの年齢、彼れの行狀、彼れの作業成績に比例して

定められたる一つの賞與金を受けることになるのである。そして一つの貯金通帳に拂込まれたるこの賞與金は次きの金額を下ることを得ない。

十四歳より	年額五十四フラン
十五歳より	年額七十二フラン
十六歳より	年額九十フラン
十七歳より	年額百〇八フラン
十八歳より	年額百二十六フラン

それ故に、満十八歳に達したるとき、彼れは尠くとも四五〇フランの確實なる積立金を有つことになる譯けてある。尙ほ、感化少年は一般に十八歳以前に或る私人の許に委託され、そしてこの場合、彼れの所得は遙かに増加されることを（毎月五十フラン乃至一五〇フラン）注意しなければならぬ。感化少年は、彼等の成年後、彼等の貯金通帳をそのまま感化施設の保管に托し、數年後に至りて初めてその引渡を請求することか罕れてない。しかし、この事實は他の諸地方に於ては餘り認められない局部的慣行に止まるものなることは、言ふまでもない。

それ故に、國立感化施設又は民間諸施設に收容せられたる凡ての未成年者は、上記のそれに類する諸條件に於て一つの報酬を賦與せらるべきであるかに考へられる。國家によりて要求され、且つこれ等施設を

監督する資格を有する官吏によりて管理せられたるこれ等の報酬は、手續の極めて簡易なる、而かも利息を生ずる貯蓄金庫の通帳に拂込まるべきものであらう。

我々は我々の提案を次きのこゝく要約し得る。

成年者の積立金に關しては、作業報酬より成るものと、これ等の報酬以外の資源より成るものとの二種の囚徒積立金の構成。

この二種の積立金に於て、國家の權利は同一たるを得ないであらう。

作業報酬より成る積立金は單に被拘禁者の現實的作業収益にのみ基くべきではなく、彼れの行狀、彼れの作業、彼れの素質に基きて定めらるべきである。

刑の初期（最初の四分の一）に於ては、被拘禁者の作業は無報酬たるべきであらう。爾後、同一部類に屬する凡ての被拘禁者は一つの同一報酬を受くべきであり、そしてこの報酬は累進的たるべきものであらう。

釋放に當りて、作業報酬は或る輔成會に、若し被拘禁者が輔成會によりて引受けられるとすれば）若しくは或る貯蓄金庫に（それぞれ確定日附の拂出請求書を附して）托せらるべきであらう。

或る國立施設又は民間諸施設に收容せられたる未成年者の積立金は國家により若しくは國家の干渉によ

りて賦與せられたる賞與金によりて構成せらるべく、そしてそれかためには一定の行政的規程を必要とするてあらう。

年齢、行狀、作業に基きたる一つの積立金は、各感化少年のために彼れの成年期に或る資金を確保する方法に於て賦與せられることか望ましかことをなされるてあらう。

III 報告者 A. Spallanzani,

Substitut du Procureur général près la Cour d'appel, chef de section au Ministère de la Justice, Rome.

(1)、受刑者の積立金 (peunie) か如何に組織せらるべきかを研究するためには、先づ第一に、この制度は或る種の一般的諸規定や受刑者の法律的條件とは反對に、刑務所の處遇制度の埒内に於て形成されるものたることを注意せねばならぬ。

受刑者か單に自由たけてはなく、また更らに彼れの諸般權利の行使と彼れの財産の現實的處分權とを剝奪され、そして各種本質的必要(衣、食等)の満足を、彼等の社會的若しくは經濟的地位の如何に拘らす、凡ての受刑者に對して平等なる方法に於て、嚴密に必要な程度に制限せられることは、刑の執行に於て追求されるその威嚇的及び矯正的目的を達するかために、必要なことである。

しかしながら、法律の嚴正なる維持にも拘らず、受刑者は、最も重き刑にかかる場合であつても、尙ほ常に財産權の主體であり、そして或ひは彼れの財産より生ずる果實として、成ひは相続又は贈與によりて或ひはまた彼れの後見人又は彼れの代理人によりて行はれたる契約によりて彼れに歸屬するところのものを、依然として取得する能力を有する彼れの財産の所有者であることを忘れてはならない。

加之、財差の處分に關しても、また歴史的、人道的及び便宜的諸理由から、被拘禁者の生活を束縛すべき嚴しき諸規則か緩和される結果を來した。

余り遠からぬ時代に於て、富裕なるか若しくは貴族階級に屬する被拘禁者は特別刑務所に拘禁せられ、且つ比較的寛大なる處遇に服せしめられたことを、ここに回想せねばならぬ。この差別的處遇は、平等の原則によりて支配せられたる現行制度の實施後に於ても、尙ほその痕跡を残さない譯けには行かなかつた。況して、同一刑務所に於ても、未決囚に對しては——無罪の推定によりて保護せられたる——彼等の費用に於て衣食及び若干の快適手段の自給を拒絶する譯けには行かない。

最も重き刑に處せられたる受刑者にしても、現行制度の實施後に於てすら、また等しく禁治産者に對比された。然るに、禁治産者に對しては、彼等の財産より生ずる果實の一部に就きて處分權か認められて居るのであるから、上記の刑に處せられたる受刑者にも、またこれに類似せる一つの處遇を拒絶す(譯けには行かない。そしてそれはイタリヤの立法に於て認められて居るものである(民法執行規定第三條))

抽象的に凡ての受刑者に對して處遇の平等を欲する正義感情そのものか、また優越なる諸階級に屬するものに對して、糧食、衣類及び若干の知力的慰安に關して、或る程度に於ける處遇の緩和を許すことになるであらう。加之、若しもこれ等の緩和か行狀の善良なる者に對して留保されるとするならば、まさしく紀律維持の有力なる一手段を構成すへきこれ等の處遇緩和に對して、刑務所の管理者は毫も反對すへき理由を有たなかつたのである。

上記處遇の緩和に對する唯一の反對は、それより派生したる貧富の間に於ける處遇の不等であつた。しかしながら、この不都合は被拘禁者に有益なる作業を課する制度か確立されると共に消滅した。この制度の目指すところは、被拘禁者の肉體的及び道徳的健全と紀律の維持とに有害なる閑散から彼等を脱せしめ彼等をして彼等の釋放後、自治の道を講ずるに堪能ならしめ、且つまた彼等の精勵によりて刑務所處遇の改善に寄與すへき一つの經濟的收穫を擧げることであつた。この制度の適用と共に、それより有益なる効果を招來せむかためには、經濟的見地に於て受刑者の興味を刺戟することか必要とされた。かやうにして彼れの拘禁中或る物質的若しくは知力的享樂を求めむために、その使用を受刑者に許容する方法に於て一つの報酬か彼れに與へられることになつたのである。

かやうにして、或る處遇の緩和を得ることの可能性か凡ての受刑者に共通となり、そして富裕なる受刑者に既に許されて居た處遇の緩和に一つの新たな是認か與へられた譯けてある。

刑務所の作業に對して一つの報酬を賦與することには、更らにまた、被拘禁者自身か、一つの個人的努力によりて、尠くとも彼れの釋放直後の數日間、彼れの活資を準備するに必要な金錢を貯蓄せしめることを目的としたものであることを附言せねばならぬ。そしてそれは人道的要求を満足せしめると同時にまた彼れをして再び犯罪に陥らしめるの危険を妨止する所以であつたのである。

かくのごとくして受刑者に歸屬する金員を占有する刑務所の管理者はこれ等の金員を管理し且つ受刑者にその金員の或る限定的處分を許すへき任務を負はされた。

上記財産の全體に、囚徒積立金 (Prison Fund) の名稱か與へられた。蓋しそれは法律的地見地に於て、ローマ法に於ける家子の財産と或る類似點を有つて居るからである。

囚徒積立金の制度か如何に構成せらるへきかを研究するかためには、受刑者、刑務所及び第三者に對してそれより派生する法律的諸關係を決定することか必要である。

この點に於ては、先づ、被拘禁者か入監の當時自から持参したるか若しくは第三者より彼れに交付せられたるもの (特別積立金) と刑務所に於て爲されたる作業に對する報酬として彼れに歸屬するもの (作業積立金) とか分別的に検討されねばならぬ。

(I)、特別積立金 (Fonds Particulier) は二つの淵源から形成される。

第一の淵源は動産物件と被拘禁者か入監の當時持参したる金錢とより構成される。刑務所は、被拘禁者

の計算のために、上記財産を管理し、損傷せざる物件はこれを刑務所倉庫に保管し、損傷すべき物件はこれを賣却し又は破壊し、かくのとき未必的賣却によりて得たる代金及びその他の現金を被拘禁者の勘定に記入することを要する。

これ等の物件、これ等の金銭に對して被拘禁者か一つの所有権を有すべきは疑ひない。しかしながら、刑務所かその管理に任ずる目的と、現金の使用に就きて定められたる制限とから考へて、これ等の金員は法律的には所謂「扶養料」の性質を取るものと認めねばならぬ。大多数の場合に於て、この養料の性質は金員の小額なることにより明白である。しかし、假りにこの金員が多額に達するようなことかあつても、刑務所は尙ほそれか拘禁中及び釋放後の被拘禁者のために一つの養料を構成すべく役立ち得るかたみにのみ、その管理に任ずるものである。

拘禁中被拘禁者の所有に歸する金銭に對してもまた同一の性質か認められねばならぬ。被拘禁者の親族又は彼の財産管理人は彼れの拘禁生活の或る緩和に資せむかために、彼れに金銭を送付する。刑務所は如上の目的のためのみこれを管理する。被拘禁者はその所有権を取得する。しかしながら彼れは單に規則上許されたる給養の制限内に於てのみそれを使用し得るに止まる。それ故に、この金員の用途は主として給養に存するものである。そしてこの點はイタリヤ法に於て（民法執行規定第三條）明瞭に承認されて居る。即ちそれによれば、法律上の禁治産者たる（彼れに科せられたる刑を理由として）受刑者には、『單

に扶養料の名義に於ける小額の補助金か支給され得るに止まる』のである。

(四)、爲されたる作業に對して受刑者に與へられたる報酬によりて形成されたる積立金の部分の法律上の性質は、上記部分のそれほかに爾かく明確ではない。何れの刑務所に在りても、この報酬は、果してそれが現實的に受刑者の所有に歸するものであるか、或ひはこれに對して受刑者は單に一つの使用权を獲得するに止まつて、未消費の部分の所有権は刑務所に屬するものであるかを確認することの容易ならざる刑務所規則の下に置かれ居るのである。

しかしながら、一部論者の主張するところによれば、受刑者は單に報酬の所有権を取得するはかりでなく、また彼れはその爲したる作業に相當する賃銀を請求する一つの権利を有するものとされる〔註一〕。

〔註一〕 Voir : Congrès pénitentiaire international de Paris de 1895 (deuxième section, *Une question*). — Bousseau, *Le péculé des Condamnés* (Paris, 1899). — Conti, *La pena e il sistema penale nel Codice Penale Italiano* (Milano, 1904, p. 104). — Manzini, *Trattato di diritto penale italiano* (Ha ediz., vol. 3, p. 55). — Vidal, *cours de droit criminel*, p. 672). — Voir aussi le Rapport sur le péculé des détenus en France et à l'étranger, par M. Du Bois, à la société générale des prisons (*Revue Pénitentiaire*, 1892, p. 293; 1893, p. 12 et suiv.).

報酬積立金の組織はこの賃銀請求權か認められるか否かによりて相違するであらうことは明白である。

れ故に、ここには先づこの問題の解決を求めることか必要である。そしてこの解決は刑務所作業に基きて受刑者と刑務所との間に關する關係の法律上の性質を決定することによりてのみ爲され得るのである。

受刑者のために賃銀請求權を認める論者は、凡ての勞働は賃銀請求權を發生せしめるといふ原則から出發する。しかしながら、我々はこの見解に左袒する譯けには行かない。何故なれば、如上の原則は、我々の觀るところによれば、單に自由契約の領域に於てのみ適用され得るに止まるものだからである。この場合に於てのみ、賃銀は一つの必然性たり得る、何故なれば、これを拒否するに於ては、我々は何人をも勞働に強制する譯けには行かないであらうからである。従つてこの必然性から、勢ひ勞働を供給せむとする者に對して、勞働を受諾する者に一つの賃銀を提供する義務が發生するのである。

これに反して、刑務所作業に向ては、毫も自由契約を存せない、何故なれば作業は申込まれたのではなしに、課せられ、若しくは許可されたもの、即ち、重き刑を言渡されたる受刑者に在りては、法律の規定により若しくは判決によりて課せられたるものであり、その他の場合に於ては單に許されたものに過ぎないからである。

一つの重き刑を言渡されたる受刑者は作業を免かるべき自由を有つて居ない。若しも彼れが法律上及び判決上の命令に服従しないならば、彼れは懲罰に處せられるであらう。従つて彼れはこの強制作業のために報酬を受ける權利を絶対に主張する譯けには行かない。

他の受刑者は作業せざるべき自由を有する。しかしながら、彼れ等が作業に就くとするれば、それは自由勞働者の正則的動機、即ち活資を得むとする必要のためではない。彼等の衣食は刑務所によりて保障されて居る。若しも彼等が作業の申込を承諾するとすればそれは彼等の處遇に或る緩和を得むかためでありまた刑務所によりて慈惠的に與へられ且つ自由に決定されたる報酬を利得せむかためなのである。加之、自由契約の領域に於ては、一つの經濟的利益を得むかために勞働が提供されるものであることを考へねはならぬ。これに反して、刑務所が作業を課し又は許すことによりて追求する目的は、就中、他に存せねはならない。重き刑を言渡されたる受刑者に作業を強制することによりて、刑務所は、先づ刑の全體的部分を成す苦痛に彼れを服せしめ、次いで、一つの道徳的紀律に彼れを慣熟せしめ、閑散から彼れを免かれしめ、釋放後彼れ自らの活計の道を準備せしめるかために或る稼業を彼れに修得せしめることを目的とする。他の受刑者に作業を許可する場合に於ても、刑務所はまた等しく同一の道徳的及び教育的目的を追求するのである。

これ等の凡ては、刑務所が受刑者の作業によりて一つの經濟的利益の獲得を求めることを妨げるものではない。しかしながら、この利益は刑務所に於ける作業組織の直接的目的たる譯けには行かない。若しもこの利益を實現するかために、刑務所作業を組織したる諸目的の達成を不可能ならしめるに於ては、この利益は固より拋棄されねはならない。従つて刑務所は、單に熟練勞働者たけてはなしに、また嘗て勞働し

たことなきものにも等しく遂行され得る作業を選択せねはならない。これ即ち刑務所作業の組織と、自由労働の組織との間に、一つの深甚なる差別を可能ならしめる點である。加之、刑務所作業には自由労働に於けるかような収益を伴ひ得ない結果を生ずる。何故なれば、そこには收支の償はざる不熟練者の最小生産や、教習者の爲す材料、器具その他の濫用、濫費より生ずる損失が見込まれねはならないからである。

それ故に、受刑者の作業は、その性質及びその目的上、これを自由労働と同一に考へることを許さないと同時に、また受刑者に賃銀請求権を認める譯けに行かない諸性質を有つて居るのである。

しかしそれにも拘らず、受刑者を遷善し、彼等か敢て彼等の人格を喪失したものでないことの信念を彼等に與へるかために、そこには、また受刑者に賃銀請求権を認めることの必要か主張され得るのである。蓋しそれは、一つの善良なる行狀を持續しつつ、品位を有つて彼等の刑に服すべく彼等を誘導する所以たらねはならないであらうからである。

しかし、我々に於ては、これ等の論據か承認され得るものとは信せられない。何故なれば、これ等の主張は、受刑者をして、彼等か社會に對してまた彼等自身に對して有責なるものであり、従つて、彼等は彼等の過失に就きて刑罰を負擔する義務あるものであり、且つ善良なる市民、即ち彼等自身の本能と闘ひ、諸々の困難を克服して、敢て他人に損害を與へることなしに、彼等の必要を充足するの術を辨へて居る人々よりも劣等なるものたることを自認せねはならないものであることを忘却せしめる結果を招來するであらうからである。

また或る論者は、尠くとも作業を強制せられたる受刑者に對しては賃銀請求権か認められねはならないと主張した。何故なれば、彼等は彼等に強課されたる義務に對しては一つの賠償請求権を有つてあらうからである。若しも法律か専ら社會若しくは刑務所の有益なる役務を遂行するためにのみ作業を課したものであるならば、この意見は承認され得るであらう。そしてそれは兵役、或る種の公共役務その他の場合に考へられ得ることである。しかしながら、受刑者は決して上記の目的のために作業すへきものではなく彼等は苦痛に服し、そしてこの苦痛を通して、自から純化され、且つ自由生活を爲すへき能力と價值とを再び回復せねはならないものであつて見れば、社會か彼等の作業によりて受ける利益は單に一つの間接的のものたるにすぎないであらう。

しかも、他方に於て、假りに上記の諸見解（一個の頽廢的人道感情によりてか、若しくは最も低劣なる煽動政治家的本能に呵らむとする希望によりて刺衝せられたる）か賃銀請求権を承認する一つの法律を制定せしむるに至つたと想定したならば、この場合、果して如何なる結果を生じたであらうか？刑務所作業は凡てこれを刑の教化的及び訓練的諸目的に服せしめねはならないものであるにも拘らず、この場合、作業に關する事柄は凡て刑務所生活に於て、最重要の地位を占めることになるであらう。作業の種類、作業

の時間、賃銀の率、賃銀の使用等は、必然的に、受刑者の自由なる論議の対象とされるであらう。そしてこれ等の凡てが刑務所の内部紀律に取りて如何なる結果を生ずるであらうかは、蓋し想像するに難くない。一つの権利を承認することは、實際に於て、その権利を實行する権能を承認することを意味する。それ故に、この場合そこには論理的に同盟罷業権が承認されざるを得ない事になるであらう〔註二〕。そして受刑者は、かくしてまた刑務所管理者をして裁判所に出頭せしめ得ることになるであらう！

〔註二〕、受刑者の同盟罷業は懲罰によりて嚴しく處罰されねばならないものであり、また現に處罰されて居るのである。そしてそれはまた同時に司法行政に對する犯罪中に包攝され得ることになるであらう（懲役受刑者に關して）、何故なれば、それは抗拒、逃走等の罪を構成することになるからである。

刑務所作業に自由労働の性質を與へることか否認されるとすれば、そこには、また法律が労働傷害に關して公布したる慈惠的諸規定の適用も等しく否認されるの必要な疑ひを生し得るであらう。しかしながら、この疑は理由なきかに見える、何故なれば、受刑者に對するこの法律の適用は専らこの法律自體か依て基くところの諸原則に關係するものだからである（この法律は固より明示的に刑務所作業に就きて何等規定するところはないか）。かくてイタリヤに於ては、一九一五年まで、労働傷害に關する法律は、依然として被拘禁者には適用されなかつた〔註三〕、何故なれば、この法律は労働者と企業者との間の自由

なる契約關係の推定から出發したものと信せられて居たからである。しかしながら、大審院の一判例（一九一五年五月十一日）の結果、この法律は社會豫防（*prevention sociale*）の諸理由に基いたものであり、そしてこの點に於て、この法律はまた受刑者にも適用されねばならないものであることか認められるに至つた。刑務所内の工業作業に關して、刑務所は直ちにこの解釋を採用することになつた。その後公布せられたる一九二一年五月二十日の法律第二百九十六號は既に實際上適用されて居た慣行を承認したものである。

〔註三〕、一八九八年五月十七日の法律第八十號。一九〇四年一月三十一日の法律第五十一號によりて修正。

(IV)、それ故に、受刑者は毫も勞銀請求權を有するものではない。作業より派生する受刑者と刑務所との諸關係は毫も法律的性質を有するものではない。これ等の關係は單に行政的性質のものたり得るにすぎない。刑務所は作業に従事する受刑者に一つの報酬を與へねばならない。しかしながら、それは決して一つの債務の結果なのではなく、單にこの手段によりて行刑目的の達成に便宜を得むとする趣旨に出でたる全然自發的性質のものである。刑務所が處遇を緩和し、拘禁中に於ける或る快適手段と彼れの釋放當座の衣食との自給を可能ならしめるかために、少許の金錢を受刑者の使用に供せむとするとき、問題は刑務所の利益に關するものであつて、敢て一個の義務に關するものではない。蓋しこれによりて、刑務所生活の苦し

さか緩和され、作業かより愉快に、且つより有益に運はれることになり、紀律の勵行かより容易となるであらう。しかしながら、被拘禁者は何等勞働權を有するものではないとすれば、彼れは固よりかくのとき報酬を求め一つの權利を有するものでもなければ、また有すべきものでもない。彼れはた法律によりて保護されたる一個の單純なる利益を有するに止まる。若しも彼れか善行を持續しないならば彼れは作業から除斥されねはならない。従つてまた彼れは報酬を享ける譯けには行かないであらう。彼れは作業とそれの報酬とに關して、中間刑務所への移送若しくは條件附釋放に關する場合と同一の條件の下に置かれて居るのである。

従つて、若しも受刑者か報酬に關して刑務所に異議を申立んとするとき、彼れは刑務所を相手取つて裁判所に出訴する譯けには行かない。彼れは單に行政的方法によりてこれを主張し得るに止まるであらう。それ故に、受刑者の作業に對する報酬は單に刑務所の側から爲される一つの贈與にすぎない（イタリヤ刑務所細則の採用したる名稱は「賞與金」）。この贈與の目的と、極めて制限せられたるその額とを考へるとき、この贈與にはまた扶養料の性質か認められねはならない。

若しこの考案か許されるとするならば、報酬の所有權は刑務所に屬することなく、賦與と同時に受刑者に移轉するものたることは、蓋し疑ひない。

若しも受刑者か或る勞銀請求權を有つて居たとすれば、そこに與へらるべき結論と同一なるこの結論は

その直接的使用か許されて居る拘禁中の給與の補充に指定せられたる部分に就きて、毫末も疑ひの餘地を存せないかに見える。しかしながら、釋放後に使用せらるべき部分に就きては、所有權移轉の時期に關して、若干の疑ひを生し得る。この點に就きては、法律規定の援用か必要とされる。従つて、この點に就き、フランス立法に於ては、刑法第四十一條か援用されねはならない。同條によれば、各被拘禁者の作業収益は、一部分、刑務所の共通經費に、一部分、受刑者の給與の補足に、一部分、受刑者のためにする彼の釋放時に於ける準備金の形成に充當されるのである。それ故に、この法律の規定に準據すれば、受刑者は單に彼の釋放の時期に於てのみ準備金の所有者となるものと認められねはならぬ。即ち彼れは刑務所の側から一つの條件附贈與を受けたこととなるであらう。何故なれば、釋放の時期まで、この準備金の所有權は刑務所に屬して居るからである。従つて、論理上、若しも被拘禁者か彼の釋放以前に死亡するならば彼の個人的使用のために被拘禁者に與へられたる報酬の殘額か彼の相続人に移轉するのに反して、この準備金の所有權は彼の相続人に移轉しないこととなるのである。

しかしながら、フランス刑法第四十一條のそれに類する或る規定を存せない法制にありては、刑務所か被拘禁者のために賦與し若しくは保管する凡ての金員は直接被拘禁者の所有に移るものと認めねはならない。イタリヤの法制に従へば、この見解か採用されねはならない。何故なれば、刑務所細則か、一部分は被拘禁者の拘禁中に、そして一部分は彼の釋放後に、被拘禁者のために使用せらるべき被拘禁者に與へ

られたる單一なる賞與金に就きて規定して居るのに對して、刑法中には、別に件の準備金に對する如何なる特別規定をも存せないからである。それ故に、被拘禁者と刑務所との間には、この賞與金が被拘禁者に賦與せられたる瞬間から、爲されたる作業に對する賞與金に關して單一なる關係が發生せねばならぬ。この瞬間から被拘禁者は凡ての賞與金の所有權を取得する。拘禁中の使用に充當されたる部分に就き、直接にその使用を爲さざる事實が別に所有權の移轉を妨げるものではないかのように、一部分が釋放後ならては使用され得ないといふ事實は、また等しく所有權の移轉を妨げるものではない。

それ故に、一九二二年に至るまでイタリヤに施行せられたる規定——それに従へば、受刑者の死亡せる場合、作業賞與金の残額は受刑者の相續人に移轉せざるものとされた——は理由なきものであつた。フランスの現行制度に従へば、單に釋放準備金に就きてのみ許さるべきこの規定は、イタリヤの刑務所が賞與金として作業に従事する受刑者に賦與したる金員の拘禁中處分し得る部分に關しても、また釋放時に留保されたる部分に關しても、是認すべからざるものであつた。かくて、この不合理なる規定は一九二二年二月十九日の勅令第三百九十三號によりて廢止された。即ちこの勅令は、作業積立金と個人資金との間の凡ての區別を撤廢して、作業賞與金もまた、それが賦與される度毎に凡て完全に受刑者の所有となることを認めたとである。

(V)、上來、我々の説明したるところによりて明らかなるかのように、種々の淵源によりて形成され、且つ

表見上異りたる諸關係を生せしめ得る受刑者の積立金は受刑者の所有であるか若しくは所有となるものあり、そして受刑者自身に對する關係に於て、常に養料の性質を取るものである。

従つて、法律が明示的に反對の規定を爲さないかぎり、囚徒積立金には、行政的見地に於て單一の組織を與へることか適當であると我々は信ずる。この制度は、積立金の源泉（個人積立金、作業積立金）又は目的（處分し得る積立金、釋放準備金）に従ひて會計を分別することから生ずる錯綜を避け得るであらう。

加之、積立金の單一化は、被拘禁者に、彼等の積立金を束縛なしに所有するといふ印象を與へ、積立金そのものの額に就きて凡ての疑ひを除き、且つ會計事務を最小限度に簡便ならしめるであらう。

(VI)、囚徒積立金はその源泉とそれの性質とから考へて、或る處遇緩和を求める以外の目的のために、拘禁中、受刑者の任意使用を許すべきではない。

この目的を達するための主要なる方法は、刑務所によりて支給されたる糧食以外の或る食料品の自給を受刑者に許可することである。蓋しそれは單に受刑者に一つの肉體的享樂を與へるだけに止まらないで、また彼れの勢力を増進し、且つ彼れの作業能力をより増大せしめる所以なのである。尙ほその他の方法としては、衣類、圖書、用紙、郵便切手等の自給が許さるべきであらう。

疑ひと争ひとを避けるかために、受刑者が日常購買し得る物品の代價、品質及び數量は規則を以て一定

することか、絶對的に必要である。

かようにして、積立金の使用に對して課せられたる諸條件を決定し、且つこれを被拘禁者に知らしめることか必要とされる。そしてこれ等の條件は次きのこときものたることを要するであらう。

(a)、受刑者は有報酬又は無報酬（教習生に對してそれを見るかことき）にて作業に従事する者なること。若しくは受刑者か作業に就事して居ないにしても、その無爲は彼れの意味に出づるものではないに、他の原因（疾病、刑務所に於ける作業の欠乏若しくは中止その他）に基くものたること。かようにして、富裕なる受刑者に一つの特權的狀態か與へられないことになるであらう。

(b)、受刑者か彼れに對する懲罰の執行中に屬せないこと、何故なれば不良なる行狀は積立金の使用を停止せしめねはならないからである。

(c)、受刑者か刑務所に對して與へたる損害を賠償したること（然らざれば、刑務所の物品の濫費か莫大となるであらう。）

(d)、積立金の額か、疾病の場合及びひ釋放期のために留保すべき金額以上であること。

この點に於て、我々は、受刑者か拘禁中に處分し得べき部分と、準備金として留保すべき部分と一日當りの使用額との割合か規則によりて確定されねはならないものとは信せない。何故なれば、そこには所によりて相違する極めて多數の要素か斟酌されねはならないからである（刑期、受刑者の階級、報酬、受刑

者の購買し得る物品の代價、その他）。この點は、積立金か彼れの管内受刑者によりて如何に使用され得るかを容易に定め得べき各刑務所長の慎重なる決定に一任することを寧ろ合目的とするであらう。

上記の使用と並んで、若しくはこれ等の使用の代りに、受刑者には、彼れの家族、被害者及びひ國家に對する彼れの義務を果すために、彼れの處分し得る積立金を使用することか許され得る。蓋しそこには、改悛せる受刑者か、假令彼れに許されたる若干の快適手段の自給を斷念しても、尙ほ履行すべく希望せねはならない法律的及び道德的義務を存するのである。

しかしながら、それは許さるべきものであつて、決して強要さるべきものではない。

假令それか正義感の要求し得るところであるにしても、苟くも彼れの意思に反して彼れの積立金の使用か受刑者に強制されることになれば、それは明かに受刑者の所有權の侵害を意味するものであり、積立金の養料たる性質を否認するものであり、そして恐らくは囚徒積立金か構成せられたる諸目的の達成を妨ぐるの結果を伴ひたるこの制度の性質の變改を意味することになるであらう。

就中、假りに積立金か専ら作業報酬によりて構成されて居るとして、この場合、受刑者に例へば損害賠償の支拂を強制することになれば、それは結局彼れに與へたるものの取戻を意味することになり、従つてその結果、受刑者は最早作業をしないことになるであらう。そして囚徒積立金か受刑者若しくは仕送人の欲したるより以外の目的に使用されることになれば、囚徒積立金の他の源泉もまた勢ひ消滅することにな

るてあらう。

一方に於て、報酬か給養目的を有する贈與の性質を失ひ、他方に於て、家族への補助金、損害賠償等の支拂か刑務所の負擔に歸すべき方法に於て、作業報酬を増加することによりてのみ、上記の諸義務は受刑者の大部分に對して強課され得るものであらう。加之、この場合、そこには、これ等の義務その他が存在するか否かに從ひて、異りたる各種組織を必要とすることになるてあらう。

これ等の理由から、我々は、かのフェリ教授を委員長とする刑法改正委員會の起草にかかる タリヤ刑法草案に於て勞銀とそれの使用とに對して提案せられたる制度を是認する譯けには行かない。この草案に於ては、受刑者に勞銀請求權か認められて居ないにも拘らず、自由労働者のそれに等しき一つの勞銀を受刑者に與へる義務か刑務所に課せられて居るのである。即ち草案の規定に從へば、この勞銀の中、三分一は國庫に、次きの三分の一は被害者に、そして残りの三分の一は、受刑者自身の使用のために、準備金のために、また彼れの家族のために——若しもその家族か窮乏の状態に在るとすれば——受刑者自身に歸屬することになるのである。

受刑者は自由労働者として生産し得るものであり、そして彼れの作業の凡ての収益を彼れに與へることによりて、彼れは彼れの勞銀のみを以て上記の凡ての支拂を準備し得るものであるといふ推定から、これ等の提案は出發して居るのである。

この制度の現實的結果は、第一、損害の賠償及び家族に對する補助か刑務所の負擔に歸することであり第二には、囚徒積立金の制度か現今認められて居るその性質を失ふことであり、そして第三には、就中、積立金の零細なることのために、大部分の受刑者か、拘禁中或る快適手段の自給に充當されたる部分を最小限度に殺滅されたと感ずることであらう（何故なれば、この部分は今日報酬全額の三分の二に達しても居るにも拘らず尙ほ不充分と見えるのに反して、新制度の下には勞銀の三分の一以外に減額されることになるてあらうからである）。そしてこれ等の事情は凡て受刑者を作業の嫌忌に導くことになるてあらう。

囚徒積立金の眞の目的の達成を妨けるてあらうところのこれ等の理由のために、損害賠償、家族に對する補助金等の支拂は積立金を準備されたる受刑者に許され得るものであつて、決して強要され得るものではないとする意見を、我々は依然固守せんとするものである。

(VII) しかしながら、そこには、現在に於ても、或ひは將來に於ても、或る受刑者の積立金か、その充當されたる直接の目的に向て多大に過ぎるかとき事實を生し得る。そしてこの事情は、外部からの資金の送付又は許されたる消費額以上の作業報酬の累積によりて生し得るのである。

自由労働者に取りてしはしは不可能なるこの金錢の蓄積は、受刑者に向つて許容さるべきでない、何故なれば、被害者又は家族自身は、同時に彼等の糊口の資に窮し得るてあらうからである。

我々が既にそれを説いたかように、受刑者に彼れの金銭の使用を義務として強要するのは、明らかに反法律的たることを失はないであらう。しかし、それにも拘らず、我々は積立金の過剰分に對して養料の性質を附する譯けには行かない。

ここに於て、受刑者に對して權利を有する第三者（損害賠償に就きての被害者、訴訟費用及び金銭刑に就きての國家、扶養料に就きての家族）はこの過剰分が彼等に歸せらるべきことを要求し得るであらう。道徳的要求と併せて實證學派によりて提唱せられたる主義とを満足せしめるこの解決は、囚徒積立金の制度を生せしめたる精神と法の諸原則とに合致する。

囚徒積立金の利用から第三者を除外することか、實際上、この資金の差押に障礙を成すものであることは疑ひない。しかしながら、この事實は、彼れの債務の支拂義務を受刑者に強課する制度を是認せしめる理由とはならないであらう。刑務所に依頼して、受刑者の積立金か彼れに許されたる支出額を超過するか否かを確かめたる上にて、彼等自身の權利を實行するのは、第三者の權限に屬することである。若しも刑務所規則か囚徒積立金の過剰分に對する差押を明示的に承認したならば、この點は極めて容易となるであらう。そしてこの問題をより克く解決するかためには、各種類の受刑者に對して差押へ得ざる囚徒積立金の最小限度を確定することか必要とされるであらう〔註四〕。

〔註四〕、囚徒積立金か差押の目的となり得るか否かは極めて異論ある問題である。一八九五年のバリ

一 國際行刑會議（第一部第四議題）及び一九〇〇年のブルユツセル國際行刑會議（第一部第一議題）の討議並ひに一八九一年のローマ刑事人類學會議（Compte-rendu du Congrès d'anthropologie Criminelle de Rome, notes p. 34, 363, 419 et suiv）及び一八九二年のブルユツセル同會議報告（actes du même Congrès, p. 70）を參照。——フランスに於ては、同國の法律により、釋放準備金かその性質上差押へ得へからざるものでないことに疑ひはない。拘禁中受刑者の處分し得る積立金に對しても、判例は、一八八〇年十月二十二日の命令に基きて、差押を認めて居る。蓋しこの勅令によれば、釋放の時期に處分し得る積立金は罰金の支拂のために使用されねはならないのである。——反對説 Vid., Cours de droit criminel, p. 673. Vautier, Rapport à la Société générale des Prisons, Revue Penitentiaire 1894, 583.

(VIII) この同一の諸原則はまた受刑者の釋放若しくは死亡の時期に等しく適用されねはならないであらう。若しも上記の時期に、囚徒積立金か單に釋放當座の衣食に必要な金額によりて構成されて居るならば、この積立金は分割拂の方法によりて受刑者に引渡されることを適當とするであらう。

これに反して、若しも釋放の時期に積立金か上記目的に必要な以上の數額に達して居るならば、この過剰分に就きては、第三者に（刑務所をも含む）彼等の權利の實行を許可せねはならぬ。これと異りたる取扱は、受刑者又は彼れの相続人を、他の市民のそれよりもより有利なる状態に置くことになるであらう。

最後に、受刑者が死亡せる場合には、凡ての積立金に對して、第三者に彼等の権利の實行が許されねばならないであらう。何故なれば、この場合、積立金の養料たる性質は凡て消滅して、積立金は全部相続人の所有に移ることになるからである。

かようにして、養料の性質を有する積立金の部分は受刑者に留保され、彼れ及び彼の相続人の権利が尊重され（若しも受刑者が債務を有せないか、若しくは債権者が債務の支拂を請求せないならば）、そして第三者にもまた彼等の債権を實行する餘地が與へられることとなるのである。即ちかくして、何人にも或る特權が與へられることなしに、各権利が尊重され得る譯けてある。

IV

報告者

Ernest Legend,

Directeur de la Prison de Forest Bruxelles

本問を取扱ふことの名譽を私に與へることによりて、國際行刑會議委員會が私に求めるところのものかベルギーに於ける囚徒積立金の制度に關する現状の説明と、この積立金に關して一實際家の立場から爲さるべき希望乃至提案とに存することは疑ひない。

白耳義の現行制度の下に於ける作業報酬は、極めて少額である。假りに極めて少數の被拘禁者か、痛ましき努力の結果、窮乏の状態に在る彼等の配偶者、尊族親若しくは卑族親に或る僅少なる養料の補給を爲すまでに至つたとしても、それは一般的には殆ど不可能なことである。

この状態は如何にして匡救さるべきか？

若しも我々が被拘禁者に相當の作業報酬を與へ、且つ彼等に課せられる作業を彼等の社會的回復と再生との一手段たらしめようと欲するならば、刑務所が合理的にその工場を組織し、工場に於ける機械 器具の設備を充實し 且つこれ等の工場を、自由工業に於て現に行はれつつあるものに漸時接近せしめて、その能率の減退を避け得るかごとき一つの制度を確立することか、必然的に要求されるのである。

一見極めて單純なるこの種計畫の實現か如何なる理由のためにベルギーに於て遅延したのであるか？

刑務所作業によりて惹起されたる競争に對して、多年の間、不當に或ひは正當に、自由勞働者たちによりて向けられたる愁訴と、被拘禁者の絶對的隔離に基きたる一つの行刑制度、即ちそれ自體には卓越なるものではあるか、しかしながらその日々の適用に於て餘りに苛酷にすぎる行刑制度と、久しき間、行刑當局者の善良なる意思を麻痺せしめたことを我々は否定する譯けに行かない。そして、この點に於ける凡ての先入感から解放され、且つ戦後の必要によりて創り出されたる有利なる状態を利用することによりて、行刑當局者が斷然必要なる改革の途に乗り出したのは、漸く休戦後のことである。

二つの本質的改革かその活動を特質附ける。

第一は、被拘禁者に共同作業が許される工場の創設である。

第二は、その活動が凡ての刑務施設に擴充される一つの中央作業課 (*à vis central du travail*) の制度である。蓋しこの制度はこれ等凡ての刑務施設の努力を調整し、注文先を求め且つその注文を集中し、そしてこれ等の注文を各種公行政に制限することによりて、刑務作業の競争に關して労働大衆の抱懐する偏見を捨てしめることになるのである。

それ故に、當今、ベルギーは一個の改革案を熱心に追求して居るものであり、そしてこの改革案は、尙ほ未だ、それから期待され得る凡ての收穫を産み出すまでには至らないか、しかし近き將來に於て、我が國際行刑會議、殊に一八九五年のバリー會議と一九〇〇年のブルユツセル會議とに於て、重罪及び輕罪の被害者に與へたる損害の賠償に就き、爾かく反覆的に聲明される希望の實現を或る程度に於て確保し得べき資源を囚徒積立金に與へることになるであらうことを、我々は明言し得るのである。

囚徒積立金は入監當時受刑者より寄托され若しくは拘禁中第三者より彼れの收受したる資金と作業によりて彼れの取得したる資金、即ち一般に作業收得金と呼ばれる資金とから構成され得る。

ベルギーの法律に従へば、入監當時寄托され、若しくは拘禁中外部より收受したる金員は差押の目的と

なり、且つ配偶者又は未成年の子女の側より扶養料として、或ひは輕罪又は重罪の被害者のために與へられたる判決に基きたる損害賠償の名義に於て引渡を請求され得るのである。それ故に、これ等の積立金は作業收得金から嚴密に分別されねばならない。蓋し作業收得金は全部差押の目的とはならないのであるからこの兩者は如何なる場合に於ても混同され得ないものである。

彼等の作業に基きて受刑者の取得する賞與金は二つの部分に折半される。即ちその一つは留保分 (*fonds de réserve*) であり、他は處分可能分 (*quotité disponible*) 若しくは『洒保資金』 (*fonds de cantine*) である [註一]。

[註一]、刑法第十五條及び第二十七條。

刑務委員會又は必要な場合に於ては刑務所長自身は、直系親のために被拘禁者の積立金に對して、詳言すれば、重罪囚の場合に在りては處分可能分に對して、輕罪囚の場合に在りては留保分に對して、その各積立金の半額を超へざる限度に於て、若干の前拂を許可し得る。

傍系親のためにする前拂の請求は中央行政廳 (行刑局) によりて裁決される。

被拘禁者はまたその釋放の時期に、衣類、職業用器具等彼れに必要な物件を得るために、彼れの作業收受金の残額を處分することを許され得る。彼れはまた、その支拂が彼れの直接釋放を招來すべき罰金及び裁判費用を納付するために、等しくこの能力を使用し得る。

一般的原則として、被拘禁者は、彼れの積立金か釋放當座の必要に相當する一つの金額以上に達して居ないときは、彼れの釋放に際して、その積立金全部の引渡を受ける。

寄托されたる金員は釋放者の要求に應じて全部引渡されることを要する。

若し積立金か或る重要な額に及ぶときは、刑務所長の裁量に一任せられたる全額引渡の原因となるべき事情を存せないかきり、積立金は、それが一回又は數回に彼れに引渡さるべきために、場合に應じて、彼れの名義に於ける郵便貯金に換位され、若しくは釋放者か指定する居所地の市町村長に送附される。

釋放者の承諾を得て、刑務所長は、また彼れの積立金の全部又は一部を輔成委員會に引渡すことを得る。以上は、正確に、囚徒積立金に關するベルギー制度の實際である。

有罪判決によりて作業を強制せられたる被拘禁者は如何なる勞銀請求權をも有するものではないと宣言したるパリ―國際行刑會議（一八九五年）は、それにも拘らず、尙ほ賞與金の名義に於て、彼れの作業生産に對して一つの報酬を彼れに賦與することを必然缺くべからざるものと認められたのである。

この報酬が彼れに與へられる場合、そこには當然その使用方法を確定することか適當とされる。

I 第一に、受刑者は刑務所に於ける彼れの給養費に就き國家に賠償することを要する。

ブルユツセル國際行刑會議に於て（一九〇〇年）報告者の一人としてかの著名なる故ブリュッセル教授は、囚徒積立金（作業報酬）に對する國家の所有權を簡單に論證した。

犯罪の被害者に對する賠償に充當せられ得る積立金の額を定める問題の論議に當りて、彼れは、國家に歸屬する作業報酬の部分を計算から除外すべきものと論じた。何故なれば、若しもそれが被拘禁者に要求されないとするは、それは必然的に、租税によりて凡ての納稅義務者に要求されねばならないからである〔註一〕。

〔註一〕 Cét. Actes du Congrès pénitentiaire de 1900; Première section, première question, fraveaux pré-paratou es.

この原則に就きては、何人も異論を挟むものはない、しかしながら、各種の利益にそれぞれその利益に歸屬する部分を與へようと欲するならば、國家の要求は單に糧食費の支拂に制限されねばならない。そして我々の所見によれば、若しも國家かこの費用以外に被拘禁者の拘置より生ずる爾餘多數の費用をも要求したならば、それは寧ろ權利の濫用と見られることになるであらう。

刑法第十五條に従ひて被拘禁者に賦與せられる金額、即ち被拘禁者か輕罪囚なるか、「懲役囚」又は「徒刑囚」なるかに従ひて、作業收益の十分の五、十分の四又は十分の三の作業報酬は、積立金に留保すべき第一の目的を確保するに充分であるかに見える。

糧食費は一九二三年度に於て一日一人當り平均一、七〇フランを値した。

然るに、今日被拘禁者の受ける一日當り勞銀は約四フランに達し得ることか確認される。

ベルギーの刑務所は、實際、被拘禁者か熟練労働者たるか、不熟練労働者たるか、若しくは見習たるかに従ひて、それぞれ一時間當り〇、七〇フラン、〇、五〇フラン、又は〇、三〇フランを支給して居る。そして刑務所の管理費の支辨は請負代金より控除する十五%を以て足りるのである。

これ等の状態の下に、受刑者の家族又は犯罪の被害者のために使用すべき作業報酬からの或る程度の餘裕を見ることは決して不可能ではない。

工業作業に關しては、中央作業課組織の完成せる一九二三年度に於て、賦與されたる作業賞與金に一つの重要な累増か確認される。そしてこの累増は、漸時に行はれたる作業の配分と機械設備の完成との結果に外ならないものであらう。

作業を強制せられざる被拘禁者のそれをも含みたる作業賞與金の總額は一、〇五四、三四七、六五フランに達した。

輕罪囚に對するもの

六九六、九七〇・一七

懲役囚に對するもの

三四、一二二・六〇

徒刑囚に對するもの

一〇三、七五七・六五

即ち作業の義務を課せられたる凡ての種類を受刑者に對するもの

八三四、八五〇・四二

Ⅱ 受刑者は彼れの被害者に與へたる損害を賠償することを要する。この目的に於て一個の共同基金の設定が必要とされる。

各種國際會議に於て、凡ての國の最も權威ある法律家並ひに刑罰學者達は、賠償を爲さしむべき被害者の權利を宣言し、且つこの目的を達するために被害者の處分し得る手段の不充分なることを痛論した。

全國刑務協會を代表する資格に於て、デイジョン大學教授ルー氏は、ブルユツセル國際行刑會議（一九〇〇年）の彼れの報告に於て、次ぎのことく論じた〔註二〕。

『それは同時に正當にして且つ必要なる一つの處置である』。そして彼れは附言した、『受刑者か彼れの被害者のために作業し、且つ犯罪の損害を支拂ふべき金額を、その額に汗して一錢、二錢と蓄積して行くのは確かに一個の尊き道德的情景である』。

〔註一〕 Actes du Congrès de Bruxelles. Travaux prépar. toire.

それ故に、既に久しき以來、最早この原則に就きて異論を存した譯けてはなく、たたそれに達する手段か缺けて居たにすぎなかつたことか確認される。

今日、我々は若干の適用の機會と共に〔註三〕問題の爾かく有益なるこの方面を考察し、そして假令凡

ての被害者にまで及はすとも、せめては輕罪及び重罪犯人の最も利害關係の著しき被害者に對する賠償のために凡ての作業報酬の何割かを天引する方法によりて一つの賠償積立金を形成することは、必ずしも困難でないであらう。

一九二三年度中に、被害者のために爲されたるこの控除は二三件を算したか、しかしその數額は全體に於て僅かに一、三三八・六〇フランといふ眞に笑ふべき小額に止まり、而かもその中一、〇四六・四五フランは寄託積立金の中から繰入れられたのである。

しかしながら、我々か前に引用する數字を基礎として、假りにこの賠償基金のために十二%を控除するとすれば、その總額は一九二三年度に於て、正に一〇〇、一八二・〇五フランに達したであらう。

損害賠償の権利が裁判所によりて確認されたる場合にかきり、刑務所は調査の上、被害者のために、正義と人道とを命ずるところに従ひて、この賠償基金よりその至當と思料する若干の假拂を爲し得へきてあらう。

その顯著なる道徳的意義から考へて、この種處分の實現を期することは、確かに一個の著しき進歩を構成するものであらう。

〔註二〕、『メキシコに於て、この問題の解決は既に或る程度の實現を見た。刑務所は爲されたる作業の第四の部分を被害者に交付することを要する』(Actes du Congrès de Bruxelles 1900. Livre II, p. 90)

Ⅲ 受刑者は窮乏状態に在る彼れの家族の救助を必要とする。そこには、窮迫せる受刑者の尊屬、配偶者又は卑屬を救助するために一個の救助基金を構成することが必要とされる。

この場合、論者は言ひ得るであらう、そこに存するものは利害關係者の個人的問題にすぎない。しかしながら、刑務所に於ては絶對的正義の支配するとか必要であり、そして凡ての受刑者は刑務所に於て同一の制度に服することが必要とされるか故に、救助すべき家族を有たない或る被拘禁者か、窮乏状態に在る配偶者、子女若しくは尊屬親を有つたために特別の義務を有する或る受刑者よりも、刑務所に於て一つのより良き地位に置かれるのは、許すべからざることである。

これ故に、一つの救助基金 (fonds de secours) の設定に、凡ての受刑者をして更らに共同に關與せしめることに於て、我々はこの目的を達するに最も實際なる方策を見出すものであらう。

窮乏状態に在る配偶者、子女及び尊屬は、凡ての受刑者によりて連帶的に援助されねばならない。

受刑者に歸屬する凡ての報酬に對して、彼れの屬する部類の如何に拘らず、この基金のために、凡て一〇%の控除が爲されるとすれば——そしてそれは可能なことである——この控除は、現時に於て、この救助基金に可なりの資源を與へることになるであらう。

假りに一九二三年度の作業収益を基礎として考へるならば、この控除額は八三、四八五・〇四フランに達

するてあらう。そしてこの金額を、同一年度間に、囚徒積立金の處分し得べき部分と準備金として留保されたる部分とから差引かれたる救助金の總計五二、三二五・二九フランと比較するとき、この金額はこの特別基金の實現を試みるに充分と見えるのである。

他方に於て、我々か被害者に對する賠償基金のためにする控除を先きにし、受刑者の家族に對する救助基金のためにする控除を後にし、而かも前者を作業報酬の一二%と定め、後者をその一〇%に止めむとするのは、道徳的意味に於て、この差等を認めるとか極めて論理的であると考へたためである。何故なれば、受刑者の犯罪のために、その家長から與へらるべき生活の資源を奪はれたる被害者の家族か、若しもこの窮迫の直接の責任者たる受刑者の作業によりて可能なるかきりの救助を受刑者自身の家族に先んじて受けなかつたとするならば、それは確かに不合理たるを失はないであらうからである。

この場合に於ても、窮乏家族の救助に必要な凡ての決定は、刑務所主腦部の報告に基き且つ行刑委員會及び輔成委員會の意見を徴したる後、社會的諸環境に於ける一つの調査の結果を基礎として、行刑監督官廳によりて爲さるべきであらうことは、言ふまでもない。

IV 釋放時に對する準備金の設定

上記凡ての控除が爲される結果、被拘禁者に歸屬する部分（處分し得べき部分と準備金として留保せらるべき部分とを併せて）は、次きの比率を示すことになるであらう。

- (a)、輕罪囚に對しては、作業報酬の二八%
- (b)、懲役囚に對しては、作業報酬の一八%
- (c)、徒刑囚に對しては、作業報酬の八%

一日當りの作業報酬平均四フランを標準として算定すれば、彼等の屬する部類（前記(a)、(b)、又は(c)）に従ひてそれぞれ一週三回、二回又は一回、酒保に於て補充糧食を求め得る特典を與へられたる受刑者はそれぞれ毎週三回一・二二フランつつ（輕罪囚）、二回一・〇八フランつつ（懲役囚）、一回〇・九六フランつつ（徒刑囚）、酒保に於て費消し得ることになるであらう。蓋し彼等の六日間の收得はそれぞれ六・七二フラン、四・三二フラン又は一・九二フランであり、そしてその二分の一は準備金として留保されるからである。

我が刑務所の糧食定量の營養價値を考へたならば、これ等の金額は充分であり、且つ必然的に献立の變化に乏しき、そして長い間には作業に従事する被拘禁者に取りて幾分營養不足の傾きを免かれざる糧食制度の嚴しさを緩和し且つ匡正するに必要な酒保の費用を償ひ得るものと認められ得る。

同様に、釋放準備金は嚴密に刑期に比例して増加して行くのであるから、そこに蓄積される金額は、彼等の釋放の日に、受刑者に取りて一つの小さな資源を保證することになるであらう。

休業日數、即ち日曜日、大祭日、病氣、又は強制休業を見込むとして、一年間に於ける被拘禁者の平均

作業日数を二五〇日と見積ることは決して過大ではない。

(a)、(b)、又は(c)、の部類に屬する受刑者の平均刑期、三年、五年、又は十五年の終りに於て、被拘禁者は、それ故に、(a)の部類に屬するものに在りては四二〇フラン、(b)、の部類に屬するものに在りては四五〇フラン、(c)の部類に屬するものに在りては四〇〇フランに達する一つの準備金を有ち得ることになるであらう。そしてこの金額は受刑者に、その釋放に際して、尠くとも數週間の生活費の支辨と差當り必要な衣類若しくは稼業用具の購入を保障するに充分なのである。

釋放後に於ける積立金の使用

フランスに於て假釋放の制度を確立したる一八八五年八月十四日の法律は、或る受刑者を刑期の満了前に條件附に釋放するに當りて、輔成會又は類似施設に釋放者の行狀に關する監視を托し、かくてまた釋放者をこれ等輔成會の直接の監督及び保護に附する權限を刑務所に附與して居る(第六條第二項)法律はまた釋放者の委託を受けたる輔成會又は類似施設に、一〇〇フランを超へざる限度に於て五十サントチームの日當を保障する(第八條)(註五)。

[註五] Actes du Congrès Pénitentiaire de Bruxelles 1900, vol. V, Rapport de M. le professeur Vidal. この規定は我々に示唆を與へる性質のものであり、そして釋放準備金 (Pécule de Sortie) に對して類似の保護處分を要求すべく我々を慫慂するものである。

實際、釋放準備金を無監督に釋放者の手中に委することは、一般に、一つの社會的回復手段よりも、寧ろより多く一個の危險を構成するものである。

一つの長い拘禁生活によりて幾分とも意氣を沮喪し、そして最もしはしは意思の薄弱な、精力の減退せる釋放者か彼れ自身の自由に放任されたる場合、彼れは容易く最初の誘惑に征服され、かくて粒々辛苦の結果獲得したるその貴重なる準備金を僅か數日の間に濫費して了ふようになりかちなのである。

この危險に當面して、國家か彼れの釋放以來、受刑者に全然無關心に止まるかごときは許すへからざるごとである。國家の義務と國家の利益とは反對に、釋放者に對する積極的干涉を命ずる。そしてこの場合國家は釋放者の社會的再應化の諸事業を汎く補助し且つこれ等事業の組織を助成することによりてのみ、より克くその使命を果し得るものであらう。

これと共に、彼れの釋放に先ちて或る社會的救濟事業の監督を承諾することは、凡ての釋放者に取りて一つの義務とされねはならないであらう。そしてこの點に於て、釋放者は、彼れかこの監督から彼れの窮極のために受け得る諸々の利益と同時に、また就中彼れの積立金に關して彼れか遵守するを要する諸々の義務を彼れに承認せしむべき一つの誓約に署名する義務を有するものであらう。

我々の觀るところによれば、この點に於て、條件附釋放者と確定的釋放者との間に、別に區別を爲す必要は存せない。蓋し受刑者の大部分は、何れもその判断若しくは意思の能力に或る缺陷を有するものであ

り、そして一つの救済の必要を有つ點に於て、兩者何れも異るところはないからである〔註六〕。

〔註六〕、ヴェルヴェック (Verweeck) 博士がフォレー刑務所に於て爲したる講義、第七講「犯罪的遺傳」(L'Hérédité criminelle) によれば、生來性犯人の割合は二乃至五%、病的遺傳を有する犯人のそれは六〇%、重要な缺陷を存せざる機會性犯人のそれは三〇乃至三五%である。プリンスによれば全人口の一〇%は精神的弱性者 (Prins, L'Étude sociale et les transformations du droit pénal, 1910)

監督委員會の制度

それ故に、そこには釋放準備金の良好なる利用を監督する任務を托せらるべき官設の、否寧ろ官の一委員會を設置することか肝要とされるであらう。そして第一にこの監督に關與するものか輔成會たることを要するであらうことは、固より言ふまでもない。

この特別委員會は、被拘禁者の退所する刑務所の典獄をしてその任に就かしめ得べき一名の政府代表者、居所地の公的慈善事務を擔任する一名の市町村公吏、公設勞働取引所 (Bourse officielle du travail) の代表者〔註七〕、一つの輔成委員會若しくは一つの職業組合の一名若しくは二名の代表者を以て構成されるであらう。

加之、凡ての釋放者に對して、彼れの道德的地位、彼れの職業、彼れの家庭的及び社會的地位を斟酌して、就中特別に彼れの準備金の使用に就き監督の任に當るべき一名の後見人を職權を以て選任することか

原則とされねばならないであらう。

監督委員會との連絡を取りて、事實上その協働者となるべきこの後見人は、釋放者のために最善の方法に於て積立金を處分すべく、監督委員會に諮詢することを要するであらう。

引續き刑務所の金庫内に保管せらるべき準備金の引出は、或ひは釋放當座の生活費を支辨するために、或ひは稼業用具を購入するために、若しくはその他、後見人の目に必要と認定せられたる凡ての目的のために、後見人の理由を附したる請求に基きてのみ承諾され得るであらう。

かようにして、後見人に彼れの被保護者に對して充分なる權力的威信を與ふることにより、準備金の善良なる使用が確實に保障されることになるであらう。

〔註七〕、一九二四年二月十九日の勅令は公設若しくは公認の勞働取引所の仲介による勞働者の公的職業紹介の組織を規定する。

或る裁判上の決定の執行中に屬する未成年者の作業報酬金は如何に組織せらるべきか

我々の普通の職業的活動に關はりなきこの問題に關しては、我々はたまた次きのことき二三の注意に我々の考察を制限するであらう。

一般に、國立感化施設に收容せられたる未成年者の作業収益は、單に、彼れの給養、彼れの教習及び彼

れの教育が必要とする負擔の或る微細なる輕減としてしか考へられ得ないのである。

未成年者によりて供給されたる作業の價值が常に實際要求されたる負擔以下たるべきは疑ひない。何故なれば、未成年者に關するかきり、そこに眼目とされるものは専ら教育的方面にかきられるからである。他方に於て、未成年者かその強制せられたる學課以外に於て作業に捧げ得る時間は極めて僅少に止まるであらう。しかしそれにも拘らず、尙ほ彼れの熱心を鼓舞し、彼れの努力を奨励することは必要なのである。

従つて、未成年者の作業に對してはまた一つの報酬が必要とされる。

最後に、未成年者は彼れの與へたる損害に就きて責に任ずるものは認めかたいが故に、國家の損害を賠償する目的に於て定むべき若干の部分と、未成年者か國立施設内に在る場合、彼れの給養費とを控除したる後、その作業收益の殘額は、これを折半して、その一つは彼れの釋放時に於ける一つの準備金を設定するために、他は若干の慰安手段——或ひは圖書、或ひは彼れの拘禁中彼れか所有することを希望する凡ての他の物件——を自給するために、彼れに歸屬すべきであらうと我々は考へる。

しかしながら、これ等物品の購入は、固より、彼れの善行に對する賞遇の名義に於てのみ、そして常に作業に於ける出精と一つのより良き進歩に向つての努力とを刺激するためにのみ許容され得るものであらう。

私人の許に未成年犯人を委托する場合に於ける爾かく錯綜せる問題の部分には、この場合、我々の考察から除外されるであらう。この問題の研究はその方面の専門家に一任されねばならぬ。しかしながら、未成年者の給養費を負擔する國家は、未成年者か彼れの勞働によりて受託者に與へる收益價值に對して或る拂戻を受くべきものたど（相殺勘定に於て）我々は考へる。かようにして、國家は、或る慰安手段を自給し且つ彼れか成年に達する時期を待つて彼れに歸屬すべき一つの積立金を形成するために若干の金員を奨励の名義に於て少年に賦與し得るであらう。

我々か上來爲したる本問の検討は専ら被拘禁者の生活から我々の日常得つつある經驗に基いたものである。そして我々はこれか實現に伴ふ困難を意識しなから、尙ほ本國際會議の検討に附すべく、次きの諸結論を提案する。

(i) (a) 職業的教習 (apprenticeship for professional) と被拘禁者の作業收益とは平行して進まぬはならない。
(b) そこには、國家に對して被拘禁者の給養費を辨償し、且つ被害者に與へたる損害賠償の考慮を可能ならしむるに足るだけの一つの作業收益金 (pocket) の形成か工夫されねばならぬ。

(ii) これ等の目的のために、極めて良好なる設備と、周到なる類別と嚴正なる監督との下に、一つのより良き教習と一つのより豊かなる作業收益とを保障し得る共同工場を創設することか慫慂されねばならぬ。

らない。

一五八

(II)、受刑者の給養費を辯償する目的に於て國家のために一定の控除を爲したる後、作業取得金は尙ほ次の目的に利用されねばならぬ。

(a)、(1) 輕罪又は重罪の被害者に與へたる損害を賠償し、(2)、窮乏の状態に在る被拘禁者の家族、即ち尊屬、配偶者又は卑屬を扶助し若しくは救助し、かくて今日、受刑者の責に歸せらるべき負擔を重課せられたる公的慈善事業の豫算をそれだけ輕減することを目的とする共同基金の設定を助成すること。

(b)、釋放時のために一つの適當なる準備金を設定し、以て、釋放當座の生活資料を確保すること。

(c)、また凡ての國に於て所謂の刑後事業 (*œuvres post-pénitentiaires*) 即ち釋放者保護を目的とする諸施設の創設を要求し、凡ての釋放者をこれ等の諸施設の輔成に附し、かくてこれ等の施設をして作業取得金の管理の任に當らしめることが必要とされる。

條件附釋放を規定する凡ての法令は、フランス法に倣いて、釋放者は凡て國家の公認せる或る輔成會の監督と保護とを受けることを約束し、且つ彼れの行狀に對する輔成會の監視と共に、また彼れの釋放準備金に對する輔成會の管理を承諾すべきものとする諸規定を包含することを要するであらう。

V

報告者 Axel Smedal,

Directeur de la maison centrale d'Akershus, Oslo.

我々は被拘禁者に勞銀請求權を認めることは出来ない。彼等に勞銀を受けることなしにも、また作業する義務を有する。或る被拘禁者に與へられる作業賞與金は、これを自由労働者の受ける支拂に比較する譯けには行かない。

作業賞與金は、單に作業に精勵し、且つ作業外に於けると等しく作業中その行狀に何等非難するところなき被拘禁者に對してのみ與へらるべきものであらう。そこには特別なる知識か別に大きな役目を演じてはならない。また、そこには、家長としての被拘禁者に歸する未必的負擔か斟酌されてはならない。作業賞與金の算定は、作業時間數、一日當り工程、單件作業 (*travail aux pièces*)、請負作業 (*travail à la tâche*) 又はその他必要に應じて公平と思料される標準に従ひて爲され得る。責任のより重大なる作業、夜業若しくは日曜作業に従事する被拘禁者に對しては、一つの割増金か賦與され得る。しかしこの割増金は、如何なる場合に於ても、五〇%を超へてはならない。尙ほそこには或る被拘禁者に對して、一つの特別賞與金の授與を中央刑官廳に申請し得るものとされねばならぬ。

一五九

最近、ニューヨーク州に於ては、同一部類に於ける一自由労働者の支拂に相當する一つの勞銀を被拘禁者に與へむとする全然新たな一案が提出された。一例を引照すれば、完全なる一つの指揮と一つの設備との下に、百人の職工を使用する刑務所外の一製靴工場か一年間に一定数の靴を製作し、そして各労働者に對して一日當り三ドルの賃銀を支拂ふことを工場主に可能ならしめるための一つの生産収益を擧げると假定する。この場合、若し或る刑務所の製靴工場に於て、自由生産の七五%までの生産能率を有する百人の被拘禁者か使役されるとすれば、この工場の各作業者には、一日當り二・二五ドルの賃銀か支拂はれ得ることになるであらう。他の諸工場に就きても同様である。尙ほ家事作業、各種修繕作業又は野外作業に従事する被拘禁者に對しても、また等しくかくのとき賃銀率を適用すべきものとされる。自己の意思に反して、例へば、材料の缺乏のために休業する被拘禁者に對しては、一日當り一・三五ドルの確定賃銀か支拂はれる。各受刑者に對する國家の費用と各特定刑務所に分布されたる刑務所共通費の分擔額とは、この賃銀から控除される。ニューヨーク州に於ける一年度間の豫算に従へば、この控除額は一日當り約一・二〇ドルである。かくして被拘禁者に歸屬する純所得は、刑務所會計に於ける彼れの預金口座に記入され、そしてこの預金に對しては普通銀行の利子か附せられる。

我々の知るかきりに於て、かくのとき制度は何處に於ても施行されて居ない。そしてその實現は疑ひもなく無數の困難を包含するものであらう。何故なれば、常に刑務所には、種々の原因、例へば病氣、不具、不熟練、授業參加等のためにかくのとき作業部屬に編入され得ざる多數の被拘禁者を存するであらうからである。然るに、これ等のものは、以前に一つの職業教育を受けたるか、若しくは優良なる職業労働者と爲るべき特別な能力を有する他のものと、同一の勞銀を獲得し得ることになるであらう。

我々かそれを推賞するかごとき作業賞與金の算定に在りては、常に看守の報告か基礎とされねはならない。しかしこの場合、これ等看守は常に被拘禁者と接觸して居るものであつて見れば、善惡何れの意味に於ても彼等の偏頗は容易に行はれ得るものであることを、特に注意せねはならないのは言ふまでもない。金額の決定權は所長に屬する。所長は、作業監督、刑務監察官及び一名又は二名の看守代表者の諮詢を経て、毎月一回この金額を決定することを要する。

原則として、賞與金は在監一箇月又は二箇月の後、各被拘禁者に就きて決定されるであらう。しかし必要あるかきり、この賞與金はまた作業の第一日以來直ちに賦與され得る。作業賞與金は、漸時増給され得るかために、初めは小額に止められる。怠惰又は行狀の不良は報酬額の削減を招來するであらう。そして若しも被拘禁者か不良なる行狀を持するか、若しくは逃走するときは、中央行刑官廳の決定によりて、報酬積立金は沒收され得るであらう。

若しも或る累進階級制を存するときは、作業賞與金の額は、また階級に従ひて累進せしめねはならないであらう。不定期刑言渡の場合に於ては、被拘禁者をして能ふかきり大なる作業成績を擧げること利害

を有たしめるかとき方法に於て、報酬積立金は出來得るかきり、これを條件附釋放制度に於ける一要素たらしめることか必要である。

被拘禁者か入監に際して持參し若しくは彼れの在監中外部より彼れに送致せられたる金銭は、報酬積立金の中に編入されてはならない。裁判費用及び被害者に對する損害賠償額は、これから控除されるであらう。尙ほまた被拘禁者は、例へは罰金の支拂及び彼れの家族に對する救助のために、この資金に就き、充分自由なる處分權を有つへきてあらう。

報酬積立金（作業收得金）に在りては、その半額は、所長の監督の下に、拘禁期間中に消費され得る。糧食、衣服、醫藥等に關する被拘禁者の必要は、凡て刑務所に於て供給することを要するのであるから、作業收得金によりてこの種需要の自給を被拘禁者に許可すへきてはないと我々は考へる。若しも強てそれを欲するならば、この許可は既に一つの長期間の拘禁に服したる被拘禁者にのみ與へらるべきものであらう。報酬積立金のこの半額は、未的に被拘禁者の所有する金銭と併せて、先づ第一に彼等の家族の救助に——それか報酬積立金に關するかきり、假令被拘禁者の意思に反しても——利用されねはならない。この外には、尙ほ、時計や、書籍類の購求、講義録の講讀等に使用せらるべく、若しまた釋放に際して、被拘禁者か一般に刑務所より供給されたるそれよりもより良き衣類を望むならば、報酬積立金の一部は、またこの支拂のために使用され得るであらう。

作業報酬は一つの恩恵と看做さるべきものであつて見れば、その積立金の一部を拘禁中の給與の支辨に充當せしめることには賛成しかたない。かくのとき制度は作業賞與金を認めたる志向と調和しかたきものであらう。若しも被拘禁者か釋放に際してその重要な一部分を吐き出さねはならないとするならば、可なり大きな積立金を蓄積したからとて、それか受刑者に取りて果して何の役を爲すであらうか？若しも積立金か單に僅かの金額にしか達しないとするれば、旅費その他を支辨するために、積立金から何物も控除されてはならないであらう。

短期拘禁の場合に於ける報酬積立金の額は極めて小額に止まるのであるから、釋放される被拘禁者にその全額を拂渡し得ることにしても、別に問題ではないか、しかし、釋放時の積立金か可なりの金額に達して居る場合には、その取扱に困難を生ずる。この場合、全額の支拂は全然例外的事情を存する場合にのみ限定されねはならない。若し被拘禁者か信用するに足る親族を有するときは、刑務所は彼等と聯絡を取り必要なる打合を爲すことか極めて肝要である。金員を警察に送付するのは望まじきことでない。この場合善良なる仲介者の介在は、就中、彼等か個人的に親しく釋放者の面倒を見る場合、特に良好なる結果を齎し得るであらう。

刑務所か或る釋放者の積立金の使用及び監督に就きて自からその衝に當り得ない場合には、普通釋放者輔成會かこれに代ることになるであらう。この場合、輔成會かその任務に成功せむかためには、輔成會は

練熟せる充分なる職員を有し、且つ刑務所との完全なる聯絡の下に活動することが必要である。釋放者積立金の管理はこれ等輔成會の最も困難なる仕事のひとつである。釋放者は概して自惚れが強、また生意氣である。そして事態をより不良に導くために、彼れの背後には、あらゆる口實の下に凡ての支拂を彼れにさせようとする兩性の悪友達か附き纏つて居るのである。積立金を出来るだけ注意深く管理し、そして刑務所と被拘禁者との間の信任を攪さないかために肝要なことは釋放者を正しい環境の中に置くことである。最も重要な一點は即ちここに存する。

條件附釋放者の報酬積立金に對しては特別な諸條件が課せられ得る。若しも彼等が彼等に命せられたる行狀の諸規則に服することを怠るときは、釋放者は積立金に對する權利を喪失するであらう。そしてこの事實は彼れの再收監の原因となり得るであらう。若しも釋放者が不良の行狀を持し若しくは再び收監されるときは、刑務所長は未だ使用せられざる報酬積立金を沒收する權能を有するであらう。かようにして沒收せられたる囚徒積立金を以て、そこには被拘禁者の家族に對する一つの救助資金が設定され得るであらうし、そしてこの資金は刑務所長によりて管理されることになるであらう。

釋放者は一定の時期に於て單に限定されたる金額をしか引出し得ない條件の下に、積立金を貯金通帳として交付することは、固より有利であらう。しかしそれにも拘らず、この制度にしてもまた濫用を免かれないことは——例へば貯金通帳を擔保として借入れを爲し又は通帳を賣却するかとき——經驗の證明す

るところである。加之、假りにそれが必要なきに引出されたにしても、尙ほその金員が果して適當に使用されたか否かを監督することは不可能である。

比較的小規模の諸刑務所に於ては、また各般の事情かそれを許す。その他の場合に於ては、所屬刑務官の助けを藉りて所長自から積立金管理の任に當ることか最良の方法とされるであらう。蓋し彼れは被拘禁者を識つて居ることか、この場合大きな長所であつて、これによりて各個の場合の利害か周到に査定され得ることになるであらう。

尙ほ、經驗の教へるところによれば、女囚の場合に於ける積立金の管理は男囚の場合に於けるそれよりも、より容易なるものである。

VI

報告者 *Wladimir N. Avramoff,*

Directeur des affaires criminelles au Ministère de la Justice, Sofia.

I

(1)、我々は、一八九五年のパリ―國際行刑會議によりて採用せられたる見解、即ち、作業を爲す被拘禁

者は、敢て「賃銀請求権を有するものではない」か、しかしながら、國家は作業に對する彼れの熱心を奨励するために、或る作業賞與金を彼れに賦與することに一つの利益を有するものとなす見解に左相するものである。

この見解は作業を爲す被拘禁者の義務から流出する。何故なれば、左もなきかきり、そこには明らかに刑罰の本質的諸要素の一つか缺けることになるであらうからである。それ故に、或る被拘禁者によりて爲されたる作業は、彼れの利益のために、國家に對して何等かの要求を爲す權利を發生せしめるものではない。

疑ひもなく、かくのとき一個の權利はたた彼れの完全なる自由を享有する者にのみ歸屬するものである。

しかしそれにも拘らず、國家は尙ほ作業を爲す被拘禁者に或る賞與金を與へることに利益を有する。經濟的見地に於て、有償の勞働は無償のそれよりも、明らかにより生産的である。行刑的見地に於て、作業賞與金は被拘禁者をして一般に人間勞働の價值を意識せしめることによりて、熱心と紀律を増加する。また社會的見地に於て、被拘禁者か刑務所を去る時期に——彼れの生活の最も危険なる時期——彼れの直接の必要を充すために、何程かの金員を有つて居ることは、確かに有益なることである。そしてそれは、明らかに累犯防止の一手段なのである。

國家は被拘禁者の作業を報償する義務があるのではなく、單に彼れのために一つの仁慈を施すにすぎないものであるといふ原則から出發するとすれば、この場合、國家の賦與する作業賞與金は種々の方法によりて規制され得ることになり、従つて、國家は、場合によりて、被拘禁者にその均霑を制限し、若しくは執拗なる被拘禁者に對してはその全部を剝奪することすら出來る譯けてある。従つてまた、作業賞與金は生産物の商業上の價值に従ひてはなしに、作業に捧げられたる熱心と被拘禁者の行狀一般とを斟酌して與へられることになるであらう。尙ほ、この場合、當該被拘禁者か初犯者なるか否かもまた等しく考慮されねばならないのである。

かようにして、刑務所に於て爲されたる作業に一つの賞與金を與へることの優れたる教化的意義が是認されることになるであらう。

(2)、これ等の理由から、被拘禁者の作業に對して、この賞與金以外の何等かの金錢的報酬を被拘禁者に交付することは適當でないと考へられる。

(3)、この作業賞與金の特別な法律的性格に關しては、被拘禁者は彼等の拘禁中この仁慈の一部分を享受し、他は彼等の釋放後に使用すべきものと定められ得る。

第一の場合に於て、我々はその豫定されたる金額を「處分し得る部分」そして第二の場合に於て「處分し得る部分」と名附け得る。

(4)、この制度の施行される國に従ひて、處分し得る部分又は處分し得ざる部分の數量は自のつから相違し得る。かようにして、國家かその被拘禁者に對して糧食、衣類及びその他の必需品をより多く供給する國に於ては、處分し得る部分は處分し得ざる部分よりも、より多く制限されるであらう。そして反對に國家か——何等かの原因のために——その被拘禁者の最も緊切なる必要を充分に充足しない國に於ては、處分し得る部分は留保分よりもより大なることを要するであらう。

加之、そこにはまた、被拘禁者の給與一般に必要な食料品及びその他の物資の價格並ひに賦與せられたる賞與金の數量とか斟酌されねはならない。何故なれば、これ等の要素は、拘禁中に處分し得る金額と自由生活への復歸のために留保されたる準備金との間に定めらるべき割合に等しく影響し得るからである。

正則的狀態に於ては、原則として、處分し得る部分と留保分とは何れも作業賞與金の五〇%を構成すへきてあらう。

5、留保分は専ら被拘禁者の釋放後の主要なる諸般の必要に備へることを目的とする。何故なれば釋放の直後は彼れの生活の最も危険なる時期と認められるからである。

しかしながら、この原則は絶対的たるべきか、若しくは或る例外を許すものであるか？
そこには、たた一つの例外を存し得ると我々は考へる。「被拘禁者の近親」の重患か即ちそれである。

そしてこの型成の下に我々の理解するものは、被拘禁者の子、夫又は妻、父又は母である。

實際、被拘禁者の近親か突然重患に陥つたかような場合には、處分し得る部分は極めて小額であるか、若しくは既に全部費消されて居ることか尠くない。それ故に、この場合、被拘禁者に、彼れの留保分の一部を處分することによりて彼れの最も親愛なるこれ等の人々の救助を爲すことを許さないのは、餘りに殘酷たらざるを得ないであらう。

かくのとき場合は被拘禁者自身に對しては豫定されて居ない、何故なれば、彼れは彼れかその刑を執行される刑務所によりて、彼れの狀態か要求する凡ての手當を無償にて受けることになるからである。

公救濟の制度か完全に組織されて居るか、若しくは赤貧者の施療制度か確立されて居る國に於ては、必ずしもこの例外を認めるの必要を存せないであらうことは。固より言ふまでもない。

上記場合の確認は、刑務所によりて最も確實にして且つ最も精確なる方法によりて爲されねはならない。

この同一刑務所は被拘禁者の近親に就きて一つの真正なる赤貧の狀態を確認し、そして彼等か眞實に、彼等の健康に必要なる醫療を無償にて求め得ないものであるかを檢證せねはならぬ。

この場合に於てのみ、刑務所は處分し得ざる部分の半額を超へざる一つの金額の處分を許可し得るであらう。

一七〇

この場合か反覆されるときは、第一回に引渡されたる金額とその後爲されたる拂込とが斟酌されねばならない。若しも救助の第一回の請求に當りて、處分し得る金額か八〇〇フランを算したてあらうならば、被拘禁者の近親に最高四〇〇フランか與へられ得るであらう。しかしながら、若しも第一回請求に際して單に一〇〇フランしか與へられて居なかつたならば、そしてその後被拘禁者が新たに尙ほ六〇フランを拂込んで居たとするならば、この場合、第二回の救助要求に對しては、多くとも残りの三〇〇フランと、更に爾後爲されたる拂込の半額を構成する三〇フランと、即ち全體に於て、最高三三〇フランの拂出か許可され得るのである。これを言ひ換へれば、八六〇フランの全額の中から、被拘禁者は一回若しくは數回に四三〇フランを費消し得ることになるであらう。

(6)、處分し得ざる部分は、被拘禁者の釋放の時期に於て彼れに引渡さるべきために嚴格に留保さるべきものとする原則から出發するにしても、しかしこの準備積立金の殘額を構成する金額は、尙ほ一時に全部被拘禁者に引渡さるべきではないと、我々は考へる。經驗の證明するところによれば、被拘禁者の多くは僅かの時の間にその得たる金額の殆ど全部を浪費する。報酬積立金の殘額か如何なる方法に於て交付せらるべきかは、更らに後段の説明に譲るであらう。

(7)、處分し得る部分は拘禁期間中に費消され得る。しかしそれにも拘らず、この費消は刑務所の監督なしに爲さるべきものではない。固より、この金員か刑務所内に持込み若しくは刑務所内に於て使用することを禁せられたる物件の購買に用され得ないの言ふまでもない。この外、また被拘禁者は不道德なる目的のためにそれを使用する権利を有するものではない（假令それか彼れと接見する人々を介して刑務所外に於て行はれるものであつても）。交付されたる金員は、刑務所附屬の酒保に於て補充糧食の購買か許されることによりて、被拘禁者の營養の改善に寄與し得る。被拘禁者には、また下着類、衣服及び靴——固より奢侈に流れず而かも刑務所規則に合致する限りに於て——の自給か許可される。同様に、彼れはまた彼れの作業に必要な材料、有益なる圖書、職業用具、並ひに、若しもそれか有益に利用され得たならば、或る美術、音樂若しくは科學的研究の修業に必要な物件を購求し得る。この他、また彼れは彼れの家族に援助を爲すため又はこれに類するその他の目的のためにも、この金員を費消し得るであらう。

(8)、作業賞與金の名義に於て被拘禁者の收得したる金員は、如何なる場合に於ても差押の目的たらしめることは出来ない。若しもこれを許すに於ては、それは、明らかに、かくして與へられたる金員の行刑的性質と矛盾することになるであらう。

強制執行に於て、囚徒積立金の處分し得る部分と處分し得ざる部分との間に一つの區別を認める餘地はない。兩者何れの場合に於ても、それは被拘禁者の改善のために努力する國家によりて與へられたる一つ

の仁惠の賜物である。被拘禁者の受けるものは一つの褒賞なのである。従つてそれは本來の意味に於ける一個の貸銀たる性質を有し得るものではない。それは特に彼れの道徳的回復と彼れの行狀一般の改善とを目的とするものである。苟くも、賞與金の名義に於て被拘禁者に賦與されたる金員は就中累犯防止の有効なる手段として役立つものたることの原則が承認されたるかきり、被拘禁者の債權者にこの金額の差押を許すのは、まさしく反社會的たらざるを得ないであらう。被拘禁者の改善そのものに認められる社會的目的に反する結果を招來することなしに、如何にしてそれか行はれ得るであらうか？何故なれば、執行訴訟に於て、被拘禁者の運命は全然彼れの債權者の要求次第によりて決せられることになるであらうからである。果して然らば、債權者の利益か如何にして社會の利益に優先すへきてあらうか？我々に従へば、報酬積立金の處分し得る部分と等しく、また處分し得る部分をも、私人債權者又は國家の（裁判費用、被拘禁者の給與若しくはその他の請求に關する）攻撃に對して等しく保護することか適當とされる理由は即ちここに存するのである。

それ故に、我々は絶對的の原則として次きの型成を提案する。曰く、被拘禁者の報酬積立金を構成する金員は、如何なる形の下に於ても、これを強制執行の目的となすことを得ない。蓋し國家か被拘禁者の債權者にこの積立金に對する執行を許すことは、結局、一方の手を以て與へたものを他の手を以て取戻すことに歸著するものではないか？

しかしながら、この特權は本來の意味に於ける囚徒積立金に限られるものなことを、固より注意しなければならぬ。例へば、贈與、富籤又はその他の原因によりて受刑者の收受せる部分の金額は一般民事法の支配を免かれる譯けには行かない。何故なれば、かくのとき權原に基く金額に對してまでも尙ほこの特權を擴張することは、自由なる市民の有たない權利を被拘禁者に與へることによりて、彼れに不當なる恩惠を與へることになるであらうし、またこれを別にしても、かようにしてこの特權を擴張することは、犯人の作業に對する刺激に一つの消極的效果を與へることになるであらうからである。

凡ての混淆を避けるために、刑務所は、作業報酬金の名義に於て拂込まれたる金額を記入するために特別の通帳を作成すると共に、他の名義に於て受入れたる金額に對しては更らに一個の別勘定を開くことを要するであらう。

(9)、被拘禁者——その拘禁中に死亡せる——の相続人は彼等の死亡せる父母又は近親者の積立金に就きその處分し得る部分に關してもまた彼等の相続權を奪はるるものにあらざることをの原則を表明するのは有益なことである。蓋し賦與されたる凡ての金額は——その與へられたる目的の如何に拘はりなく——疑ひもなく刑務所に於て死亡せる被拘禁者の所有權を構成するからである。それ故に、若干の國に於て單に處分し得る部分の殘額に就きてのみ相続權を認めて、處分し得る部分に就きては相続人の權利を剝奪して居るのは、理由なきものであると我々は考へる。

しかなから、この場合、凡ての囚徒積立金はその全體に於て——處分し得る部分と然らざる部分との區別なく——刑務所に於て死亡せる受刑者の未必的債權者に對する關係に於ては、それか私人債權者たる國家たるに拘はりなく、凡て普通法によりて支配されることになるであらう。蓋し、實際上、被拘禁者かその拘禁中死亡することになれば、彼れに對して作業賞與金の賦與を必要としたる凡ての理由は、言葉の行刑的に於て最早存在しないことになるからである。

(10)、既に上述せるかように、國家か被拘禁者に對して一つの作業賞與金を賦與したのは、被拘禁者の道徳的回復と彼れの行狀の改善とのためであつた。それ故に、被拘禁者の逃走は、その懲罰を必要とする彼れの側に於ける一つの不良なる意思を實證したものであることは、極めて當然の論理なのであるから、この場合、彼れの凡ての報酬積立金は沒收されて、國庫に拂込まれるか、若しくは或る行刑事業の資金に充當さるべきものであらう。

逃走せる被拘禁者の貯金通帳に残存する金額はその逃走を證明する書類に基きて、刑務所の長若しくはその代理人によりて回收されるであらう。この場合、關係信用所は上記書類の呈示の下にのみ、刑務所長の請求に應ずべきであらう。

逃走せる被拘禁者か逮捕せられ且つ新たに收監せられたる場合、かくして沒收せられたる金額は最早彼

れに返還されることを許さない。しかなから、彼れの再收監後、被拘禁者は、新たに報酬積立金に對する凡ての權利を享有せねばならぬ。それ故に、彼れに對する報酬積立金は爾後新規に設定されることになるであらう。

II

(1)、囚徒積立金の受入れ及び利用に關する手續は自のつから相違し得る、それは要するに事務の簡易と利便との問題である。

我々かここに勸告し得べき方式の一つは次きの組織である。

彼れの作業に就きて或る報酬を收受する各被拘禁者は、各國の特殊の事情により、中央行刑官廳の一般的规定に準據して、豫しめ國家の各種信用機關と連絡を有する貯蓄金庫若しくは一つの國立銀行の預金通帳を刑務所より交付さるべきであらう。

作業賞與金の支拂は、次きの方法によりて、刑務所の會計課若しくは所長によりて爲さるべきであらう。

定められたる規則に従ひて、各週、各十五日、若しくは各月に、被拘禁者に歸屬せる作業賞與金の五〇パーセントは、彼れの準備金(預金)に拂込れるために控除され、殘額は彼れの個人的使用のために、彼れに交付されるであらう。そしてこれ等の計算は凡て受刑者手帳並びに刑務所の帳簿に記載されねばなら

ない。

一七六

刑務所内に於て或る一個の稼業を爲す被拘禁者に就きてもまた同様である。彼等の製品の賣却と計算とに就きては、等しく同一の規則が適用されるであらう。

或る物件の純益かその掛り官に不明なるか若しくはその評價に困難を存するかごとき場合には、賣上高の十五パーセントが計算の基礎とされるであらう。

(2)、計算を簡單にするために、被拘禁者に歸屬したる金額は、處分し得ざる部分の利益に於て、端数を完全數に算入して記入されるであらう。従つて、例へば、一三フラン二七サンチームの金額を記入すべきときは、一四フランと記載されるであらう。

(3)、刑務所長は、預入されたる金額の利子記入のために、適當なる時期に、貯金通帳を關係信用所に提出し、且つ刑務所の帳簿並ひに受刑者の手帳にこれに關する必要な記載を爲す責任を有する。

(4)、被拘禁者に屬する貯金通帳は、信用所の事務員から容易に識別され得るために、見安き場所に、『何刑務所長の正規の許可書なくして金員の拂渡を爲すべからず』の文句を記載して、他の類似通帳と區別されることを要する。金員の引出を爲す度毎に、上記の許可はまた受刑者の手帳に記載されねばならぬ。

(5)、被拘禁者が積立金の處分し得ざる部分に對して或る金額の引出を請求するときは、その請求の正當なる理由、即ち彼れの最近親者を援助すべき緊急なる現實的必要を證明する證據書類を附して、刑務所長を爲すことを要する。

一つの書面に依る請願を爲すことを要するであらう。刑務所長は、一つの入念なる詮議の後、そして必要なる場合には一つの嚴正なる調査を経たる後、場合によりてその請願を聽許し又は却下すへきてあらう。

請求が認許されたるときは、引渡されたる金額は救助を許されたる被拘禁者の家族に、刑務所より直接に送附されるであらう。この場合には、被拘禁者の貯金通帳並ひに被拘禁者の請願書そのものにその記載を爲すことを要する。

請願書及び受取證は關係被拘禁者の身分帳に添附される。

釋放期に達せる被拘禁者の主要なる必要は次きの四種に分別され得る。

(a)、衣服及び靴類

(b)、旅費

(c)、彼れの稼業に必要な用具

(d)、彼れか或る職業を見出す以前に、或ひは失業の状態に置かるべき釋放當座の生活に必要な費用

(a)、衣服と靴とに關しては、彼れの釋放に當りて、刑務所自から被拘禁者のためにその調達を爲し得るであらう。かくして、そこには被拘禁者自身に自からこれ等物品の購入を爲さしめる不便が避けられるであらう。

一七七

(b)、彼れの出身地まで若しくは最寄り停車場までの乗車切符を彼れに直接交付することによりて、**被拘禁者の送還費用もまた同一の方法に於て處理されることを要するてあらう。**實際、尠くとも文明國に於ては、旅程の最大部分は鐵道によりて爲されるてあらうし、従つて、徒歩若しくはその他の移動方法による部分は極めて短距離に止まることになるてあらう。

(c)、稼業用具の購求に關してもまた、刑務所より直接被拘禁者にその供給を爲し得るてあらう。たた用具の性質上、若しくはその他の事情によりて刑務所の直接供給を妨げる諸事由を存する場合にのみ、彼れの積立金の處分し得ざる部分より必要金額の引出を彼れに許可することによりて、彼れ自身にその購入を爲す權利を被拘禁者に與ふへきてあらう。而かも、かくのとき場合を生ずることは罕れの事態に屬するてあらう。何故なれば刑務所は尠くともこれ等物件の一部を刑務所所在の地方に於て調査し得るてあらうからである。

(d)、**釋放當座の被拘禁者の生活に必要な金額は彼れに直接引渡されねはならない。**しかしながら、我々か既に述べたかように、積立金の凡ての殘額は、濫費を避けるために、一時にこれを交付せず、漸時に分割して交付されねはならない。この點に於ては、刑務所長は、通帳記載の殘高の場合に應じて、各週、各十五日若しくは各月に漸時拂渡さるへき指定文句を貯金通帳に附記することを要するてあらう。釋放されたる被拘禁者か用心深き生活を爲す習慣を學び得たか否かを確認するためには、一箇月乃至二箇月の期間を以て充分と思料され得る。それ故に、この期間の經過後は、彼れにその積立金の殘額に就き自由の處分を許しても差支ないてあらう。

被拘禁者の退所と同時に積立金の殘額全部を交付せず、寧ろ出来るだけ最小の現金を彼れに手交すべく我々の勸告するこの制度は、第一に、**釋放被拘禁者か彼れの乗車券又は彼れの職業用具を賣却してその得たる代金を濫費したてもあらう場合に、その効果を發揮するてあらう。**何故なれば、この場合、彼れのために尙ほ何程かの金員か殘されて居るからである。

この最後の場合に於ては、**釋放被拘禁者の行狀を監視し、以て新たなる過誤を防止せしめるために、積立金の殘額は市町村、警察、輔成會及ひその他に托せられ得るてあらう。**

貯金通帳を設定すべく我々のここに提唱したる制度は、固より若干の不便を免かれない。しかしそれにも拘らず、我々はこの制度に一大簡易の長所を認めるものである。

我々の提唱する方法は、**刑務所に留保される積立金の現在高を——隨時に——知り且つ監督し、そして被拘禁者自身の勝手なる使用を妨止することを可能ならしめる。**

この制度は預入金額の利殖を爲し、かくして得たる利子を更らに資金化せしめることに役立つてあらう。

加之、この制度は極めて僅小の経費を以て足りる。貯金通帳の設定には殆ど費用を要せない。そして計算に必要とされる形式の簡易はこれか取扱に多くの事務員を要求しない。

他方に於て、この制度はまた被拘禁者に——彼れの拘禁期間中——何時にてもその貯金の現在高を知り且つ彼れの釋放の日に向つて諸般の目論見を爲すことを可能ならしめる。そして彼れが既に退所したるとき彼れはその積立金の預入せられたる貯蓄金庫又は國立銀行の凡ての支店に於て、預金の引出を爲し得るであらう。そして生活の激浪は何時、また何處にて彼れを壓倒し得るやも計りかたきことを考へたならばこの點は釋放されたる被拘禁者のために閑却すへからさることである。

III

或る裁判上の決定の執行中に屬する未成年者は三つの範疇に分類され得る。

一つの國立刑務施設に於てその刑の執行に服するものは第一の範疇に屬し、社會事業を目的とする各種團體又は國家によりて公認せられたる輔成會に委託せられたるものは第二の範疇に、そして或る個人又は家庭に、若しくは未成年犯人自身の家庭に委託されたるものは第三の範疇に屬する。

第一の範疇に屬する未成年犯人に對しては、成年犯人に對して我々の提唱せる制度をまた等しく適用するの外はないと我々は考へる。

ただこの場合許さるべき唯一の制限は、處分し得る金額を一つの特別なる管理に附することである。何

民間社會事業團體のこれ等諸規則に對する違反は、市町村吏員、少年審判官——若しそれを存する場合には——地方警察、輔成會監察員及びその他によりて確認されるであらう。
 この違反事項に對しては、凡て緊急に處斷されねばならない。
 かくのとき組織は社會の一大災厄たる累犯豫防のために恐らく寄與するところか尠くないであらうと我々は考へる。

(第二部完)

國際行刑會議報告書集 五終

號數	年	月	司法資料表題
第一號	大正一〇、	一一	定型アル犯罪ノ調査(賭博編)
第二號	一〇、	一二	第二回國際少年保護會議議事録
第三號	一一、	一	國際刑事協會獨逸支部ニ於ケル保護視察制度創設ニ關スル會議議事録
第四號	一一、	二	米國ノ家庭裁判所
第五號	一一、	三	獨逸ニ於ケル檢事局及司法警察
第六號	一一、	四	米國ニ於ケル少年裁判所ト社會
第七號	一一、	五	第二回國際少年保護會議提出報告書第一集
第八號	一一、	六	英蘭及うえーるすノ警察
第九號	一一、	七	復權ニ關スル佛國法令
第一〇號	一一、	八	獨逸ニ於ケル調停手續ニ關スル規定佛國戰時家賃法伊國小作契約法
第一一號	一一、	九	英國ノ判事及ますたー論

第一二號	大正一一、一〇	英佛ノ辯護士法制
第一三號	一一、一一	獨逸ノ辯護士法制
第一四號	一一、一二	獨逸ニ於ケル監獄作業ノ經營竝ニ管理ニ關スル調査報告
第一五號	一二、一	辯護士倫理
第一六號	一二、二	獨逸國調停法草案及同理由書
第一七號	一二、三	英國監獄制度
第一八號	一二、四	獨逸國少年福利法草案同理由書及確定法文
第一九號	一二、四	獨逸國少年裁判所法草案及同理由書
第二〇號	一二、五	市加古少年裁判所ノ研究
第二一號	一二、五	勞働裁判法ニ關スル獨逸國裁判官會議議事錄及評論
第二二號	一二、六	(附) 統一的勞働法編纂委員會起草勞働裁判法私案
第二三號	一二、六	獨逸國ニ於ケル暴利取締法及活動ノ實況
		戰前ニ於ケル獨逸國ノ社會的立法(附) 丁抹ノ社會政策的立法概觀

第二四號	大正一二、七	獨逸國經營協議會法及關係法令集
第二五號	一二、七	獨逸國ニ於ケル賃率契約、勞働者及使用人委員會竝ニ勞働爭議ノ調停ニ關スル法制(附) 調停制度概觀
第二六號	一二、八	獨逸國ニ於ケル住宅及移住制度(附) 英國ニ於ケル農業小作紛議仲裁ノ實況
第二七號	一二、八	短期自由刑論
第二八號	一二、九	西班牙國假釋放ニ關スル法令集
第二九號	一二、九	獨佛英ニ於ケル商工業者ニ關スル特別裁判法制
第三〇號	一二、一〇	獨逸國勞働裁判所法草案及理由書
第三一號	一二、一〇	獨逸國少年裁判所法
第三二號	一二、一一	司法制度改良論
第三三號	一二、一一	獨逸新經濟法
第三四號	一二、一二	職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例
第三五號	一二、一二	職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例

(佛、伊、伯、蘭國之部)
(英國及瑞西之部)

第三六號	大正一三、一	職業組合、仲裁及仲裁裁判並ニ賃率契約ニ關スル立法例 <small>(丁抹、瑞典、諾威之部)</small>
第三七號	一三、一	英國ニ於ケル略式刑事手續及すこつとらんどニ於ケル刑事手續
第三八號	一三、二	佛國借家借地法
第三九號	一三、二	職業組合、仲裁及仲裁裁判並ニ賃率契約ニ關スル立法例 <small>(英國、加奈陀之部)</small>
第四〇號	一三、三	佛國監獄制度及同職員令
第四一號	一三、三	職業組合、仲裁及仲裁裁判並ニ賃率契約ニ關スル立法例 <small>(南亞之部)</small>
第四二號	一三、四	職業組合、仲裁及仲裁裁判並ニ賃率契約ニ關スル立法例 <small>(濠洲之部)</small>
第四三號	一三、四	職業組合、仲裁及仲裁裁判並ニ賃率契約ニ關スル立法例 <small>(米國之部)</small>
第四四號	一三、五	英國法律生活概要及同國ノ刑事控訴制度
第四五號	一三、五	英國裁判所構成論(一、英國裁判官ノ地位附司法行政機關)
第四六號	一三、六	英國裁判所構成論(二、英國ニ於ケル起訴官廳及辯護士ノ地位)
第四七號	一三、六	瑞西國辯護士法

第四八號	大正一三、七	露西亞事情
第四九號	一三、七	米國ノ刑罰制度
第五〇號	一三、八	獨逸國民事訴訟改正律令
第五一號	一三、八	英國裁判所構成論(三、下級裁判所ノ部 其一、治安裁判所)
第五二號	一三、九	英國裁判所構成論(四、下級裁判所ノ部 其二、州裁判所及檢屍官裁判所ノ組織)
第五三號	一三、九	英國裁判所構成論(五、中央審トシテノ英國高等法院ノ組織及權限)
第五四號	一三、一〇	佛國商事裁判制度
第五五號	一三、一〇	獨逸國ニ於ケル裁判所ノ組織及ヒ刑事手續ニ關スル法令
第五六號	一三、一一	英國裁判所構成論(六、地方審トシテノ英國高等法院及其他ノ上級裁判所ノ組織)
第五七號	一三、一一	獨逸國勞務契約法草案及評論(附)佛國勞働法正文